妖怪大図鑑
ようかいだいずかん
グラフィオ編

妖怪大図鑑
ようかいだいずかん
グラフィオ編
妖怪大図鑑
金の星社
ISBN978-4-323-07311-8
C8639 ¥3800E
9784323073118
1928639038005
定価(本体3,800円+税)
NDC388
図書館用堅牢製本
金の星社
妖怪大図鑑

妖怪大図鑑

ようかいだいずかん

グラフィオ編

もくじ

妖怪100体そろいぶみ！

この本では、日本の各地にあらわれたとされるおもな妖怪たちを、五十音順に紹介しているぞ。奇妙でふしぎで、ちょっとこわい……。そんな妖怪のおもしろさを存分にあじわっていただこう！

青坊主

【あおぼうず】

おもな出現場所
- 空家
- 古寺

体も服も真っ青 お坊さんの妖怪

大きなお坊さんのようなすがたをしているけれど、体も服も真っ青で、顔には大きな目がひとつ。だれもすまない家や寺にあらわれるらしいが、くわしいことはあまりわかっていない。

江戸時代の画家、鳥山石燕は、青坊主のすがたを、一つ目で中年のお坊さんのようにえがいている。これとにている妖怪に、「目一つ坊」というのもいるらしいよ。

しわだらけの顔にむさくるしくのびたヒゲ、ボロボロの草履ばき……。なんだか、だいぶおちぶれたかっこうをしている。この妖怪が空家にあらわれるのは、そのみすぼらしいふんいきが、自分にぴったりだとかんじているからかもしれないね。

垢嘗め

【あかなめ】

おもな出現場所
- 風呂場
- 部屋

風呂場の垢をなめる キレイずきな妖怪!?

人がねしずまった夜中、家の風呂場にあらわれて、たまった垢をペロペロなめる妖怪。全身が赤い子どものようなすがたで、長い舌をもつ。

昔の書物に、「垢ねぶり」という妖怪がでてくる。「ねぶる」とは、古い言葉で「なめる」という意味で、垢嘗めとおなじ妖怪だとされている。垢ねぶりは、家の中のよごれた場所からうまれて、ゴミや垢をたべてくらすんだ。

家をよごすと、垢嘗めがうまれて、そこにすみついてしまうというわけ。人に悪さをする妖怪ではないけれど、風呂にはいる時、そばにいられるとあまり気分はよくない。ふだんからキレイにして、ゆったりと風呂の時間を楽しめるようにしたいね。

小豆洗い

【あずきあらい】

おもな出現場所
水辺

小豆をあらう音がする正体不明の妖怪

「小豆とぎやしょか、人とって喰いやしょか、しょきしょき……」

不気味な歌声とともに、小豆をこすりあわせてあらう音がきこえるが、音のする場所にいってもだれもいない。

——これは、日本全国に広くしられる妖怪、小豆洗いの長野県での言いつたえだ。

「小豆とぎ」「小豆やら」「小豆ごしゃごしゃ」など、地域によって名前はさまざまだが、小豆をあらうような音がきこえるのは、どこもおなじ。米をとぐ音、洗たくをする音ともいわれるが、どちらにしろ正体のわからない音をたてる妖怪らしい。

昔の人は、夜の暗やみで正体不明の音をきいた時、この妖怪のしわざにしたのかも？

小豆洗いのよもやま話

きまった場所にあらわれる

小豆洗いがあらわれる場所は、小川のほとりや、井戸のまわり、台所のそばなど、水のあるところが多い。また、橋をわたる時には、橋の下から音がきこえることもあるとか。

昔の書物によると、江戸時代の入谷田圃（今の東京都台東区）にあった大名屋敷の前の橋は、小豆洗いがあらわれるというので、「小豆橋」とよばれたそうだよ。

食べ物の小豆が妖怪の名についた理由

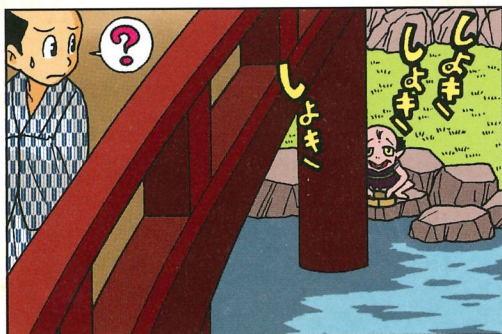
小豆洗いのほかにも、「小豆計り」や「小豆婆」など、日本各地に、名前に小豆の字をもつ妖怪がたくさんいる。

小豆は昔から日本人にとってなじみぶかい食べ物だけれど、なぜ小豆が妖怪の名前につけられたのだろうか？

あんこなどにつかう小豆は、その赤い色に魔をはらう力があり、神様にささげるとくべつな食べ物とされてきた。そして、神様への儀式をする時には、けがれをさけるため、ぜったいにやってはいけないということがいろいろあった。

だが、時代がたつにつれて儀式の意味がわすれられ、「やってはいけない」という気持ちだけが「こわい」というおそれとなってのこったようだ。

神様へのささげものだった小豆が、「こわい」というおそれとむすびついて、妖怪「小豆洗い」の言いつたえがうまれたともかんがえられているよ。

◀橋の下から小豆をあらう音がきこえたら、そこに小豆洗いがいるかもしれない。

ちょっとだけこわい話

小豆洗いをおこらせると……？

昔、島根県のあるお寺の近くに、「小豆とぎ橋」という橋があったという。

橋の下には、夜な夜な小豆をあらう女の妖怪があらわれた。そして、人間が橋の上で「杜若」という謡曲をうたうと、おこってたたるといわれていた。

ある日、こわい物しらずの侍が、「杜若」をうたいながら橋をわたって家にかえると、家の前に見しらぬ女がいた。女は侍に「あるじからのおくり物だ」といって箱をわたし、すぐに消えてしまった。侍が箱をあけると……。

中には、その侍の子どもの、切りおとされた首がはいっていたという。

後追い小僧

【あとおいこぞう】

おもな出現場所
山道

あとからトコトコ
不気味な気配

山道にでるといわれる妖怪。「山霊」ともよばれる。

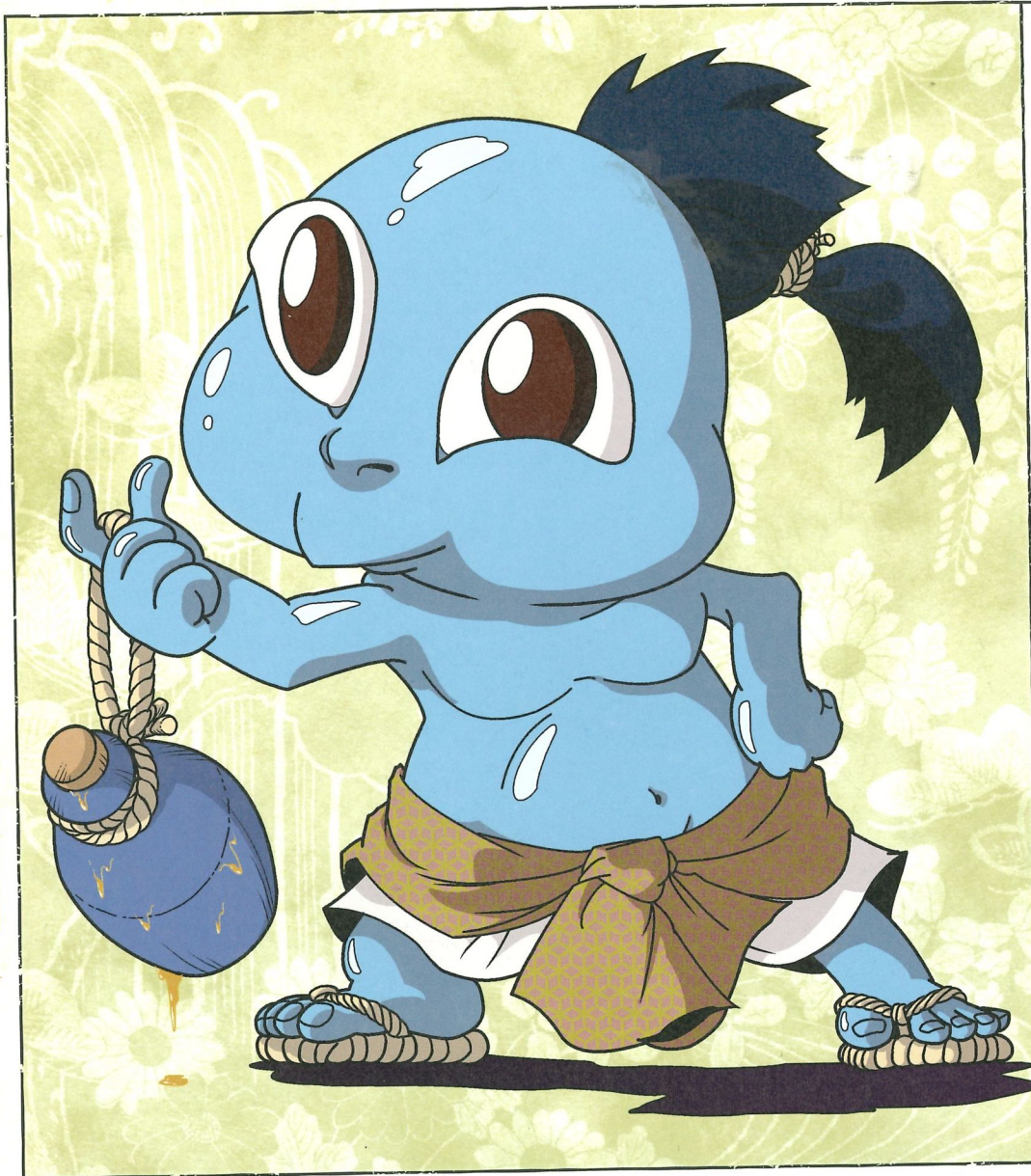
山道をあるいていて、だれかがうしろからついてくる気配がするが、ふりかえるとだれもいない。それは、後追い小僧のしわざだ。この妖怪は、人間に見られそうになると、すぐに木や岩のかげにかくれてしまうので、どんなすがたなのかわかっていないんだ。

あとからついてくるだけで、なにか悪さをするわけではないけれど、いつまでもついてこられると気味が悪いものだ。そんな時は、道に食べ物をおいておけば、ついてくる気配が消えてしまうというよ。

昼間にあらわれることが多いが、夜にあらわれる時は、提灯のようなあかりをともしてついてくるんだって。

油ずまし

【あぶらずまし】

おもな出現場所
峠道

うわさ話をすると
ひょっこりあらわれる

「うわさをすれば影がさす」ということわざがある。そこにいない人の話をすると、話題になった人がひょっこりあらわれるという意味だ。このことわざのような妖怪が、油ずましだ。

熊本県の草隅越という峠道で、おばあさんが孫に「昔、この道には油がめを手にさげた化け物がでたらしいよ」とはなしていた時、「今も、でるぞー」といいながら、油ずましがあらわれたらしい。

ほかの峠道でも、「血のついた手や生首があった」とはなしていると、「今も……」と声がして、血まみれの手と生首がおちてきたという。

話題になるのがうれしくて、つい顔をだしてしまうのは、人も妖怪もおなじかもね。

天邪鬼

【あまのじゃく】

おもな出現場所
山
里

うそつきでずるがしこい人に悪さをする子鬼

日本各地の昔話や伝説、神話や仏教の説話など、さまざまな話に登場する小鬼の妖怪。多くの話では、他人の心の中をよみとる力にすぐれ、わざと意見にさからったり、相手の口まねや物まねをしてからかったりする、ずるがしこいきらわれものとしてえがかれているぞ。

人間をだますことがすきで、人間に化けたりして悪事をはたらくが、最後には悪だくみがばれて、こらしめられる。そんな小悪党のように言いつたえられる天邪鬼だけれど、もとは、神話に登場する女神だという人もいる。また、口まねをしたり、山にあらわれたりすることから、「山彦」や「山姥」などとおなじ妖怪だともいわれているのだ。

天邪鬼のよもやま話

神様にふみつけられる

お寺にある仁王像や毘沙門天像など、仏教の神様が小鬼をふみつけている像がある。この子鬼は、天邪鬼だといわれているよ。神話や仏教の説話などでは、神様の正しさをしめすための悪役として、天邪鬼が登場しているんだ。

いろいろな天邪鬼

天邪鬼のよび名は、「アマンジャク」「アマンシャグメ」「アマンジャコ」「アマネジャク」など、地域によってちがいがある。また、言いつたえでは、炉の灰の中にいる妖怪とされたり、チャタテムシという昆虫、またはそのさなぎとされたりもする。

神奈川県や静岡県には、「巨人のような天邪鬼が、富士山をくずそうとして失敗し、その土が海にこぼれて伊豆大島になった」という伝説がのこされているよ。

これだけ言いつたえがちがうと、天邪鬼という妖怪は、じつは何種類もいるのかもしれないね。

もとのすがたは女神？

天邪鬼のもとのすがたは、『古事記』にしるされた「天稚彦神話」という物語に登場する、天探女という女神だったともいわれている。

この神話によると、天探女は、天稚彦という神につかえていた。あるじに忠実でかしこい天探女は、仕事をなまけていた天稚彦をたすけるために、天上のえらい神様をうらぎるようなおこないをしてしまった。

そのことから、天探女は魔女のようにかんがえられて、のちに天邪鬼になってしまったんだって。

◀仁王などの仏教の神様は、悪さをする天邪鬼をふみつけて、こらしめるという。

ちょっとだけこわい話

昔話「瓜子姫と天邪鬼」

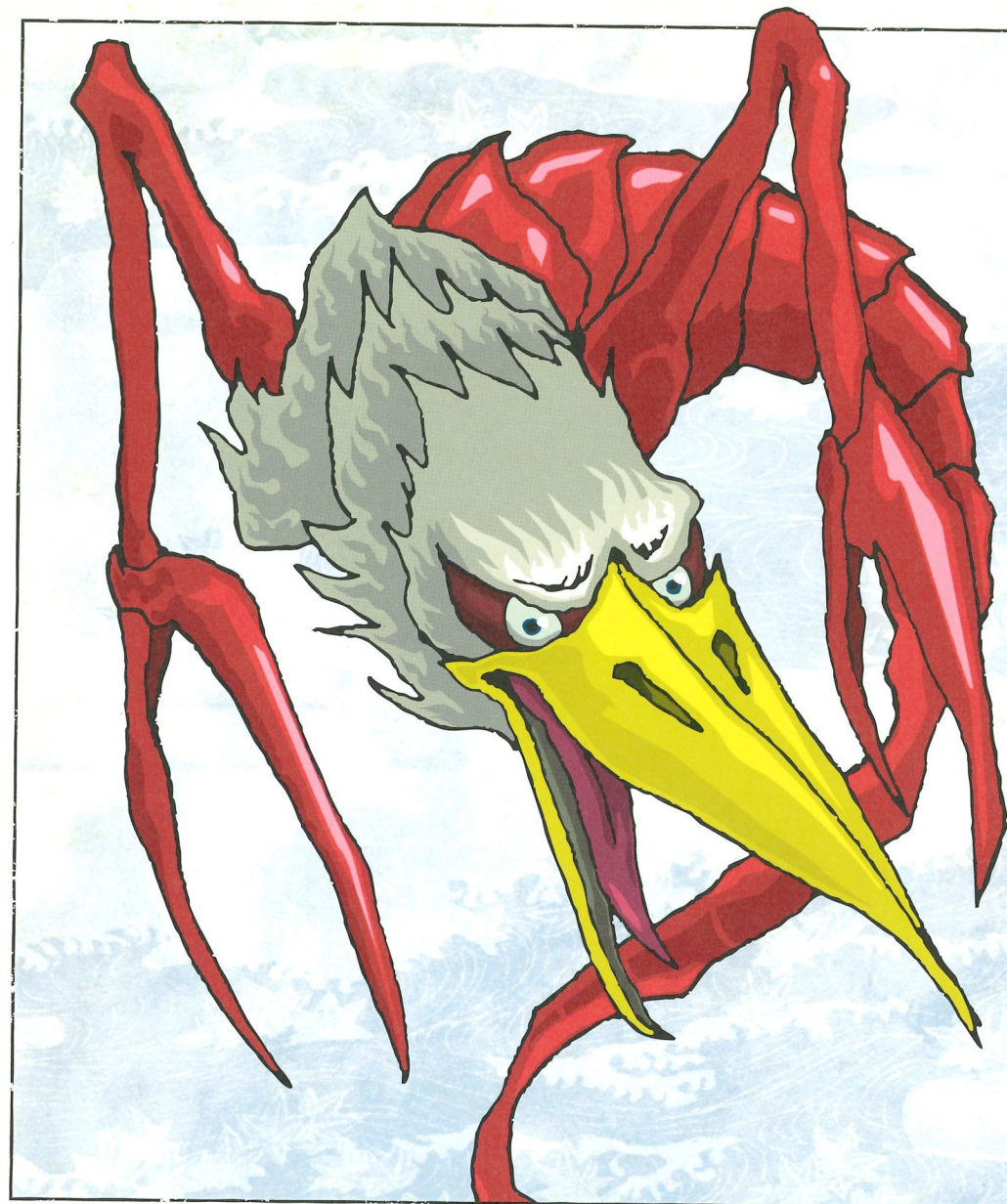
昔、おばあさんが川に洗たくにいくと、上流から瓜がながれてきた。おじいさんといっしょにたべようと家にもちかえると、瓜から女の子がうまれた。ふたりは、その子を瓜子姫と名づけて大切にそだてた。

ある日、瓜子姫が家で留守番をしていると、天邪鬼がたずねてきた。天邪鬼は言葉たくみに彼女を外にさそいだしておそいかかり、瓜子姫になりかわった。

その後、おじいさんとおばあさんは、瓜子姫の様子がおかしいことに気づく。おじいさんが、彼女の顔を手ぬぐいでこすると、その皮がはがれて、おそろしい天邪鬼のすがたが……。

網剪

【あみきり】

おもな出現場所
- 漁村
- 家

スパスパスパッ！切れ味ばつぐんの妖怪

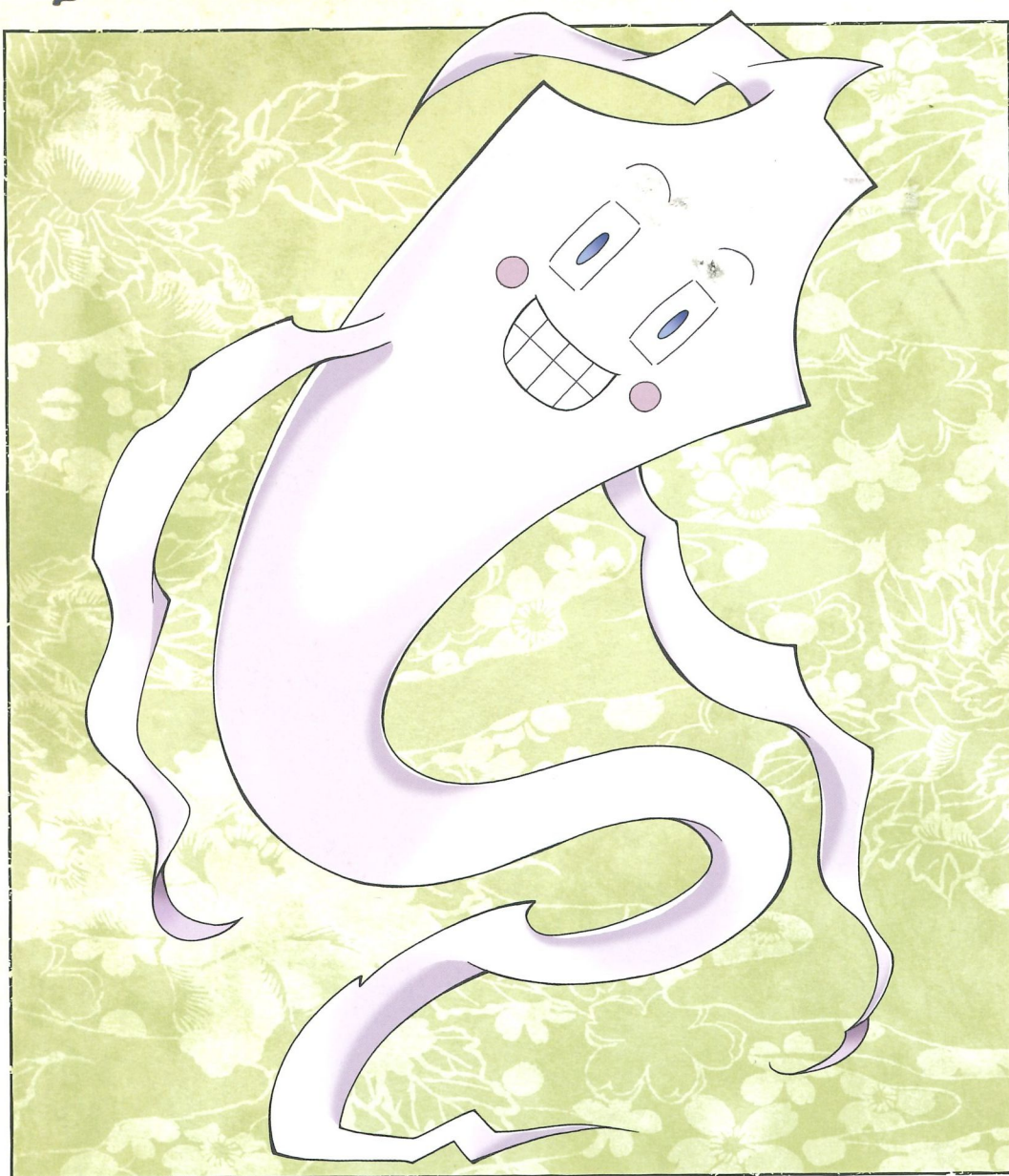
海岸でかわかしていた魚をとるための網や、蚊にさされないように寝床につっていた蚊帳が、いつの間にかズタズタに切られていることがある。網や蚊帳を切りさいた犯人は、妖怪の網剪だ。

網剪は、江戸時代の画家、鳥山石燕の絵では、海老のような体に蟹のようなハサミをもつすがたでえがかれている。これは、オキアミやアミエビなどの「アミ」と「網」をかけたシャレで、本当はどんなすがたか、よくわからないんだって。

この妖怪の名前は、漁師が網を修理する時につかう「網切りバサミ」という道具からつけられたようだ。じょうぶな網でもスパッと切断できる、するどいハサミだよ。

一反木綿

【いったんもめん】

おもな出現場所
- 空中
- 町

風にとばされた布？じつはこわ～い妖怪

布のようなすがたで空をとぶ妖怪。「反」とは布の大きさや土地のひろさの単位だが、布の大きさをあらわす場合、一反は長さ約十メートル、はば約三十センチメートルだ。

夕ぐれ時や夜に、細ながい体をたなびかせて、上空をフワフワとただよう。「風にとばされた洗たく物かな？」などと、のん気にながめていたらキケンだ。あっという間におそいかかってきて、首にまきついたり顔をおおったりして、ちっ息させられるぞ。

つかいふるされた布に魂がやどった妖怪だとかんがえられているけれど、昔、一反木綿におそわれた侍が刀で切ると、刃に血しぶきがついたという話もあるから、単なる布ではなさそうだ。

一本だたら

【いっぽんだたら】

おもな出現場所　雪山

雪の上にふしぎな足あとをのこす妖怪

おもに奈良県や和歌山県の、雪がふりつもった冬山にあらわれた妖怪。「一つだたら」ともよばれる。

雪の上に片足だけの足あとをつけるが、そのすがたにはさまざまな言いつたえがあり、大きな一つ目をもつ一本足の妖怪とも、柱に目と鼻がついた妖怪ともされる。

「たたら」とは、鉄などの金属をとかすために、足でふんで火に空気をおくる装置のこと。一本だたらの名前はそこからついたようで、たたらをふんでいた人の霊が化けた妖怪だともかんがえられている。

この妖怪は人に害をあたえないが、十二月二十日だけは別だ。この日に山にはいると、一本だたらにおそわれて命をおとしてしまうのだ。

一本だたらのよもやま話

足あとから正体をさぐる

雪の上にはっきりとのこされた、片方だけのナゾの足あと。それを手がかりにして、昔の人は、さまざまなすがたの一本だたらをおもいえがいたようだ。

長さ三十センチメートルもある人間のはだしの足あとが発見された時には、巨大な頭から太い一本の大足をはやした化け物が、けんけんをしながら山中をすすんだのではないかとかんがえられた。

また、まるい大きな穴が点てんとのこされていた時には、電柱のような長い柱のすがたをした化け物が、とびはねてすすんだのではないかとかんがえられた。

どちらも、けものの足あとや、木の枝から雪がおちたあととはかんがえにくいことから、妖怪のしわざだとされたようだ。

一本だたらとにている妖怪

高知県につたわる「たてくり返し」や「手杵返し」という妖怪は、木の柱や棒のようなすがたをしていて、くるくると宙がえりしながらすすみ、雪に足あとをのこすといわれている。

「猪笹王」という大猪が化けた「一本足」は、一本足の鬼の妖怪だという。

妖怪ではないけれど、各地の山の神様で、すがたが一本足だとつたえられているものも多いようだ。

また、山にでる「カシャンボ」という妖怪を、一本だたらとよぶ地域もある。

一本だたらは、いろいろな山の伝説と関係がある妖怪なのかもしれない。

◀雪の上にのこされた不可解な足あとから、いろいろなすがたが想像されたようだ。

ちょっとだけこわい話

猪笹王と「果ての二十日」

昔、和歌山県のある温泉宿に、足に傷をおった野武士がきた。野武士は、じつは大猪の猪笹王の亡霊で、「自分をうち殺した猟師に復讐したいから、力をかせ」と、宿の主人にせまった。主人がそれをことわると、おこった野武士は一本足の鬼のすがたになって、すみかの伯母ケ峰で旅人をおそうようになった。

そこで、丹誠上人というお坊さんが伯母ケ峰に地蔵尊をまつり、鬼をふうじこめた。だが、年に一度、十二月二十日だけは鬼を自由にする約束をした。それ以来、この日は「果ての二十日」とよばれ、入山してはいけない日とされている。

牛鬼

【うしおに】

おもな出現場所
山
海岸

牛と鬼の体をもつ凶暴で残忍な妖怪

近畿、中国、四国、九州などにあらわれる妖怪。「ギュウキ」や「ゴキ」ともよむ。そのすがたは、「頭が鬼で体が牛」、「頭が牛で体が鬼」、「頭が牛で体が蜘蛛」など、さまざまな説がある。

牛鬼は、力が強くてとても凶暴な性格をしている。川や海などの水辺からいきなりあらわれ、人や家ちくにおそいかかって喰い殺すという。和歌山県にあらわれた牛鬼は、出会っただけで人を病気にしたり、人の影をなめて殺したりすることもできたらしい。

平安時代に清少納言が書いた『枕草子』にも、「名前がおそろしいもの」のひとつとして、牛鬼のことがしるされている。それほど昔からおそれられていた妖怪なのだ。

う ― うしおに

牛鬼のよもやま話

牛鬼があらわれる場所

牛鬼は、山の中では、川の淵にあらわれるらしい。淵とは、ながれがゆるやかなところにある、底のふかい場所だ。四国や近畿には、牛鬼があらわれたことから「牛鬼淵」や「牛鬼滝」などと名づけられた場所がいくつかある。

牛鬼は、瀬戸内海の海辺にもあらわれたようで、岡山県の「牛窓町」や、山口県の「牛島」などは、牛鬼に由来する地名ともいわれているよ。

海からくる時は女の妖怪とともに

山陰や九州の牛鬼は海からあらわれることが多く、その時は「濡れ女」や「磯女」など、女の妖怪といっしょにくるらしい。

女の妖怪から赤ん坊をだいていてほしいとたのまれ、うっかりうけとってしまうと、赤ん坊がなきながらどんどん重くなっていく。重みで人間がうごけなくなったところへ牛鬼があらわれ、おそいかかるのだとか。

時には、女の妖怪といっしょではなく、牛鬼が美女に化けて人間をだますこともあるらしいぞ。

牛鬼の祭り

愛媛県宇和島の一帯では、大きな牛鬼の作り物が町をねりあるく祭りがある。そこでは、牛鬼は人をたべる妖怪ではなく、神様のとおり道にたむろする魔物をおいはらって、道をきよめる霊獣とされているんだ。

この牛鬼の作り物に頭をガブリとかんでもらうと、かしこくなれるらしいよ。

◀牛鬼は、川の淵や滝つぼ、海辺などからあらわれたとつたえられている。

ちょっとだけこわい話

「牛鬼」とよばれるナゾの物体

牛鬼とよばれるものには、こんな話もある。

出雲の国（現在の島根県東部）のある谷川に、牛鬼がでる橋があった。雨がつづくと、橋の近くで牛鬼に出会うのだという。

鵜飼半左衛門という人がその橋にいった時、白くひかる物体がいくつもあらわれ、蝶のように体や服にまとわりついてきた。あわてて近くの民家へにげこみ、わけをはなすと、家の主人はしんみょうな顔をして、「それは牛鬼だ」といった。

主人のすすめで、白くひかる物体のついた体や服をいろりの火であぶると、その物体はいつの間にか消えていたという。

産女

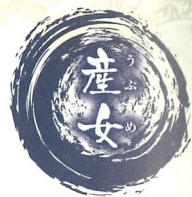
【うぶめ】

おもな出現場所
夜道
川辺

子どもと死にわかれたかなしい女の妖怪

ずっと昔の話だけれど、おなかに子どもをやどしたまま亡くなった女性や、子どもをうんですぐに亡くなった女性が、その後、妖怪の産女になることがあったという。

産女は、夜の川辺などでかなしげに赤ん坊をだいていて、とおりかかった人に赤ん坊をあずけてどこかへいってしまう。うけとった赤ん坊はどんどん重くなり、最後には、だいている人をおしつぶしてしまうのだ。

産女が赤ん坊を人にあずけるのは、理由があるようだ。自分と赤ん坊が成仏するために念仏をとなえにいくためだとされたり、みだれてしまった髪にくしをとおしにいくためだとされたり、いくつかの言いつたえがあるみたいだよ。

産女のよもやま話

産女が怪力をさずけてくれる

赤ん坊をしっかりだいて、重みでおしつぶされずにがんばると、産女が怪力をさずけてくれるという言いつたえもあるよ。

長崎県では、産女からさずかった怪力は、代々、女の子にうけつがれていくという。秋田県では、産女がくれた力を「オボウヂカラ」とよぶ。力をさずかった人は、他人からは、手足が四本ずつあるように見えるんだって。

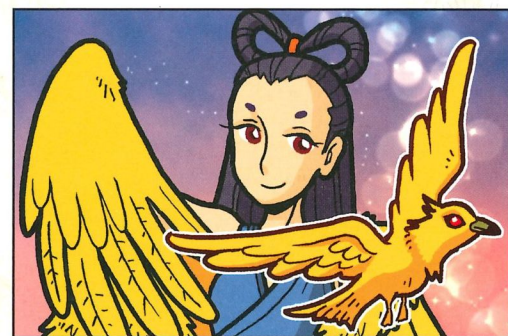
物語にでてくる産女

平安時代にしるされた『今昔物語集』に、産女が登場しているよ。

武士の卜部季武が、産女がでるという川へきもだめしにいった。すると、川の中から産女があらわれ、だいていた赤ん坊を季武にあずけた。季武が赤ん坊をつれて館にもどると、赤ん坊は木の葉にかわっていた、という物語だ。

季武は、源頼光とともに妖怪の「酒呑童子」を退治したことでもしられる。季武の実力は、産女からさずかったものかもしれないね。

中国の「姑獲鳥」と日本の「姑獲鳥」

茨城県のあたりでは、昔、産女を「ウバメトリ」とよんで、子どもに害をあたえる魔の鳥としていた。ほかにも、「オゴメ」や「ウンメドリ」など、産女を鳥のようによぶ地域がある。これは、中国の伝説上の鳥「姑獲鳥」が、人や子どもを害するという話が日本につたわり、産女の話とまざったとかんがえられている。それで、日本では「姑獲鳥」も「姑獲鳥」とよむようになったんだ。

◀「姑獲鳥」と書く時、鳥のような翼をもつ女性の妖怪としてえがかれることもある。

ちょっとだけこわい話

産女に愛された与七の命

ある屋敷の下女が、子どもを身ごもって、すぐに死んだ。

下女には、与七という恋人がいたが、彼の部屋に、産女になった下女が夜ごとやってくるようになった。与七が引っこしても産女は場所をさがしだしてやってきて、お経をあげてもらっても効果はなかった。

与七はしだいにすい弱していき、命がいよいよあぶなくなった時、「産女がしたう男の下着をおいておけば、あらわれなくなる」という話をきいた。与七が自分の下着を窓にかけてねると、翌朝、下着がなくなっていて、産女はあらわれなくなったという。

海坊主

【うみぼうず】

おもな出現場所
海
磯

船をしずめる黒く大きな巨体

出会った船をこわしてしずめるため、各地の船のりや漁師に昔からおそれられてきた海の妖怪。あおぎ見るほどの巨体で、大波をたてて海上にあらわれ、大きな目で船をギロリとにらみつけるという。

「海法師」「海座頭」「海入道」「海和尚」など、さまざまな別名があるが、海の妖怪をまとめてよぶ時の名前が「海坊主」だとする説もある。

海坊主は、月末や大みそかやお盆などに船をだすとあらわれるといわれた。そういった日は、多くの地域で、船にのることが禁止された。

昔から、海にでる人間にはたくさんのルールがあった。海坊主は、そのルールをやぶった人間にばつをあたえるのだともいわれている。

煙々羅

【えんえんら】

おもな出現場所
家
町

たちのぼる煙が化けたナゾの妖怪

江戸時代の画家、鳥山石燕がつたえている、煙の妖怪。たちのぼる煙に、人の顔があらわれている。石燕の解説によると、「蚊を追いはらうためにたいた煙があつまり、あやしい形になった。うすい布が風にたなびくようなすがたなので、煙々羅と名づけた」とある。「羅」とは、うすい織物のことだ。

石燕の解説以外には、言いつたえがほとんどない。なにをするのか、どんな性格なのか、まったくわからないんだ。

でも、今とちがって、昔は生活に火をたくことが多く、煙があちこちからあがっていた。この妖怪も、いろいろな場所でゆらりゆらりとたちのぼっては、不気味にわらっていたのかもしれないね。

長壁

【おさかべ】

おもな出現場所
城

古城の天守閣にひそむ あやしくうつくしい姫

兵庫県に今もある姫路城の、一番上にある天守閣にいたとされる妖怪。「長壁姫」（刑部姫／小刑部姫）ともよばれ、身分の高い女性であることがうかがえる。

姫路城の天守閣でなにをしていたかはあきらかになっていないが、古い書物には、僧侶が毎日お供え物をあげて、城主と年に一度対面すると書かれている。どうやら、城の守り神とされていたらしい。

その正体は、狐とも、天武天皇の孫娘ともいわれている。八百もの配下をあやつり、人間を自由にもてあそぶ能力をもつという説もある。

剣豪の宮本武蔵が天守閣にいた別の妖怪を退治した時、長壁があらわれて、ほうびに刀をさずけたという話もある。

おさん狐

【おさんきつね】

おもな出現場所
町
里

美女に化けて 男をたぶらかす牝狐

狐が人間を化かす話は日本全国にあるけれど、中国地方などで、おもに夕方や夜にあらわれた化け狐が「おさん狐」とよばれた。美女に化けることが多かったので、牝の狐だといわれているよ。

「おさん狐」の名前をもつ狐は各地にたくさんいたが、広島県にあらわれたおさん狐は五百匹の子分をもち、京都の伏見稲荷大社から神様の位をもらうほど実力があったらしい。大阪にあらわれた「お三門真の昼狐」というおさん狐は、夕方や夜だけでなく、昼間にも化けてでて、人をだましたそうだ。

今でも、とびきりの美女に化けて、なにくわぬ顔で人間社会にとけこんでいるかもしれないよ。

オッケルイペ

【おっけるいぺ】

おもな出現場所
家
川辺

強烈なおならをするこまった妖怪

北海道のアイヌ民族につたわる妖怪。「オッケオヤシ」ともよばれる。アイヌ語で、「オッケ」は「おならをする」、「ルイ」は「強烈な」、「ペ」は「者」という意味で、強烈なおならをする妖怪ということだ。オッケオヤシの「オヤシ」は「お化け」という意味だよ。

すがたを見せずに、家のいろりのそばで、おならのような音とにおいをまきちらすという。何度もされてこまる時は、自分もおならをするか、おならをまねて「ポア」というとにげだすそうだ。

そのすがたは、黒い狐のようだといわれる。若い男に化けて川にあらわれることもあるみたい。いきなりおしりをつきだして、おならで舟をこわすんだって。

おとろし

【おとろし】

おもな出現場所
神社

巨大な顔が鳥居の上からドスン！

江戸時代の画家、鳥山石燕がつたえている、巨大な顔をした妖怪。「おどろおどろ」などともよばれている。

大きな目と鼻をもち、ほほまでさけた口からは太い牙がのぞいている。まるで獅子舞の獅子のような顔で、長くのびた髪の毛が全身をおおっている。

石燕の絵で、おとろしは、神社の鳥居の上にのっている。神社にいたずらをするものには、鳥居の上からおちてきてこらしめる、などといわれることが多い。でも、本当はどんな妖怪なのか、よくわかっていないんだ。

「おとろし」も「おどろおどろ」も、おそろしいという意味。正体不明だけれど、おそろしい妖怪ということだね。

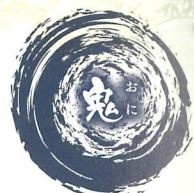
鬼【おに】

牛の角に虎皮の腰まき 怪力で巨体の有名妖怪

きみたちは、「鬼」といわれてどんなすがたをおもいうかべる？　頭に角があり、赤い体、黄色と黒のしまもようの腰まき、手には金棒……。昔話や節分の豆まきでも、おなじみのかっこうだね。

鬼がそのすがたになったのは、江戸時代だという。当時、今でいう北東にあたる「丑寅」は、なにか不吉なものがくる方角とされていた。その丑寅をもじって、牛のような角をはやし、虎皮の腰まきをした鬼がえがかれるようになったというわけだ。

そもそも、鬼という言葉は、目に見えないものをさす「隠」という言葉がなまったもの。それが長い時間をかけて目に見える鬼のすがたとなり、人の心に根づいたらしいよ。

鬼のよもやま話

さまざまなものを鬼とよぶ

昔は、人間にとってありがたくない、さまざまなものを鬼とよんだ。たとえば、「窮鬼」は、人を貧乏にさせる貧乏神。「疫鬼」は、人に病をはこぶ疫病神。「冤鬼」は、無実の罪で殺された人の、うらみをもった霊のこと。

どれも、今でいう鬼とはちがうけれど、ふしぎな力で人間を不幸にするものたちだ。

「鬼」は中国からやってきた？

「鬼」という字は、もともと中国からわたってきたものだ。中国では、人の魂は死んだあとにふたつにわかれ、ひとつは天にのぼり、もうひとつは地面にかえるとされていた。この、地面にかえる魂が成仏できずに化けた幽霊のことを、「鬼」とよぶんだ。

中国のホラー映画などに登場する「キョンシー」とよばれるゾンビも、鬼の一種とされているよ。

人の心が鬼となる

人の欲望やうらみの心が、鬼をうみだしたという話ものこされている。

あるお寺の若いお坊さんが、毎晩、鬼に化けた。でも、朝がくると、もとの人間のすがたにもどっているという。

そのお坊さんの部屋をしらべると、女性からのたくさんの恋文が見つかった。なんと、その恋文は、女性が自分の血で書いたものだった。

あまりにも強すぎる女性の恋心が、お坊さんを鬼のすがたにかえてしまったという話だよ。

◀うらみ、にくしみ、ねたみ、失恋などの強い感情が人間を鬼にするともいわれる。

ちょっとだけこわい話

生きたまま鬼にされた男

昔、蜂谷孫太郎という男がいた。家が金持ちで商売や畑仕事をする必要がなく、毎日学問ばかりしていた。神仏や幽霊、妖怪などをいっさいしんじないで、そのような話をする相手には、書物の知識をひけらかして、いいまかしていた。

ある時、孫太郎は鬼たちのすむ谷にまよいこんでしまった。孫太郎の日ごろのおこないをしっていた鬼たちは、自分の体の一部を孫太郎にとりつけた。角をはやし、鬼そのもののすがたにされた孫太郎。生きて家にもどることはできたが、人前にでることができないで、ついには断食して死んでしまったという。

お — おんもらき

陰摩羅鬼

【おんもらき】

おもな出現場所　寺

死体が化けた奇怪な鳥の妖怪

陰摩羅鬼は、日本や中国の古い書物に登場する妖怪だ。鳥のようなすがたで、目はロウソクやたいまつの火のようにひかり、かん高い鳴き声をあげるという。口からは、ほのおをはきだすともいわれている。

書物によれば、お寺にあずけられた死体が十分に供養されていないと、化けて陰摩羅鬼になるとされている。

お寺のお堂でいねむりをしていた男の前に陰摩羅鬼があらわれ、鳴き声でおこされたことがあるという。また、お坊さんがお経をあげるのをなまけている時にも、陰摩羅鬼があらわれたそうだ。

お寺で不まじめなまねをしていると、陰摩羅鬼がしかりにやってくるのかも？

か — かいなで

カイナデ

【かいなで】

おもな出現場所　便所

トイレでおしりをペロ～ンとなでる

節分の夜にトイレにいくと、なにかがおしりをペロ～ンとなでてくる。これはカイナデのしわざ。おもに、京都につたわる妖怪だ。出会いたくない人は、「赤い紙やろうか、白い紙やろうか」とトイレでとなえるといい。カイナデになでられずにすむ呪文だ。

節分の夜は、昔、大みそかのような年越しの意味があった。その日の夜には、日本の各地でトイレの神様をまつる行事がおこなわれていたんだ。そのトイレの神様が、カイナデになったともいわれている。

昭和のはじめごろ、夜の学校のトイレにカイナデがあらわれるといううわさが広まった。この時は、人を殺す妖怪だといわれ、全国の子どもたちからおそれられたんだって。

火車

【かしゃ】

おもな出現場所
里
墓場

死体をさらう地獄からの使者

お葬式で死者のはいったかんおけをはこびだそうとする時、とつぜん空が黒雲におおわれ、嵐がまきおこる。やがて嵐がやむと、かんおけの中の死体がいつの間にかなくなっている……。

これこそ、地獄からきた妖怪、火車のしわざだ。生前に悪事をはたらいた人を地獄へつれていくのだ。

火車は、日本全国で広くしられていた妖怪で、よび名は「キャシャ」「クワシャ」「テンマル」「マドウクシャ」「肝取り」など、さまざまある。

鬼たちが罪のある死者をのせて、地獄へはこぶという荷車がある。それは「火の車」とよばれるが、火車は、地獄の「火の車」とおなじはたらきをする妖怪なのだ。

火車のよもやま話

猫のすがたの火車

火車は、猫のすがたをしているといわれる。なぜ、地獄からの使者が猫のすがたをしているのか？

ある言いつたえでは、「猫がかんおけをまたぐと、中の死体がおきあがる」とされ、また、別の言いつたえでは、「猫は、葬式をおそって死体をうばう」とされていた。そのため、昔は、猫を死体や葬式に近づけてはいけないと、いくつかの地域でいわれていたのだ。

どうやら、猫と死者にはなにか関係があるようだ。その関係が、死者をのせてはこぶ、地獄の荷車「火の車」とむすびついて、猫のすがたをした火車がうまれたのかもしれない。

悪人は生きたまま地獄いき

火車は、死者の体をうばうだけではないらしい。欲ぶかくてやさしさのない人間は、火車が、生きたまま地獄につれていくんだって。

昔の書物には、生きている悪人が火車につれさられたという目撃談が、いくつもしるされているよ。

古くからつたわる「火の車」

妖怪の火車のもとになった「火の車」は、十三世紀ごろにまとめられた『宇治拾遺物語』という書物に、「地獄の鬼が罪人の死体をのせてはこぶ、もえさかる車」としてえがかれている。

今でも、家計にこまることをあらわす時、「火の車」という表現がつかわれるが、もえさかる車にのって地獄にいくほど、お金がなくてくるしいという意味なんだ。

◀「火の車」にのせられた罪人は、もえさかるほのおに焼かれて苦痛にあえぐという。

ちょっとだけこわい話

「火車がでた」ことは身内だけの秘密

火車がでたという話は、本当はもっとたくさんあるにちがいない。だが、その多くは何事もなかったかのようにとりつくろわれる。

だれもがしたっていた村の名士が死に、村中の人があつまって葬儀がおこなわれた。そのさなか、とつぜん嵐におそわれたが、すぐにぴたりとやんだ。

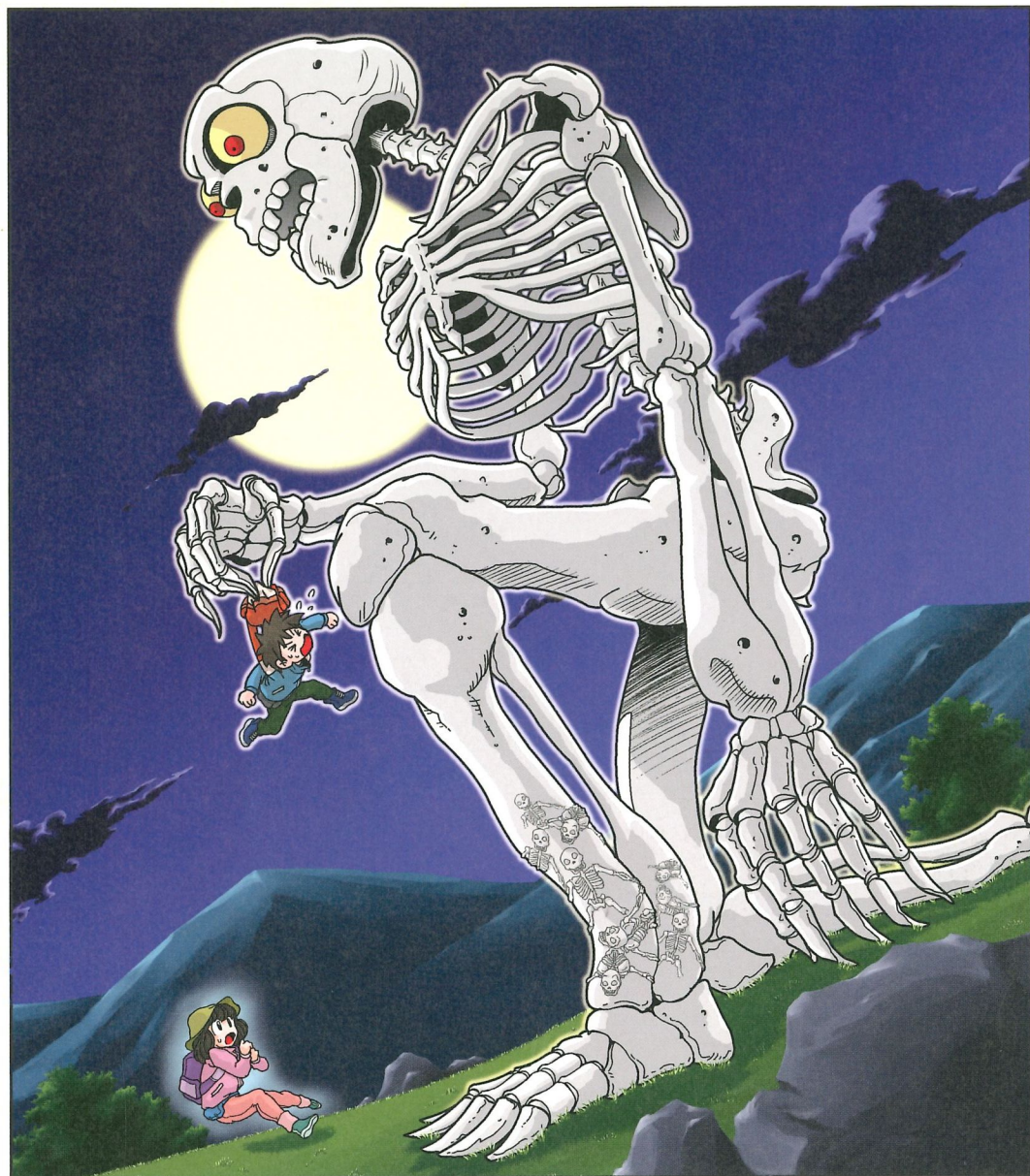
だれかが「あっ」と声をあげた。かんおけのふたがはずれ、死体がなくなっている。それを見て、みんなが火車のしわざとさとした。

その後、からのかんおけのまま、葬儀がつづけられた。この村の名士がじつは悪人だったなんて、よそにしられてはいけないのだ。

か ― かしゃ

がしゃどくろ

【がしゃどくろ】

おもな出現場所
野原

がい骨があつまった巨大な骨の妖怪

野原などにすてられたたくさんのがい骨に、死者たちの怨念があつまり、一体の巨大ながい骨の妖怪になったのが、がしゃどくろだ。「どくろ」とは、頭の骨のことだよ。

真夜中にガシャガシャと音をたててうごきまわり、生きている人間を見つけるとおそいかかって、巨大な手でにぎりつぶして喰らうという。

がしゃどくろという名前は今から数十年前につけられたものだが、がい骨の妖怪のことは、多くの古い書物に、いろいろしるされている。

江戸時代の画家、歌川国芳が、巨大な体をもつがい骨の浮世絵をかいた。この絵が有名になったことで、がしゃどくろも巨大なイメージがついたようだ。

カシャンボ

【かしゃんぼ】

おもな出現場所
山

山で河童が大変身いたずらっ子の妖怪に

和歌山県や三重県の山の中で、冬にあらわれる、人間の子どものようなすがたをした妖怪。「カシャボ」や「カシランボウ」ともよばれる。頭のてっぺんに毛をのこした坊主頭で、青い服をきているという。足が一本だとか、水鳥のような足あとをのこす、などの言いつたえもあるぞ。

カシャンボは、河童の一種の「ゴーライ」という妖怪が、山にはいったものだといわれている。河童とおなじくいたずらずきで、山で仕事をする人の作業をじゃましたり、牛や馬をかくしたりするよ。

「ゴーライ」は、はだかで川にくらしている。冬がきて水がつめたくなると、服をきたカシャンボになって、山にうつりすむみたいだ。

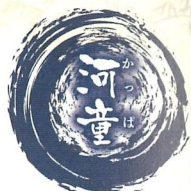
河童

【かっぱ】

おもな出現場所
川
池

どこの水辺にもいる日本妖怪の代表選手

河童といえば、背中に甲羅、手足にヒレ、頭に水のはいった皿……。だいたい、こんなイメージじゃないかな？　でも、日本全国にいるだけあって、外見も特徴もさまざまな言いつたえがある。皿のない河童や、全身毛むくじゃらの河童。水辺の生き物や川にすてられた人形が河童になったというものや、水の神様がおちぶれて河童になったというものなど。とにかく、いろいろな河童がいるみたいだ。

ほとんどの河童にいえるのは、相撲が大すきで、キュウリや人間の尻子玉が好物ということ。とくに相撲は、河童が勝つまでやめさせてくれないほどだ。もっとも、河童は相撲がすごく強いので、人間にはなかなか負けないけどね。

河童のよもやま話

尻子玉ってなに？

尻子玉とは、人間のおしりの中にあるとされていた内臓のこと。実際には存在しない、想像上の臓器だ。「川にはいると、水中にひそむ河童におしりから手をつっこまれて尻子玉をぬかれる」と、昔はよくいわれていた。尻子玉をぬかれた人は、生きる元気をうしない、なにもかんがえられなくなったり、弱って死んでしまったりするんだって。

キュウリと相撲がすきなわけ

河童は、なぜキュウリと相撲をこのむのか？　それは、河童がもともと水の神様だったとかんがえられていたからのようだ。水の神様へのお供え物は、古くからキュウリときまっていた。そして、相撲は、神様にささげる儀式だったというよ。

ちなみに、力が強い河童に相撲で勝つためには、勝負の前にペコリとおじぎをすればいい。河童もつられておじぎをして、皿の水をこぼしてしまう。皿の水をうしなった河童は、全身の力がぬけてしまうんだって。

「河童石」伝説

九州を中心とした西日本のさまざまなところに、「河童石」とよばれる石がある。

九州の河童は、春には里にきて、秋には山にはいるという。河童石は、その移動のとちゅうで河童がたちよる大事な場所なんだって。

これは、山の神様が春に里へおりてくる時、石にやどるという話が変化したものらしい。この伝説でも、河童と神様につながりがあるようだね。

◀河童と相撲をとる時、皿の水をこぼさせてしまえば、人間でも勝てるかもしれないという。

ちょっとだけこわい話

河童の秘薬

出口奥右衛門という侍が、ある夜、便所でなにかに尻をなでられた。見ると、下から手がでている。奥右衛門はその手をつかみ、刀で切りおとした。

次の日の夜、家の庭に河童があらわれ、手をかえしてほしいといった。切った手は河童のものだったのだ。奥右衛門は、二度と悪さをしないと約束させて、手をかえしてやった。そして、切られた手をどうするのかとたずねると、河童は、どんな傷でもなおせるとくべつな薬で、もとどおりにくっつけるのだといった。

奥右衛門は、河童から薬の作り方をおそわり、代々それをつたえて、村人をたすけたという。

鎌鼬

【かまいたち】

おもな出現場所
平地
野原

つむじ風にひそむ両手が鎌のイタチ

強い風の日、地面の近くをうずのようにグルグルとまわる、つむじ風を見たことがないかな？　鎌鼬は、そのつむじ風の中にひそんでいて、人の体を切りさく妖怪だ。ふしぎなことに、その切り傷は、たいした痛みもなく、血もほとんどでないんだ。

鎌鼬のすがたは、両手、または四本の手足が鎌になっているイタチとしてえがかれる。日本各地にあらわれる妖怪だけれど、地域によって、その言いつたえにちがいがあるようだ。おそらく、風とともにあらわれる鎌鼬のスピードがあまりにもはやいため、すがたを見るのがむずかしいからだろう。つむじ風を見つけたら、鎌鼬のすがたをたしかめるチャンスかもしれないぞ。

鎌鼬のよもやま話

三体の神様のチームワーク

岐阜県にあらわれる鎌鼬は、三体一組の悪い神様としてつたえられている。この三体が風の中にひそみ、みごとなチームワークで人間をおそっているのだ。

まず、最初の神様が人間をころばせる。すかさず、二番目の神様が、するどい鎌の刃で人間を切りつける。最後の神様は、その傷口に血止めの薬をぬりつける。

あまりのはやわざで、おそわれた人にとっては、一瞬のできごとにかんじるそうだ。

鎌鼬？　構太刀？

鎌鼬がイタチの妖怪ではなく神様だとする説は、ほかにもある。

古い書物によると、鎌鼬は「構太刀」と書き、実体は刀をかまえているおそろしい神様だという。

その神様がもつ刀は、どんなものでも、ちょっとふれただけでスパッと切りさくほどするどい。つむじ風にまきこまれた人間は、鋭利な刀に体があたったことで、ふかい切り傷をつくってしまうんだって。

カレンダーと鎌鼬のふしぎな関係

新潟県や長野県には、こよみ（今でいうカレンダー）をふんでしまうと、鎌鼬におそわれるという言いつたえがある。また、東北地方では、鎌鼬にやられた切り傷に黒く焼いたこよみをはると、すぐになおるとされているよ。

カレンダーと鎌鼬との間には、人間にはわからない、なにかふかい関係があるのかもしれないね。

◀鎌鼬の正体は三体一組の神様ともいわれる。この三体は兄弟、または親子だという。

ちょっとだけこわい話

鎌鼬の切り傷で命をおとすことも

痛みがなく、血もでないとされている鎌鼬による切り傷。しかし、その傷がもとで、命をおとしたという話ものこされている。

つむじ風がやってきて、気がつくと、太ももにふかい切り傷をおっていた。痛みも出血もないため、鎌鼬のしわざだとわかった。

しかし、数時間後、傷が熱をおびるように痛みだし、血がにじみはじめた。みるみる出血の量がふえていき、やがてふきだすほどになった。その人は、手当てをする間もなく、死んでしまったという。

その切り傷は、太ももの肉のふかく、骨までたっしていたそうだ。

髪切り

【かみきり】

おもな出現場所
町
夜道

いつの間にかバッサリ髪だけを切る妖怪

昔は、今のように街灯や懐中電灯がなかったから、夜はまわりがまったく見えないほど真っ暗になった。そんな夜の道をあるいている時、気づかないうちに、髪の毛をバッサリと切られてしまうことがあったという。

これは、妖怪の髪切りのしわざで、江戸時代の町中によくあらわれたらしい。

暗やみにでる髪切りのすがたは不明な点が多いが、昔の絵巻物には、くちばしがあり、両手にハサミをもつ妖怪としてえがかれている。その正体は、カミキリムシや、いたずらずきな狐などともいわれたようだ。

人間の命こそねらわないが、キケンな妖怪であることはたしかだ。

傘お化け

【からかさおばけ】

おもな出現場所
町
夜道

ピョンピョンはねる一本足の傘の妖怪

ものに魂がやどってうまれた妖怪はたくさんいる。傘お化けもそのひとつだ。軒先や物置にたてかけていた傘が、とつぜん、大きな一つ目をギョロリと見ひらき、二本の腕をはやす。もち手の部分は足にかわって、ピョンピョンとはねまわるんだって。腕がないものとか、目がふたつあるものもいるというよ。

傘お化けは、江戸時代の絵画やかるたなどにたくさんかかれているけれど、出会ったという人の話は、ほとんどないそうだ。だから、どんな力をもつ妖怪なのか、よくわかっていないんだって。

どうやら、傘お化けは人に悪さをしない妖怪みたい。とはいえ、夜道でいきなり出会ったら、やっぱりこわいね。

川姫

【かわひめ】

おもな出現場所
川辺

川にたたずむ 美人だけどこわい妖怪

川姫は、高知県や福岡県などにつたわる妖怪だ。その名のとおり、川にあらわれる女の妖怪で、とても美人だといわれている。

昔、若い男たちが川のそばの水車小屋にあつまってあそんでいる時、うつくしい川姫があらわれたそうだ。男たちがうっとり見とれていると、川姫が男たちの元気をすいとってしまったんだって。

川姫が、川の上をあるいていたという目撃談もある。平然と水面をあるき、ふとたちどまると、すごいジャンプ力で橋の上にとびのったという。

川姫とにている妖怪に「川女郎」というものがいる。こちらは、大雨で川があふれることをしらせてくれる、ありがたい妖怪なんだそうだよ。

加牟波理入道

【がんばりにゅうどう】

おもな出現場所
便所

トイレをのぞく かわった妖怪

トイレにはいっている時、だれかに見られた気がしたら、それは加牟波理入道にのぞかれているのかもしれない。トイレの窓からのぞきこむなんて、なんだかいやらしい妖怪だ。

江戸時代の画家、鳥山石燕は、この妖怪のすがたを、便所をのぞきながら鳥をはきだしているという、ふしぎなすがたにえがいたよ。

昔のトイレは、地面にほった穴や小川の上に、足をのせる板をわたしただけのもの。電気もないから、夜は真っ暗。いかにも妖怪があらわれやすい、不気味な空間だったんだ。

この妖怪にのぞかれたくなければ、大みそかの夜にトイレにはいって、「加牟波理入道ほととぎす」ととなえればいいんだって。

キジムナー

【きじむなー】

おもな出現場所
森
海岸

いたずらずきな老木の精

赤い顔に赤い体、長くのびた赤い髪、そして、小さな子どものようなすがた……。これが、人間たちをだます、いたずらずきで有名な沖縄県の妖怪、キジムナーだ。「セーマ」「ミチバタ」「ブナガヤ」ともよばれるよ。

南の島でよく見られるガジュマルやアコウなどの木の老木にやどる精とされ、さまざまないたずらをして人間をこまらせるぞ。

「赤飯をたいてたべたら、どうも味がおかしい。気がつくと、赤飯がただの赤い土にかわっていた」「小さな木のくぼみにおしこめられた」など、キジムナーのしわざとされる言いつたえがたくさんのこっている。人の命はうばわないけど、こまった妖怪なんだ。

キジムナーのよもやま話

魚の目玉が大すき

キジムナーは、魚や蟹がすきで、なかよくなった人間といっしょにとることもあるという。

けれど、キジムナーは魚の目玉しかたべない。しかも、片方の目玉だけしかたべないという。昔の人たちは、とれた魚の片方の目玉がないと、キジムナーがたべてしまったとかんがえていたんだ。

もしかすると、おいしい目玉をひとりじめしないように、人間にのこしておいてくれたのかもしれないね。

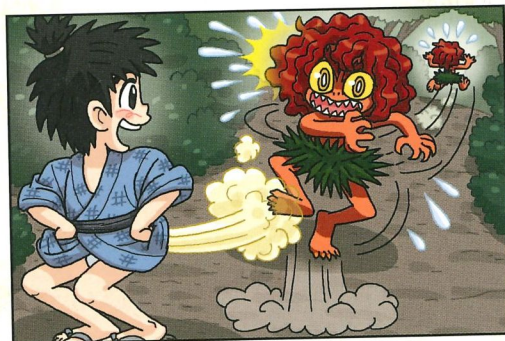
キジムナーがきらいなもの

キジムナーには、いくつかきらいなものがある。タコ、人間のおなら、ニワトリ、熱いなべのふただ。

また、キジムナーがやどる老木をやいたり、クギを打ちこんだりすると、キジムナーをおこらせてしまう。おこったキジムナーは、おそろしい仕返しをすることもあるというよ。

キジムナーとブナガヤ

沖縄県の北部では、キジムナーを「ブナガヤ」とよぶ。ブナガヤは、川の近くにかくれているらしい。水あそびにきた子どもがブナガヤをふんでしまうと、その足がまるでやけどをしたように真っ赤にはれあがってしまうんだって。

キジムナーとブナガヤは別のものだという説もあるけれど、赤いのは、キジムナーの体が火のように熱いからかもしれない。うっかりふまないように気をつけよう。

◀キジムナーと縁を切りたければ、わざとおならをすればいいという言いつたえもある。

ちょっとだけこわい話 キジムナーの仕返し

キジムナーは、友だちになった人間には幸福をもたらすが、うらぎった人間には仕返しをするという。

ある老人がキジムナーと出会い、友だちになった。キジムナーは毎晩、老人の家にやってくるようになり、ふたりでいっしょに海で魚をとって楽しんだ。キジムナーは、とった魚の片目だけをたべると、のこりは老人にあげた。

老人は、毎晩おこされるのがだんだんつらくなり、ついにはキジムナーがすむ木に火をはなってしまった。

それ以来、キジムナーのすがたは見なくなったが、老人は仕事がまったくうまくいかなくなり、家をつぶしてしまったという。

九尾の狐

【きゅうびのきつね】

おもな出現場所
都
宮廷

美女に化けて国をほろぼす狐の妖怪

金色の毛におおわれ、九本のしっぽをもつ、狐の妖怪。とても悪がしこくて、うつくしい女性に化けるのがうまいだけでなく、人の心をとらえる能力にすぐれ、強力な神通力をもっている。ふしぎな力をつかい、権力者にとりいって政治をあやつり、さまざまな国をほろぼしてきたという。

古代のインドや中国で、王様の后になって国をほろぼしたあと、平安時代の日本にもあらわれたらしい。玉藻前という名の美女に化けて鳥羽天皇をだまそうとしたが、安倍泰成という陰陽師が正体を見やぶり、悪だくみをふせいだということだ。

狐が美人に化けるのはよくある話だけれど、国をほろぼされたらたまらないよね。

九尾の狐のよもやま話

九尾の狐の誕生秘話

昔の人たちは、狐が長く生きると、二本目のしっぽがはえて、ふしぎな力をもつようになるとかんがえていた。しかし、おなじ狐でも、九尾の狐のなりたちはとても特殊だ。

世界が海と陸のちがいもはっきりしていなかった大昔、空中をただよう悪い気があつまってうまれたといわれている。

それから長い年月がたって、体の毛が金色にかがやきだし、しっぽは九つにさけ、今につたわるすがたになったらしい。

あまりにも長生きで、スケールが大きいこの妖怪。狐のようなすがたをしているけれど、じつはかなりの大物なのかもしれない。

九尾の狐は本当はいい妖怪!?

多くの国や地域で、悪い妖怪とつたえられている九尾の狐。でも、めでたい動物や、人間によいことをもたらす神様とされることもあるよ。

中国では、妲己という美女に化けて王様の后となり、無実の人たちを次つぎと死刑に追いこんで、ついには国をほろぼした悪の妖怪とつたえられている。しかし、その話が広まる以前は、国が平和になるとあらわれる、おめでたい動物とされていたそうだ。

日本でも、ほかの狐の妖怪より強い力をもつことから、いくつかの神社で、神様としてまつられている。

もしかしたら、悪い狐とよい狐、二匹の九尾の狐がいるのかも……?

▲人類がうまれるはるか前、世界中の悪い気が結集して、九尾の狐になったという。

ちょっとだけこわい話

退治されても消えないうらみ

陰陽師の安倍泰成に悪だくみを見やぶられ、にげだした九尾の狐。最後には、追いかけてきた侍たちに退治されたという。

しかし、この妖怪の力と自分を殺した人間へのにくしみはすさまじく、体はくさらず石になり、つねに毒をふきだしつづけた。その毒で近くの草や木はすべてかれはて、石の上をとぶ鳥もおちて死んだ。

この石は「殺生石」とよばれるようになり、まわりの人たちはおそれて近づかなくなった。その後、玄翁和尚というえらい僧侶が石をくだき、ようやく毒をふきださなくなったといわれている。

狂骨

【きょうこつ】

おもな出現場所
井戸

井戸からあらわれるがい骨の妖怪

今のように水道がなかった時代、家の近くには井戸があり、地下の水をくみあげて、のみ水や洗たくにつかっていた。江戸時代の画家、鳥山石燕は、狂骨を井戸の中からでてくるがい骨としてえがいている。

その絵の解説には、「この妖怪は、はげしいうらみをもっている」としるされている。どうやら、井戸におちて死んだ人や、井戸におとされて殺された人がはげしいうらみをもつことで狂骨になってしまったようだ。

昔は、井戸がこの世とあの世をつなぐ出入口だとかんがえた人もいた。古い井戸からなにかがあらわれても、けっしてふしぎなことではなかったんだね。

九千坊

【くせんぼう】

おもな出現場所
川
町

海外からやってきた河童の大親分

九千坊は、熊本県にいる河童の親分だ。九千匹もの子分をしたがえているので、そうよばれているぞ。

もともとは中国の黄河のあたりにいたが、今から千七百年ほど前に海をわたり、九州にやってきた。熊本県八代市には、河童が日本にきたことを記念する石碑が今もある。河童たちは大いにさかえ、九千匹の大一族となった。

仲間が多いと気が大きくなるのは人間も妖怪もおなじらしく、九千坊ひきいる河童たちは、人間にたびたび悪さをするようになった。その地をおさめていた加藤清正という殿様がこれにおこり、九千坊たちをこらしめた。それから、河童たちは人間たちにいたずらをしなくなったというよ。

件

【くだん】

おもな出現場所
- 牛小屋
- 里

わざわいをつげる人面の子牛

件は、九州や四国などの西日本にあらわれた妖怪だ。人の顔をもつ子牛のすがたで、牛からうまれてくるんだ。それだけでも気味が悪いけれど、件はうまれてすぐ、人の言葉で予言をする。しかも、その予言は確実に的中するという。そして、予言をすると、数日で死んでしまうんだって。

件の予言は、疫病がはやるとか、作物がとれなくなるなど、不吉なものが多い。人びとは、件がうまれることをおそれ、件の絵をかき、魔よけとして家にはったという。

件は、戦争や天災など、社会に不安がつのっている時に多くあらわれたらしい。わざわいをさけたいとねがう人びとの心が件をうみだし、予言をさせていたのかもしれない。

件のよもやま話

わざわいではなくよいおつげもした!?

江戸時代の瓦版（今の新聞のようなもの）には、件が「大豊作をしらせるめでたい動物」として、さし絵とともに紹介されているものがある。

その瓦版には、「ある場所に件があらわれ、次の年から豊作がつづいた。この瓦版の絵を家にはっておけば、家がさかえて病気にもならず大豊作となる」と書かれていたんだ。

「件のごとし」で商売はんじょう

かならず的中するという件の予言になぞらえた、「件のごとし」という表現があるよ。

たとえば、昔の薬の広告に、「この薬のききめは件のごとし」という宣伝文句と、件の絵をかいたものがあった。このようにして、うそいつわりがないことをあらわしたんだ。

ほかにも、契約書などの正式な書類には、文章の最後に「件のごとし」とよく書かれていた。これも、内容が正しいということを件で表現したんだね。

「神社姫」の予言

予言をする妖怪は、ほかにもいるぞ。

一八一九年の夏、江戸の町に「神社姫」という妖怪の絵がでまわった。

神社姫は人の顔に魚の体をもつ、人魚のようなすがたをした妖怪だ。件とおなじように疫病の流行を予言するとされ、神社姫の絵を見れば、その難をのがれることができるといわれたんだ。

◀件の絵を家にはると、豊作になって家がさかえたり、魔よけになったりするといわれた。

ちょっとだけこわい話　日本が戦争に負けると予言した件

一九四四年、岡山県のある村で、「人間と牛のすがたをあわせもつ、妖怪の件がうまれた」といううわさがたった。

件は、「日本が戦争に負ける」と予言して、すぐに死んでしまったという。戦争とは、太平洋戦争のことである。

日本国民は、日本が戦争に勝つときかされつづけてきた。件の予言のうわさをきいた人は、「もしかしたら、日本は負けるのか？」ともおもったが、当時は、そんな話を大っぴらにすることはできなかった。

そして、一九四五年八月、件の予言どおり、日本は戦争に負けたのだった。

毛羽毛現

【けうけげん】

おもな出現場所
庭
床下

しめった場所がすきな毛むくじゃらの妖怪

毛羽毛現は、全身が毛におおわれた妖怪だ。江戸時代の画家、鳥山石燕は、毛羽毛現の絵をかいて、「毛女のように体中に毛がはえている」と説明している。「毛女」とは、中国の西嶽華山にすむ女の仙人のことで、山の寒さをふせぐために、全身から毛をはやしているそうだ。

また、石燕は、この妖怪に「希有希現」と漢字をあてて、「めったにあらわれず、めったに見られない妖怪」ともいっている。

毛羽毛現は、じめじめとした場所がすきで、だれもいない時にあらわれて、たまっている水などをのむんだって。毛羽毛現がすみついてしまうと、家の人の元気がなくなったり、病気になったりするよ。

木霊

【こだま】

おもな出現場所
森
山

とくべつな木にやどる木の精霊

神社などで、縄がまいてある木を見たことがあるかな？　縄は神様がやどっていることをあらわしたしるしで、その木は「神木」とよばれるんだ。

日本人は昔から、木には魂や精霊、神様がやどるとかんがえてきた。その魂や精霊などのことを、木霊とよんだんだ。木霊は「木魂」「木魅」「古多万」とも書くよ。

木霊がやどる木は、ふつうの木と見わけがつかないので、うっかり切ってしまうこともある。すると、切った人だけでなく、その地域の人たちにもわざわいがふりかかったというから大変だ。八丈島や青ヶ島では、木霊を「キダマサマ」とよび、山の伐採をする時は、キダマサマがやどる木は切らずにのこしたそうだ。

子泣き爺

【こなきじじい】

おもな出現場所
山道

赤ん坊の泣き声で人をだます爺の妖怪

山奥の道をあるいていると、「オギャアオギャア」となく赤ん坊と出会う。かわいそうにおもってだきあげると、赤ん坊の顔がとつぜん、しわくちゃの爺になる。そして、爺は赤ん坊の声でなきつづけながら、だいてくれた人にしがみついてどんどん重くなり、しまいには、その人をおしつぶしてしまう……。

これは徳島県の山あいにつたわる妖怪、子泣き爺だ。四国の山には、赤ん坊の泣き声をあげる妖怪の言いつたえが多数あり、「オギャア泣き」「ゴギャ泣き」「芥子坊主」など、いろいろとよばれている。

山のふもとにすむ人たちは、時どき山からきこえる赤ん坊の泣き声を、とてもおそれていたというよ。

コロポックル

【ころぽっくる】

おもな出現場所
森
草むら

北の大地でくらす小人たち

北海道でかたりつがれている、小人の種族。コロポックルとは、アイヌ民族の言葉で「フキの葉の下の人」という意味だよ。アイヌの人びとが北の大地にすむ前から、その地にいたんだって。

ふだんは人目につかないようにかくれているけれど、心をゆるした人間には、自分たちの食べ物をわけてくれることもあったそうだ。

昔、コロポックルは、人間となかよくくらしていたという。でも、今ではすがたを消してしまった。原因は、コロポックルの女を人間の男がさらったからとか、人間がコロポックルを追いつめたからなどといわれている。人間のせいでいなくなったなんて、かなしいことだね。

座敷わらし

【ざしきわらし】

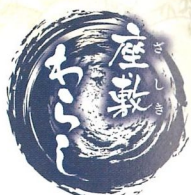
おもな出現場所：家

すみついた家に幸福をもたらす妖怪

岩手県を中心に、東北地方でよくあらわれたという、子どものすがたの妖怪。見た目は三歳から十二歳くらいで、男の子の時もあれば、女の子の時もあるみたいだ。

座敷わらしがすむ家では、いろいろとふしぎなことがおきるという。だれもいないはずの部屋で物音がしたり、ねている時にまくらやふとんがひっぱられたり。もちろん、それらはすべて、いたずらずきな座敷わらしのしわざだ。

座敷わらしがいる家は、家族がなかよくなったり、仕事がうまくいったりと、たくさんの幸福がまいおりる。ぎゃくに、座敷わらしがいなくなってしまうと、次つぎと悪いことがかさなって、すぐにおちぶれてしまうというよ。

座敷わらしのよもやま話

家をたてた人たちののろい!?

家をさかえさせたり、おちぶれさせたりするといわれる座敷わらしだけれど、こんな話ものこっている。

大工やたたみ職人が、家をたてる時にいやなおもいをすると、そのおもいが家にのこって、座敷わらしになったというのだ。

この座敷わらしは、できあがった家にすむ人に悪さをして、家から追いだそうとするんだって。

まずしかった時代に死んだ子どもたち

座敷わらしは、不幸な事情で死んでしまった子どもたちのうまれかわりだという説もある。

作物がとれず、飢えて死んだ子ども。まずしさから、食べ手をへらすために殺された子ども。そんな子どもたちが、座敷わらしになったともいうよ。

もっと長生きして家族といっしょにくらしたかった子どもたちが、座敷わらしになって、ねがいをかなえているのかもね。

日本各地の座敷わらしのよび方

日本各地にあらわれたといわれる座敷わらしは、地域によって、さまざまなよび名がある。

たとえば、「座敷ぼっこ」「部屋ぼっこ」「蔵ぼっこ」。「ぼっこ」とは、「わらし」とおなじく、「子ども」という意味だ。

北海道の「アイヌカイセイ」、沖縄の「アカガンター」も、座敷わらしとおなじような妖怪だといわれているよ。

◀家族のだんらんにあこがれた座敷わらしが、家の人たちに幸福をもたらすのかもしれない。

ちょっとだけこわい話

小学校にあらわれた座敷わらし

明治時代、岩手県のある小学校に、ひとりの座敷わらしがあらわれた。一年生の子どもたちの話では、座敷わらしといっしょに、みんなで楽しくあそんだという。けれど、上級生や先生には、座敷わらしのすがたなど、どこにも見あたらなかった。

うわさをききつけた別の小学校の子どもたちも見にきたが、やはり一年生だけがそのすがたを目撃し、上級生には見えなかった。

なぜ一年生だけに座敷わらしが見えたのか？　おそらく、座敷わらしの存在を心からしんじている小さな子どもの目にしか、そのすがたはうつらないのだろう。

さ ― ざしきわらし

覚

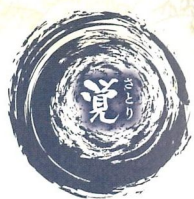
【さとり】

おもな出現場所
山
森

心をよみとり人をおそう妖怪

覚は、うっそうとしげった森の奥ふかくにでる妖怪だ。人が心におもっていることをよみとる力をもっているため、「おもいの魔物」ともよばれる。すがたは全身が毛むくじゃらで、大きな猿のようだとつたえられている。

覚の話は日本各地にのこされていて、人をおそってたべるもの、人の言葉をはなすもの、やさしい性格をしているものなど、地域によってさまざまなちがいがある。

覚は、いきなり人をおそったりはしない。相手の心をよみとり、それをおしえてこわがらせてから、すきをねらっておそいかかるのだ。まるで、ハンターが獲物をこわがらせて、じっくりと狩りを楽しんでいるかのようだ。

覚のよもやま話

覚はなんでもお見とおし

覚は、空をとんだり火をふいたりする妖怪ではないから、武器をもって大ぜいでたちむかえば、退治できそうな気もするね。

でも、棒でたたこうとしても、鉄砲でねらっても、すべて無駄。なぜなら、その心を覚がよみとって、先ににげてしまうからだ。数ある妖怪の中でも、もっとも手ごわいタイプといえるだろうね。

人の心をよむ妖怪たち

おもっていることをよみとる妖怪は、覚のほかにもいる。天狗や鬼、狸や狐なども、人の心をよんで悪さをするというよ。

猟師が体験した覚との恐怖の会話

覚と会話をしたという猟師の話がある。

猟師が山小屋で火をたいてあたたまっている時、いきなり戸をあけて覚がはいってきた。猟師がこわいとおもうと、覚は「今、おれをこわいとおもっただろう」と、猟師の心をズバリといいあてた。

さらに、覚は次つぎと猟師の心をよみとった。攻撃しようとかんがえたら、「今、おれを攻撃しようとかんがえたな」といい、もうおしまいだとあきらめると、「そうだ。おれにたべられるから、おまえはおしまいだ」といったのだ。

その時、たき火がぐうぜんはじけて火の粉がとんだので、覚はおどろいてにげだしたという。どうやら覚は、心を先よみすることはできるけれど、ぐうぜんの攻撃には弱いみたいだ。

◀覚は、人間が心におもいうかべたことをよみとり、それを相手にきかせてこわがらせる。

ちょっとだけこわい話

ねらわれたらおしまい

富士山のふもとにすんでいた覚は、出会った人をつかまえて、たべていた。

人がにげようとする方向も、かくれようとしている場所も、覚によみとられてしまう。その上、富士山のふもとの森は覚のなわばりなので、道も覚のほうがくわしく、すぐに先回りされてしまう。覚のすみかにまよいこんだ人は、まずたすからなかったという。

覚をおどろかせ、たべられずにすんだという人の話ものこっているが、それは、ぐうぜんのできごとがかさなっただけなのだろう。もしかしたら、心をからっぽにできる人なら、覚にねらわれずにすむかもしれない。

【しい】

おもな出現場所
山
里

中国からやってきた牛を喰い殺す妖怪

とつぜん黒いけむりとともにあらわれ、牛を喰い殺す。すがたはけもののようで、狸や犬、ヤマアラシなどににているという。頭がよくてすばしこいため、つかまえることができないんだって。

シイは、もともと中国からつたわった妖怪だ。中国の古い書物には、「人にかみついて、子どもをさらう」としるされている。また、シイがあらわれると、戦争がおこる前ぶれだとしておそれられたという。

人が牛を追いたてる時、「シイシイ」ということがある。これは、シイをこわがる牛たちに「うしろにシイがいる」とつたえる意味があるそうだ。牛たちにとっては、まさに天敵。名前をきいただけでこわがるのも無理ないね。

静か餅

【しずかもち】

おもな出現場所
里
夜道

きいた人の運をかえるふしぎな音

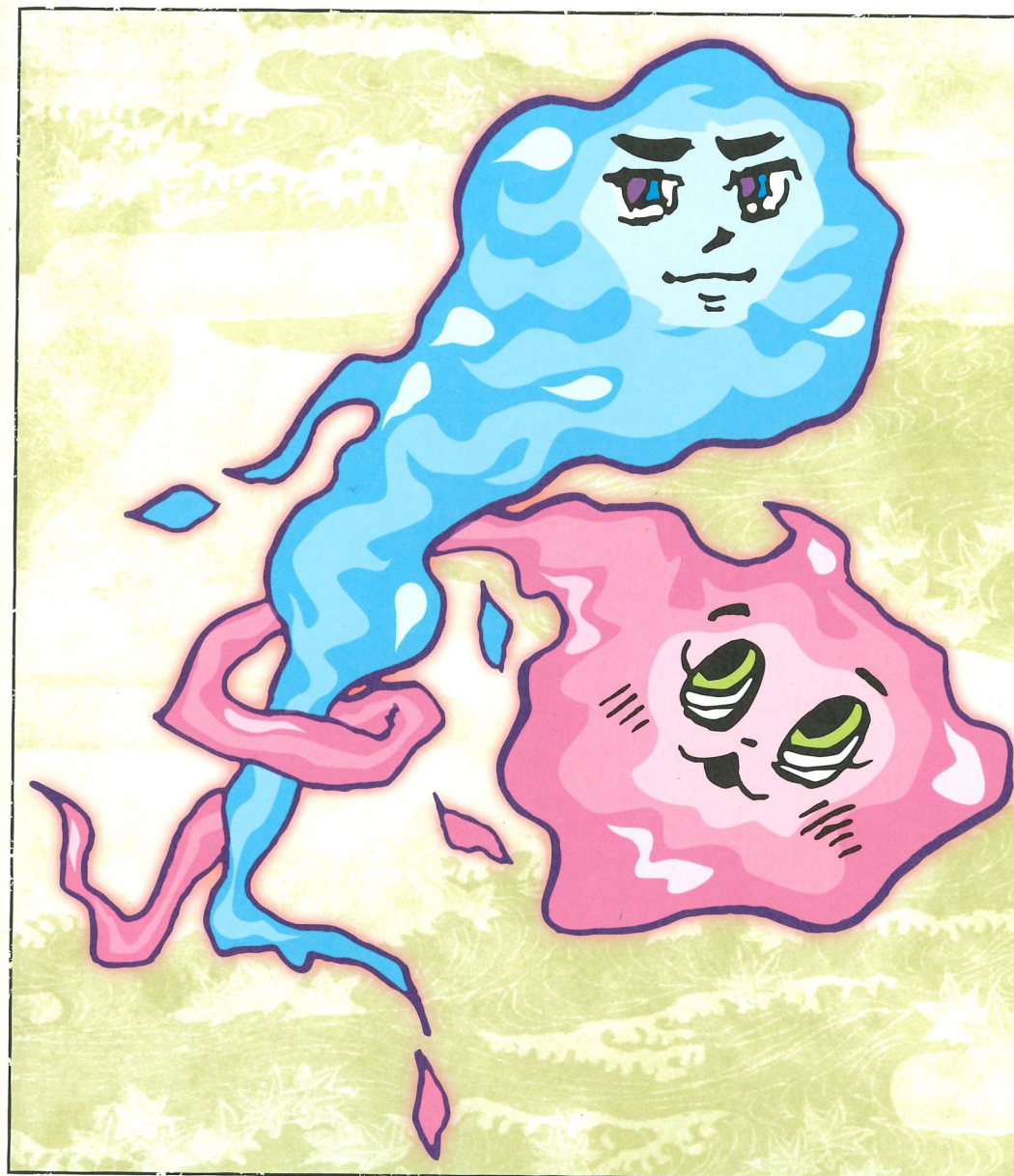
きねとうすでついた餅を見たことはあるかな？　つきたての餅は、ちぎってわけたあと、餅どうしがくっつかないように粉をまぶす。餅がかたまったら、粉はパンパンとはたきおとすよ。

夜中に餅の粉をはたくような音をきいたら、それは妖怪の静か餅だ。音だけしか言いつたえられていないので、どんなすがたか、よくわかっていない。静か餅の音が近づいてくるようだったら運が上昇し、ぎゃくに音が遠のいていくようなら、不運になってしまうんだって。

静か餅とにている妖怪に、「隠れ里の米搗き」というものがいる。米をつくような音をだすとされ、それをきくと大金持ちになれるんだって。

ジャンジャン火

【じゃんじゃんび】

おもな出現場所
川
墓地

おどるようにとぶふたつの人魂

ジャンジャンと音をならしながら、ふたつの火の玉があらわれたら、それはジャンジャン火という妖怪だ。見てしまった人は、熱がでて、ぐあいが悪くなるらしいぞ。

その正体は、愛しあっていたのにむすばれず、死んでしまった若い男女だといわれている。

昔、ある武士と農家の娘が恋をした。でも、身分のちがいからひきはなされ、武士は打ち首の刑になり、娘は男の首をだきしめながら命をたった。それ以降、その場所にふたつの火がジャンジャンと音をたててあらわれては、おどるように、からみあうように、宙をまったんだって。

死んだあとも、ふたりは愛しあっていたんだね。

酒呑童子

【しゅてんどうじ】

おもな出現場所
山
都

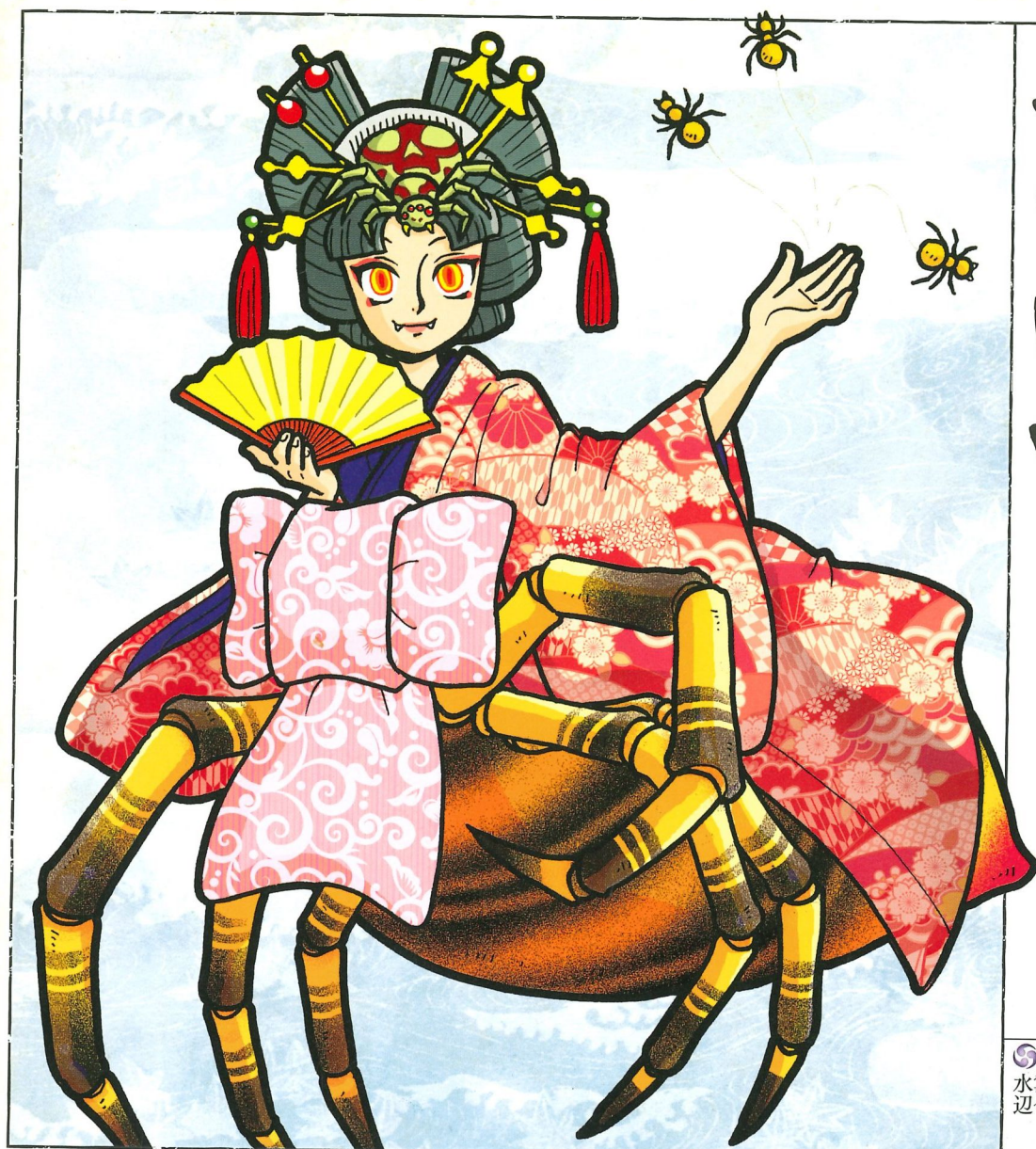
各地に伝説をのこす鬼たちのリーダー

京都の大江山には、昔、鬼たちがすんでいたという。中でもおそれられていた鬼の大将が、酒呑童子だ。酒が大すきだったから、そうよばれていたんだって。

酒呑童子は、手下の鬼たちをつれて、京の都であばれたり、人をさらって喰ったりして、人びとをたいへんこまらせていた。そこで、源頼光と四人の武士が山にのぼった。酒呑童子たちに毒いりの酒をのませ、ねむったところを退治したんだ。

奈良県には、夜中に人間をおそってたべる子どもが、のちに酒呑童子になったという言いつたえがある。また、新潟県には、酒呑童子がうまれたとされる村がある。それだけ各地でしられていたんだね。

女郎蜘蛛

【じょろうぐも】

おもな出現場所
滝
水辺

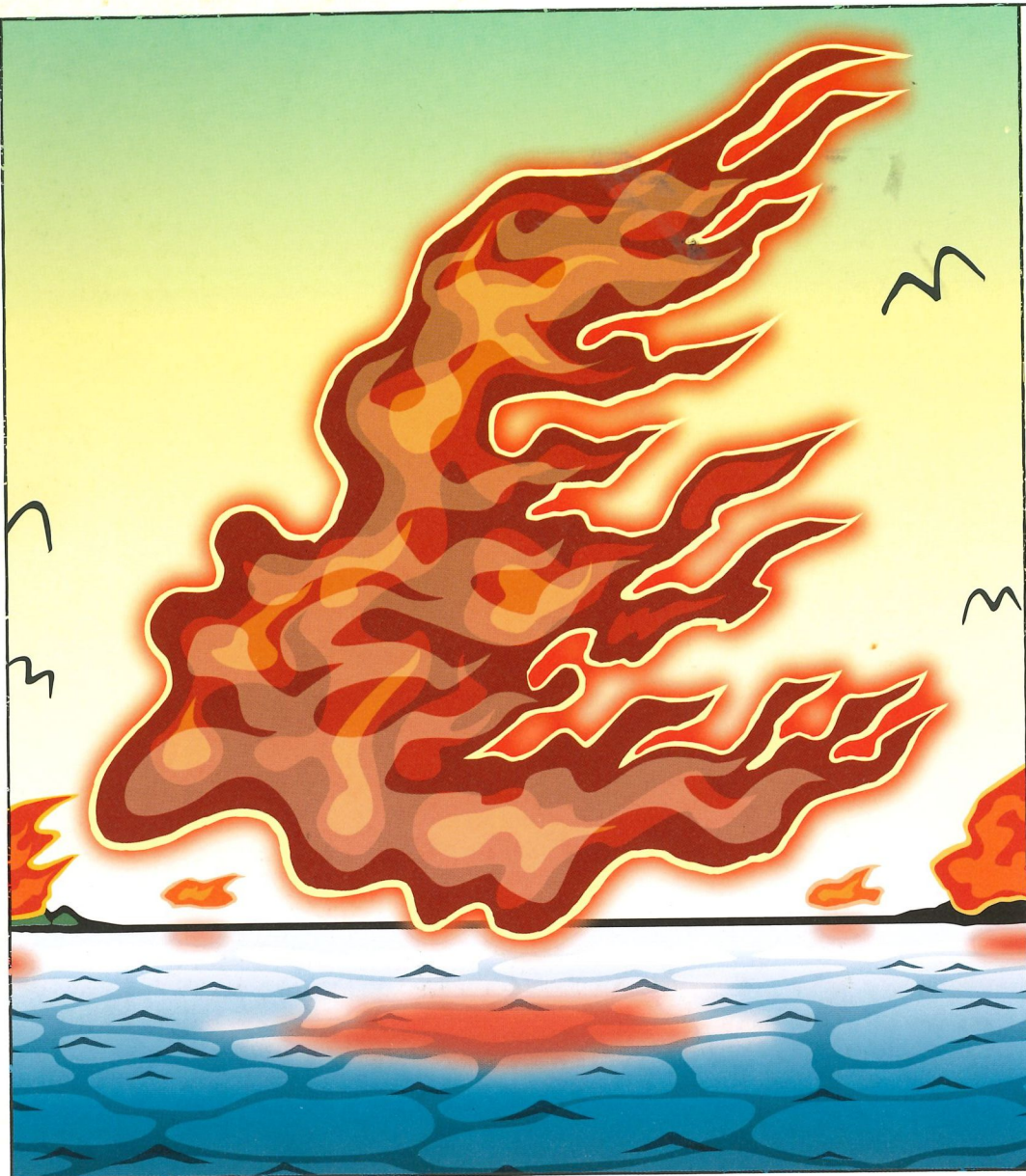
男を水にひきこむ蜘蛛女

昔、ある男が滝の近くでやすんでいると、足にからむ蜘蛛の糸に気がついた。その糸は、またたく間に何重にもふえる。あやしいとおもった男は、糸のたばを近くの古かぶにまきつけた。すると、古かぶが音をたててぬけ、水中に消えた。そのあと、水の中から「かしこい、かしこい」と女の声がきこえたという……。

これは、静岡県につたわる女郎蜘蛛の伝説だ。人間の女性と蜘蛛のすがたをあわせもつ女郎蜘蛛は、男性を水中にひきこむおそろしい妖怪だぞ。

『太平百物語』という書物に、うつくしい姫に化けた女郎蜘蛛が武士に結婚をせまる話がある。気にいった男を自分のものにするためには、どんな手段でもつかうみたいだ。

不知火

【しらぬい】

おもな出現場所
海上

海上にあらわれる無数のあやしい火

九州の有明海や八代海にあらわれる、多数の火。これは、不知火とよばれる妖怪だ。毎年七月ごろ、風のおだやかな新月の夜に、遠くの海上で不知火がともるという。

不知火を近くで見てみようと舟をだしても、こげばこぐほど、火は遠くにはなれてしまうそうだ。このふしぎな火は、海にすむ龍神がともすものだともいわれ、不知火があらわれる夜には、漁師たちはけっして海にでてはいけないとされたんだって。

不知火の正体はよくわかっていないけれど、明治時代には、クラゲや海底温泉だとする説もあった。現在では、蜃気楼などの大気現象の一種とかんがえられている。そう、不知火は、今もでるんだ。

人面瘡

【じんめんそう】

おもな出現場所
人体

体にできる人の顔をしたはれ物

体にできたおできが、はれあがって大きくなり、やがて人の顔のようになる……。これが、妖怪の人面瘡だ。病気の一種とされることがあり、「人面疽」ともよばれる。おもに、ひざや太ももなどにできるらしいぞ。

人の顔をしたこのはれ物は、人間のように声をたてわらったり、お酒をのんだり、ものをたべたりするという。薬をつかってもなおらず、何度切りとっても、またおなじ場所にできてしまうのだ。ただし、「貝母」という薬で人面瘡が消えたという話もあるよ。

ある男に、自分が殺した女性とそっくりの人面瘡ができた、という話もある。なにかがとりついてあらわれることは、まちがいなさそうだ。

硯の魂

【すずりのたましい】

おもな出現場所
夢の中

平家の怨念がやどるふしぎな硯

習字をする時、よく硯をつかうよね。学校では墨汁をためるだけの器としてつかうことが多いけれど、本来は、墨を水ですりおろすための道具でもあるんだよ。

昔、ある人がつくえでうたたねをしていた時のこと。つくえの上の硯がざわめき、いれていた水が波をたてはじめ、源氏と平氏の小さな武士たちがあらわれて、硯の上で合戦をはじめるという夢を見た。

なぜそんな夢を見たのか。じつは、その硯のもととなった石は、平氏が源氏にほろぼされた赤間ヶ関でとれたものだったんだ。赤間ヶ関とは、今の下関のことで、硯の産地として有名だよ。

硯の魂は、平家のうらみが硯にやどった妖怪なんだって。

砂かけ婆

【すなかけばばあ】

おもな出現場所
森
神社

すがたを見せずにパラリと砂をまく妖怪

砂かけ婆は、奈良県や兵庫県にあらわれるという妖怪だ。人のいない森や神社のそばをとおると、とつぜん砂をかけられたり、砂をまく音がしたりするという。風もないのに砂がとんでくれば、だれでもびっくりする。そうやって人をおどろかせる妖怪なんだ。

人間に砂をかけておどろかせる妖怪は、ほかにも「砂撒き鼬」や「砂撒き狐」などがいる。砂かけ婆は「婆」とよばれているけれど、すがたを見た人はいないという。見たこともないのに婆だなんて、おかしな話だね。

砂かけ婆の正体は、狸だという説もある。いたずらずきな狸が砂場でねころんで体に砂をつけ、木の上にのぼって、その砂をまくんだって。

袖引き小僧

【そでひきこぞう】

おもな出現場所
道

そでをひっぱるだけのかわいい妖怪

夕ぐれ時に道をあるいていると、うしろからだれかが、着物のそでをツンツンとひっぱる。ふりかえってみても、だれもいない。気のせいかとおもってあるきだすと、またツンツンとひっぱられる。これは、袖引き小僧という妖怪のいたずらなんだ。

小僧とよばれているけれど、どんなすがたをしているか、わかっていない。でも、おなじ目にあう人がたくさんいて、だれもが子どもにひっぱられたような気がしたということから、いつしか袖引き小僧とよぶようになったんだって。

袖引き小僧は、ただそでをひくだけで、とくに悪さはしない。もしかしたら、そでをひいた人に、なにかをしらせたいのかもしれないね。

ダイダラボッチ

【だいだらぼっち】

おもな出現場所　山　海

雲に頭がとどく巨人の妖怪

ダイダラボッチは、日本全国に広くつたわる、巨人の妖怪だ。その大きさは、雲に頭がとどくほどともいわれているから、二千メートルくらいはあるかもしれない。ほかにも、たった一歩で三つの山をまたいだとか、山をかついではこんだなどといった伝説がのこっているよ。

「ダイダラ」とは、大きな人をあらわす「大太郎」からきた言葉だという。地域によっては、「ダイダラボウ」「デエデエボウ」「ダイトウボウシ」「レイラボッチ」「でーらん坊」など、いろいろな名前でよばれているそうだ。

あまりにも巨大なダイダラボッチは、きっと遠くからでも見えただろう。だから、日本中で目撃されたのかもね。

のよもやま話

琵琶湖と淡路島をつくった!?

滋賀県にある琵琶湖と、瀬戸内海にうかぶ淡路島。この湖と島は、とてもよくにた形をしている。

これは、ダイダラボッチが滋賀県の地面をくりぬいて琵琶湖をつくり、その地面を瀬戸内海におとして淡路島ができたからだといわれている。地図を見ると、たしかに、淡路島が琵琶湖にすっぽりとはまるような気もするね。

貝をたべていたダイダラボッチ

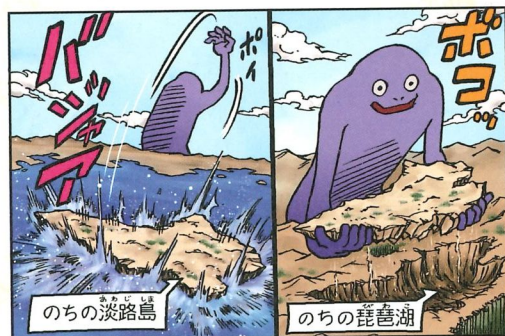
茨城県に、大串貝塚という遺跡がある。「貝塚」というのは、大昔の人が貝をたべた時にすてた貝がらなどがのこされた場所だ。大串貝塚からは、シジミやハマグリやアサリなどの大量の貝がらが発掘されているけれど、それらの貝は、ダイダラボッチがたべたという伝説があるよ。

ダイダラボッチは、山にすわりながら海に手をのばして、たくさんの貝をとってたべたという。その時、大量の貝がらをすてた場所が、大串貝塚になったんだって。

富士山もつくった!?

ダイダラボッチが琵琶湖をつくったという話には、少しちがうものもある。

ある日、ダイダラボッチは土をほって山をつくった。ほった穴は琵琶湖になり、できた山は富士山になった。はこぶとちゅうでおとした土は、富士山と琵琶湖の間にある山やまになったという。

ほかにも、神奈川県の芦ノ湖や、長野県の青木湖は、ダイダラボッチの足あとに水がたまってできたという言いつたえもあるよ。

◀地面をくりぬいた穴が琵琶湖になり、その地面でできた島が淡路島になったといわれる。

ちょっとだけこわい話

「ダンダラボウシ」と巨大なわらじ

三重県の島に、「ダンダラボウシ」とよばれる巨人がすんでいた。ダンダラボウシは、人間の娘をさらうなどの悪さをはたらいた。

町の人たちがこまっていると、寺の和尚が「大きいわらじを岬にぶらさげれば、悪さをしなくなるだろう」といった。それはいい案だと、町中の人で力をあわせ、巨大なわらじをつくった。

ダンダラボウシが、いつものように娘をさらいにくると、岬の先に巨大なわらじがぶらさがっているのが見えた。「なんと、自分より大きな男がいるのか」と、おそろしくなったダンダラボウシは、二度と町にあらわれなくなったという。

提灯小僧

【ちょうちんこぞう】

おもな出現場所
町
夜道

提灯をもってトコトコとついてくる

　昔、ある城下町での話。雨ふる夜、ひとりの侍があるいていると、提灯をもった子どもがトコトコとついてくる。いつまでもついてくるので、あやしいとおもった侍は、さっと子どもの顔を見た。すると、その顔はホオズキの実のように赤い色をしていた。侍がおどろいているうちに、その子どもは、いつの間にか消えていたという。
　これは、宮城県につたわる提灯小僧の話。子どものすがたをした妖怪で、提灯をもって夜道にあらわれ、真っ赤な顔を見せて人をおどろかすよ。
　江戸の町にも、提灯小僧があらわれたという。こちらは、子どものすがたはなく、宙にういた提灯だけが出現したんだって。

土蜘蛛

【つちぐも】

おもな出現場所
塚
家

あやしい術をつかう大蜘蛛の妖怪

　土蜘蛛は、大きな蜘蛛のすがたをした妖怪。絵巻物などでは、虎や鬼の頭と、蜘蛛の体をもつ化け物としてえがかれる。『平家物語』には、こんな話があるよ。
　平安時代、妖怪の酒呑童子を退治した源頼光が、重い病にかかった。ある夜、熱にうなされていると、まくらもとに坊主がたっていて、何本もの糸をなげかけてきた。頼光は刀で糸をなぎはらい、坊主を切った。すると、坊主は消え、血だけがのこされていた。
　頼光が部下の侍とともに血のあとをたどると、古い塚にたどりつき、中から巨大な蜘蛛がおそってきた。頼光たちが力をあわせて、蜘蛛を退治すると、頼光の病はみるみるよくなったという。

槌の子

【つちのこ】

おもな出現場所
山
草むら

新種の生物発見!? 蛇のような形の妖怪

槌の子は、全国各地にあらわれるとされる妖怪で、体が短い頭でっかちの蛇のようなすがたをしている。新種の生物という人もいるよ。

その名前は、ものをたたく道具の「槌」からきていて、円柱の頭ににぎり手がついた、稲の脱穀などにつかう「横槌」とにた形をしているという。

体をまるめて坂道をすごいスピードでころがるとか、人を見るとジャンプしておそってくるとか、口から毒を発射するとか……。たくさんの言いつたえがあるようだ。

昭和四十年代に、和歌山県などで目撃情報があり、日本全国で「槌の子さがし」が大流行した。みんなが槌の子をさがしたけれど、けっきょく見つからなかったみたいだよ。

槌の子のよもやま話

たくさんありすぎ? 槌の子のよび名

全国各地にあらわれるだけあって、よび名もバラエティゆたかだ。「バチ蛇」「ギギ蛇」「筒蝮」「苞蛇」「カメノコ」「ドテンコ」「五八寸」「ゴンジャ」「コロ蛇」「タンコロ」「俵蛇」などなど。

地域ごとによびかたはいろいろだけれど、槌の子の見た目からくる名前が多いみたいだね。

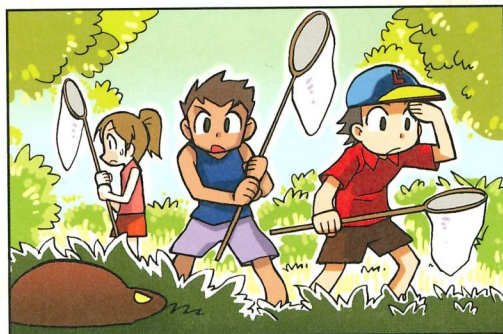
「槌転び」と「土転び」

槌の子とにている妖怪に、鳥取県にあらわれた「槌転び」というものがいる。横槌のようなすがたをしていて、コロコロところがってきて人にかみつくのだとか。

また、中国地方の山道などには、「土転び」という妖怪があらわれたという。ソフトボールぐらいの大きさのまるいすがたで、体中が毛むくじゃら。土のような色をしていて、いきおいよく地面をころがるから、その名がついたそうだよ。

槌の子をつかまえてお金持ちに?

昭和四十年代におこった槌の子ブーム。テレビや雑誌などでさかんに槌の子の話題がとりあげられた。その時の槌の子は、雪男やネッシーみたいなまぼろしの生物とされたんだ。みんな、新種生物の第一発見者になりたくて、こぞって槌の子をさがしたよ。

槌の子を見たという話がとくに多かったのは、奈良県下北山村や岐阜県東白川村。そこでは、今も槌の子に賞金をかけている。槌の子をつかまえると、お金がもらえるんだ。きみたちも、槌の子さがしにチャレンジしてみては?

◀昭和四十年代の槌の子ブームでは、全国の子どもたちが槌の子をさがしまわっていた。

ちょっとだけこわい話

槌子坂にあらわれたわらう槌の子

今の石川県金沢市に、その昔、槌子坂とよばれるなだらかな道があった。うっそうと草がしげり、昼間でもうす気味悪いところだったといわれている。

小雨がふる夜中、ある男が槌子坂をとおると、コロコロとなにかがころがってきた。よく見ると、槌のような形の生き物だった。男がふしぎにおもっていると、その生き物がとつぜん「カカカ」とわらい、パッと光をはなって消えてしまった。

その後、男は体調をくずしてねこんでしまう。男が出会ったのは、昔から槌子坂にいる妖怪で、見た人は妖怪の毒気で、病になってしまうのだという。

氷柱女房

【つららにょうぼう】

おもな出現場所
家
里

氷のようにとけて消える女の妖怪

北国では、屋根の下や木の枝に、よく氷柱ができる。氷柱女房は、その氷柱にまつわる妖怪だ。青森県に、こんな話がのこされている。

昔、ある独身の男が、家の軒下にできた氷柱をのこぎりで切っていた。すきとおった氷柱を見ながら、男は、「これくらいうつくしい女房がほしいものだ」とつぶやいた。

その夜、うつくしい女がたずねてきて「あなたの女房にしてほしい」といった。男はよろこび、すぐに結婚した。

女はなぜか、風呂にはいらなかった。ある日、男はいやがる女をむりやり風呂にいれさせた。しばらくして風呂を見ると、女のすがたは消え、頭にさしていたくしだけが湯船にういていたという。

釣瓶下ろし

【つるべおろし】

おもな出現場所
大木
道

頭上注意！木からおちてくる生首

「夜なべすんだか、釣瓶おろそか、ぎいぎい」

夜、木の下をあるいていると、不気味な歌がきこえる。次の瞬間、木の上から、生首のすがたをした、釣瓶下ろしがおちてくる。この妖怪は、人をおどろかせてゲラゲラとわらったり、人におそいかかって喰ったりするらしいぞ。

釣瓶とは、井戸から水をくみあげる桶のような道具。井戸に釣瓶をおろすようにまっすぐ下におちてくるので、その名がついたといわれるよ。

正体は、大木の精だとする書物もあるし、狸のいたずらだという説や、人喰い鬼だという説などいろいろあり、はっきりしない。ともあれ、夜道は足もとだけでなく、頭の上にも注意しようね。

鉄鼠

【てっそ】

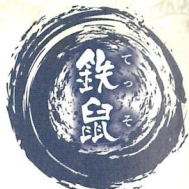
おもな出現場所
寺

するどい歯でかじるネズミの妖怪

平安時代、園城寺というお寺に、頼豪阿闍梨というえらいお坊さんがいた。

ある時、あとつぎがうまれない白河天皇が、頼豪においのりをたのんだ。頼豪は、お礼になんでものぞみをかなえてくれるという約束で、そのたのみをひきうけた。しばらくして白河天皇は子どもをさずかったが、頼豪との約束をはたさなかった。

それは、園城寺と対立していた延暦寺が、頼豪のじゃまをしたためだった。おこった頼豪は、断食をして命をたち、大きなネズミの妖怪の鉄鼠と化して、延暦寺の大切な書物や仏像をかじってまわったというんだ。

約束をやぶられたもののうらみは、おそろしいんだよ。

鉄鼠のよもやま話

江戸時代にえがかれた鉄鼠のすがた

江戸時代の画家、鳥山石燕は、鉄鼠のすがたをこんなふうにえがいている。

大きさは、ふつうのネズミの何倍もあり、人間の男のようなヒゲをはやしている。そして、耳が大きく、ネズミのように鼻をつきだし、下の歯が二本とびだしている。着物からでた手足は人間のようだが、もうもうと毛がはえていて、長いしっぽをもっているのだ。

無数のネズミをあやつる鉄鼠

鉄鼠が延暦寺をおそった時、かぞえきれないほどのネズミがいっしょにあらわれたとされている。書物によると、その数は、なんと八万四千匹。鉄鼠の妖術であやつられ、あつまってきたそうだ。

延暦寺はとても大きなお寺で、たくさんのお坊さんがいるけれど、これだけの数のネズミが相手では、どうすることもできなかっただろうね。

頼豪をまつった神社

延暦寺には、戒壇とよばれる場所がある。戒壇というのは、お坊さんになるための儀式をおこなう場所で、大きなお寺にしかなかった。頼豪が白河天皇にしたおねがいも、戒壇を園城寺につくるというものだった。

あばれる鉄鼠に手を焼いた延暦寺は、頼豪のうらみをしずめるため、頼豪を神さまとしてまつる神社をつくった。これで頼豪の霊は満足したらしく、その後、鉄鼠はあらわれなくなったというよ。

◀鉄鼠は無数のネズミをあやつって延暦寺をおそい、宝物をかじりまわらせたといわれる。

ちょっとだけこわい話

鉄鼠が消えたあとのネズミたちのゆくえ

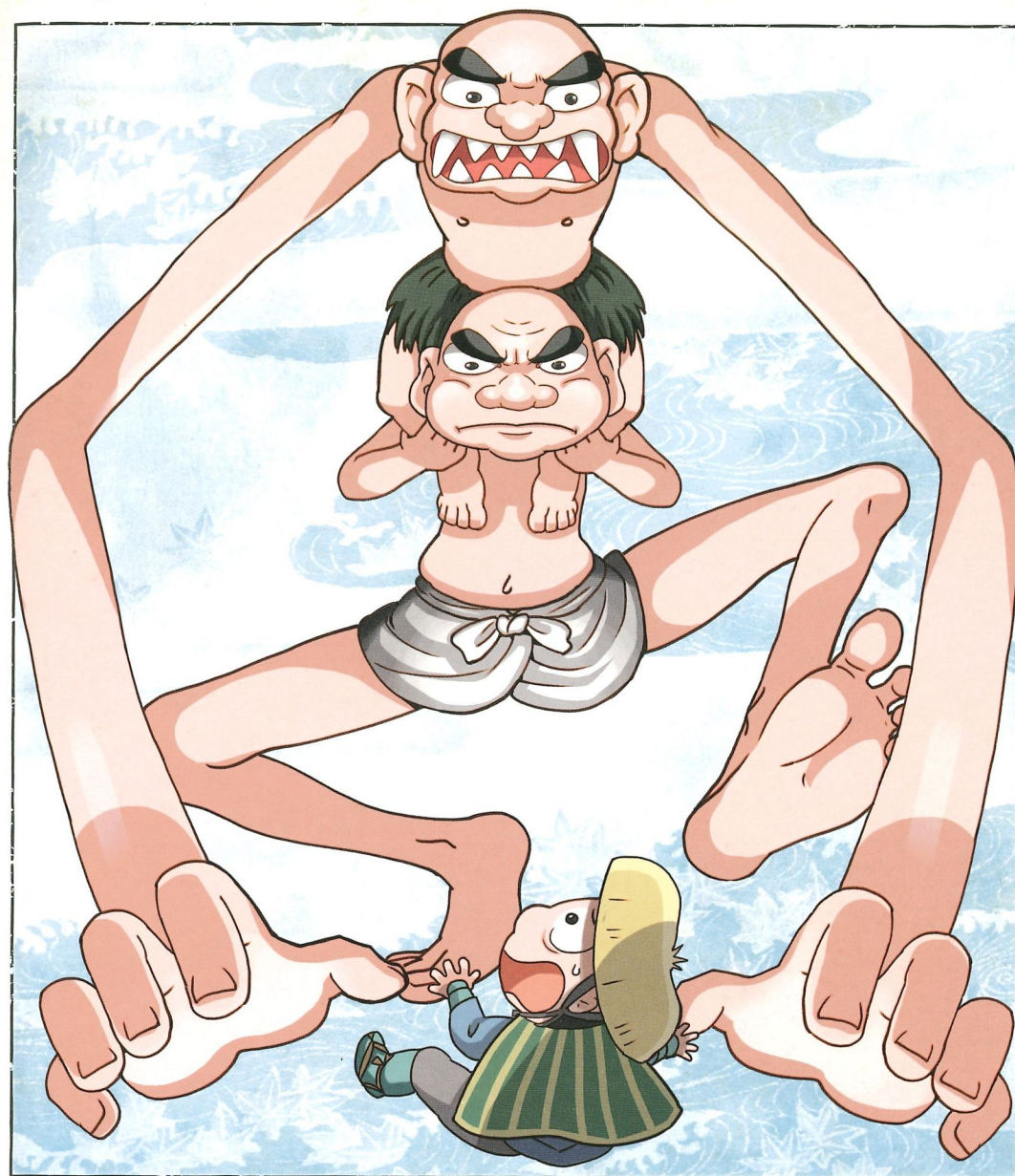
延暦寺をおそった鉄鼠はすがたを消したが、鉄鼠があやつったネズミの大軍はどうなったのだろう？ その後の話が、言いつたえとしてのこっている。

ネズミの大軍は、日本のさまざまな場所にあらわれて悪さをつづけた。京都の延暦寺から遠くはなれた栃木県にまで、ネズミの大軍がおしよせたという。

ネズミたちは、田畑をあらして人びとをこまらせた。くるしむ人びとを見かねた勝軍地蔵というお地蔵様が、ネズミたちを塚にふうじこめたそうだ。

その塚は「来鼠塚」とよばれ、今では神社となっているよ。

手長足長【てながあしなが】

おもな出現場所
山
海岸

長〜い手足をもつとんでもない巨人

手長足長は、山の頂上からふもとの湖の水がすくえるほどの長い手と、広い盆地をひとまたぎできるほどの長い足をもつといわれる妖怪だ。

秋田県、山形県、福島県、長野県など、多くの地域にあらわれたらしいが、それぞれの地域で、すがたがちがっていたという。二人組の妖怪で、ひとりの足が長く、もうひとりの手が長いもの。手も足も長い鬼の妖怪などなど。

そして、山の上から手をのばして人をとって喰ったり、海にうかぶ舟をおそったり、空を雲でおおって不作をまねいたりと、悪さをする妖怪としてつたえられることが多い。

でも、長野県の諏訪明神では、手長足長は神様の家来としてまつられているよ。

手長足長のよもやま話

二人組の手長足長

九州にあらわれた手長足長は二人組の妖怪で、足が長いほうは「足長」、手が長いほうは「手長」とよばれ、足長が手長をかついでいたとされている。

また、足長が浜辺をあるくと天気が悪くなるという言いつたえがあり、漁師たちは、浜辺で足長を見た日には海に舟をださなかったというよ。

三本足のカラスと慈覚大師

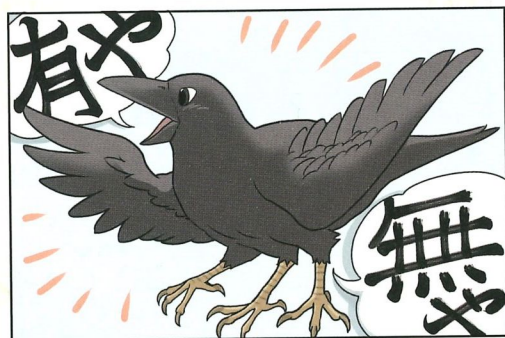
昔、鳥海山という山に手長足長がすんでいて、ふもとの道をとおる人をつかまえては喰っていたという。

見かねた神様が、八咫烏という三本足のカラスをつかわした。八咫烏は道の入り口で、手長足長がいる時は「有や」、いない時は「無や」とないて、人びとにしらせた。この入り口は、「有耶無耶の関」とよばれるようになったそうだよ。

その後、天皇の命令で、慈覚大師というえらいお坊さんが手長足長の退治にやってきた。慈覚大師は、百日間おいのりをして、最後には手長足長を鳥海山ごとふきとばしてたおしたんだって。

手長足長が長生きのお守り!?

清少納言の『枕草子』にも、手長足長のことがでてきている。「天皇がすむ宮殿のふすまに手長足長の絵がかかれていて少しこわい」と、清少納言がいっているのだ。

でも、この手長足長は不老長寿の仙人で、天皇が長生きするようにねがってえがかれたようだよ。

◀八咫烏が「有や」「無や」とないて、手長足長の存在をしらせ、人びとの命をまもったという。

ちょっとだけこわい話

磐梯山の手長足長退治

昔、福島県の磐梯山には、手長足長という夫婦の巨人がすんでいた。巨大な手足で田畑をあらし、人びとをさんざんこまらせていた。

ある時、旅のお坊さんがその話をきいて、小さなつぼをもって磐梯山へのぼった。手長足長の前にたつと、「おまえたちは、このつぼにはいることなどできないだろう」とさけんだ。すると、手長足長は、「自分たちにできないことはない」と、見る間に体を小さくし、つぼにはいった。すかさずお坊さんはつぼを封印し、妖怪をとじこめたという。

手長足長を退治した人は、じつは弘法大師というえらいお坊さんだったのだ。

天狗

【てんぐ】

おもな出現場所
山
森

高い鼻に山伏すがた 神通力をもつ強力妖怪

天狗は、おもに山にすむ妖怪だ。山の神様とされるほど強力な神通力をもち、ふしぎなことをおこすという。すがたは、山で修行する修験道の山伏のようで、鼻が高く赤ら顔をしている。カラスのような長いくちばしをもつ烏天狗をしたがえ、山にはいる人間をまもっているが、時に暴風雨などの天災をおこして、人間に警告やばつをあたえる。

その昔、天狗とは、不吉な流れ星のことを意味したという。その後、山中にひそむすがたの見えないものとされ、さらに、仏教をしんじる人に害をあたえる魔物や、山の神様などとされた。時代ごとに天狗が意味するものはかわったけれど、山でのふしぎにかかわることはいっしょみたいだ。

天狗のよもやま話

山のふしぎと天狗

山でおこるふしぎなできごとは、よく天狗のしわざだといわれる。

だれもいないのに木がたおれる音がすることを「天狗倒し」といい、祭りばやしだけがきこえることを「天狗囃子」、わらい声だけがきこえることを「天狗笑い」という。それから、山の中でとつぜん小石や砂がふってきたり、石がおちてくる音だけがきこえてきたりすることを「天狗礫」、山で若者や子どもがいなくなることを「天狗隠し」とよんでいるんだ。

天狗の親分「八天狗」

江戸時代の書物によれば、日本には四十八種類、十二万五千五百もの天狗がいるらしい。中でも強力な天狗が、「八天狗」とよばれる八人の大親分だ。それぞれ、全国の八つの山（長野県飯縄山、神奈川県大山、滋賀県比良山、京都府愛宕山、京都府鞍馬山、奈良県大峰山、香川県白峰山、福岡県英彦山）にすんでいて、京都府の鞍馬山にすむ「僧正坊」が八天狗のリーダーなんだって。僧正坊は、牛若丸（のちの源義経）に武芸をおしえた天狗としても有名だよ。

天狗はサバがきらい?

山陰や四国では、天狗はサバが苦手だとする言いつたえがある。天狗隠しでいなくなった人をさがす時、「サバ喰った○○（いなくなった人の名前）、やーい」といいながらさがすと、見つかるという。

自分がたべるだけでなく、たべた人がそばにいるのもいやだなんて、天狗のサバぎらいはかなりのものだね。

◀牛若丸に武芸をおしえた僧正坊は、鞍馬山にあらわれたことから、鞍馬天狗ともよばれる。

ちょっとだけこわい話

遠野の天狗森

岩手県の遠野に、天狗森という山がある。昔、ふもとの畑で若者がはたらいていると、顔の赤い大男があらわれた。何者かとたずねてもこたえない。若者はおこって、投げとばしてやろうと大男につかみかかったが、ぎゃくに投げられて気をうしなってしまった。

それから月日がたち、若者は仲間と山に萩をつみにいった。だが、日がくれても若者だけがもどらない。仲間がさがしまわると、山の谷の奥ふかくで、手足をバラバラにちぎられた若者の死体が見つかった。

以前、畑で出会った大男は、天狗森にすむ天狗で、自分に無礼なまねをした若者の命をうばったのである。

テンコロ転ばし

【てんころころばし】

おもな出現場所
坂道

坂道で人をころばせるいたずらもの

「テンコロ」とは、布地をうってやわらかくする時につかう、太い円柱状の木槌のこと。その木槌にのって坂道をころがりおちてくるという妖怪が、テンコロ転ばしだ。

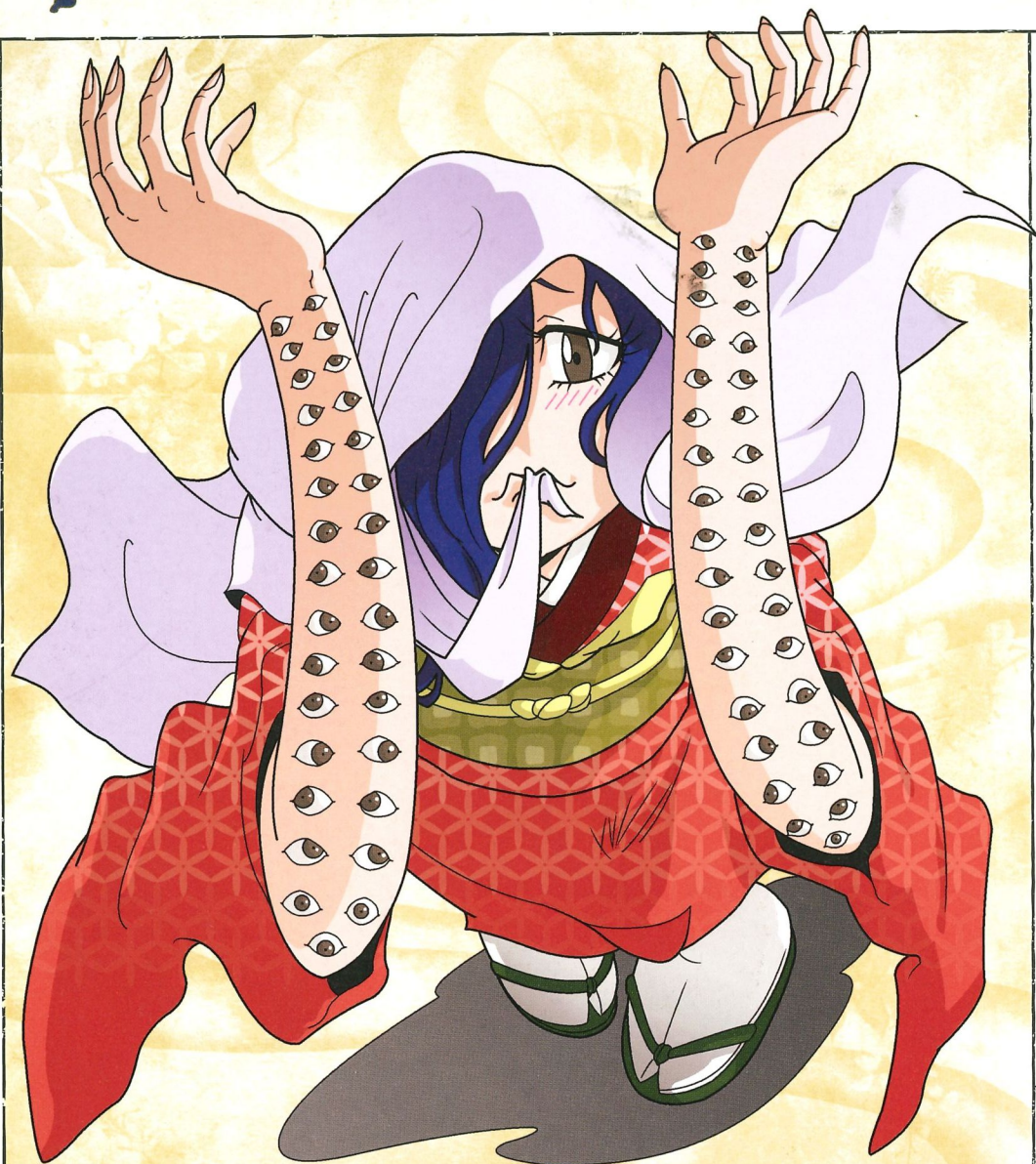
いつもきまった坂道にあらわれるので、夜にその場所をじっと見ていると、テンコロ転ばしがころがりおちていくところが見られるというよ。

いたずらずきな妖怪で、人間が坂をのぼってくる気配があると、ものすごいいきおいで坂の上からころがってきて、その人の足にぶつかり、ころばせるんだ。でも、それ以上の悪さはしないみたい。

坂道でつまずいたりころんだりした時は、いそいでまわりを見まわせば、この妖怪のすがたを目撃できるかも？

百々目鬼

【どどめき】

おもな出現場所
町
道

腕に百の目をもつ女の妖怪

昔、手が長くて、手先が器用な女がいた。女は、その手をたくみにつかって、人から銭をすりとることを得意としていた。そんなくらしをつづけていると、ある日、ぬすんだ銭が女の腕にびっしりとはりついて、ギロリと目を見ひらいた。こうして、女は腕に百の目をもつ百々目鬼となってしまった……。

江戸時代では、一文銭という小銭が広くつかわれていた。まん中に穴があいていて鳥の目のように見えることから、「鳥目」ともよばれた。女の腕にはりついた銭が目になったというのは、この「鳥目」からきているようだ。

ちなみに、体中に百の目をもつ、「百目鬼」という鬼の妖怪もいるよ。

共潜き

【ともかづき】

おもな出現場所
海中

海女さんびっくり！ そっくりに化ける妖怪

海にもぐって海産物をとる海女さんたちから、とてもおそれられた妖怪。この妖怪は、曇った日にしかあらわれないという。

海女さんが海にもぐった時、自分にそっくりな、もうひとりの海女さんと出会うことがある。その正体は、妖怪の共潜きだ。ニッコリとわらいながらアワビなどをくれるが、うっかりうけとってしまうと、いきなり手をつかんで海の底にひきずりこみ、命をうばうそうだ。

共潜きがあらわれた時、海女さんたちはすぐに岸へあがって、しばらく仕事をやすんだ。ある海女さんは、共潜きがあらわれても夫に仕事をつづけさせられ、二度と海からもどらなかったという。

泥田坊

【どろたぼう】

おもな出現場所
田んぼ

田んぼにでる 泥まみれの一つ目妖怪

色の黒い老人のようなすがたの、一つ目の妖怪。手いれをされていない田んぼの中から泥まみれになってあらわれ、「田をかえせ」とさけぶぞ。

昔、はたらきものの男の老人がいた。彼は、毎日まじめに田んぼの世話をして、まずしいながらも家族をやしなっていた。やがて老人が亡くなると、田んぼは息子がうけついだ。しかし、息子は田んぼの世話どころか、はたらきもしない。金にこまると、大事な田んぼを売ってしまった。

安い値段で買いうけた人は、とてもよろこんだが、夜、田んぼには、「田をかえせ」と、さけびながら、泥田坊があらわれたという。

はたらきものの老人が、妖怪になってしまったんだね。

人魚

【にんぎょ】

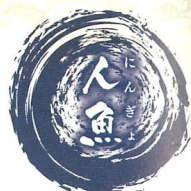
おもな出現場所
海
川

世界中に出現!? 半人半魚の妖怪

きみたちがおもいえがく人魚は、下半身が魚で、上半身が美女のすがたをしているんじゃないかな? でも、それは西洋でのイメージ。日本の古い書物にでてくる人魚は、全身のほとんどがうろこでおおわれていて、顔と手がやや人間とにているだけ。そして、よく見ると、手には水かきがついていて、耳があるところにはヒレがついている。日本の人魚のすがたは、だいぶ魚に近いんだよ。

人魚が海や川にあらわれると、人びとは、天変地異や戦乱などがおこるといって、おそれたという。その一方で、めでたいことだとよろこばれることもあったようだ。

神秘的な存在という点では、西洋の人魚とおなじだね。

人魚のよもやま話

薬になる人魚の肉

人魚の肉は、よいかおりがして、たべるととてもおいしいらしい。さらに、不老不死の体になる妙薬とされ、骨は解毒薬になるともいわれている。

人魚の肉をたべた尼さんにまつわる「八百比丘尼」という伝説がある。その尼さんは、若い娘のすがたのまま、八百歳まで生きたという。ただし、人魚の肉をたべると、たたりがあるという言いつたえもあるぞ。

人魚の目撃情報

日本の歴史書『日本書紀』に、人魚の記述がある。そこには、六一九年に近江国（今の滋賀県）と摂津国（今の大阪府と兵庫県の一部）の川で、人のような、魚のような、奇妙な生物が見つかったとしるされている。

ほかにも、日本各地に目撃情報がある。上半身が魚で下半身が人間というものや、魚の体に人間の手足がはえているというものもいたようだ。

西洋の人魚たち

ヨーロッパでは、女性の人魚のことを「マーメイド」などとよぶけれど、マーメイドにはいろいろな種類があるよ。

ギリシア神話に登場する「セイレーン」は、船のりたちをうつくしい歌声でひきつけ、船を難破させる魔物だ。ドイツのライン川にあらわれる「ローレライ」も、歌声でまどわせて船をしずめるという。

デンマークの童話作家がえがいた「人魚姫」には、人間のすがたになった人魚のお姫様の、かなしい恋の物語がえがかれているよ。

◀下半身が魚で上半身が美女という西洋の人魚のすがたは、日本でもよくしられている。

ちょっとだけこわい話

漁師が殺した人魚のたたり

つかまえた人魚は、にがしてやるとおんがえしをしてくれるという。一方で、人魚を殺すと、たたりがあるといわれている。

昔、ある男が海で漁をしていると、網に人魚がかかった。人魚は、「わたしには家族がいるので、どうか見のがしてください」とたのんだが、男は人魚を殺し、その肉を家にもちかえって、戸だなにしまった。

男には、三人の子どもがいた。男が漁にでている時、子どもたちは人魚の肉を見つけて、たべてしまう。数日後、子どもたちの体からヒレやうろこがはえはじめ、ついには死んでしまったという。

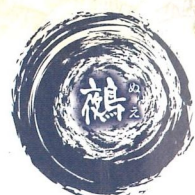
鵺【ぬえ】

おもな出現場所
森
都

動物の体をあわせもつ不吉な妖怪

頭が猿、手足が虎、体が狸で、しっぽが蛇。鵺は、いろいろな動物の体をあわせもつ、奇怪なすがたの妖怪だ。

鵺は、『古事記』や『万葉集』をはじめとする、さまざまな書物に登場する。それらには、夜の森などで鳥のような鳴き声をあげると書かれている。ものがなしげな鵺の声は、不吉のしるしといわれ、その声を耳にしたら、すぐにおはらいをしたそうだ。

『平家物語』など、いくつかの書物では、武士の源頼政が鵺を退治したとしるされている。この時に退治されたのが、ものがなしげな鳴き声をあげ、猿や虎などの体をあわせもつ怪物だった。けれど、この怪物は鵺ではなかったともいわれているよ。

鵺のよもやま話

空をとぶ鵺

どうやら、鵺は空をとぶことができるようだ。古い書物には、黒い雲に化けた鵺が、町の上空にあらわれたとしるされている。また、江戸時代の画家、鳥山石燕は、雲にのった鵺が空からまいおりているところの絵をかいているよ。

近年にえがかれた鵺の絵の中には、鳥のような翼をもっているものもある。さまざまなけものの体をあわせもつ鵺だけに、背中から翼をはやしていてもふしぎなことではないよね。

不吉な鵺を追いはらう方法

平安時代には、たびたび鵺があらわれて、都にすむ人びとをこわがらせていたらしい。そんな時、源義家という武士が弓の弦をはじいて音をならし、鵺を追いはらったと古い書物に書かれている。

弓の弦をはじいてならすことを「鳴弦」といい、邪気をはらうまじないとされていたみたい。

はじめは天皇の入浴や病気、皇子の誕生などの際に鳴弦がおこなわれていたけれど、のちに貴族や武家でも魔よけとして鳴弦をするようになったんだって。

鵺の正体とその鳴き声は?

鵺の正体はさまざまにかんがえられているが、夜の森からきこえる鳴き声についていては、トラツグミという鳥のものだとする説がある。「ヒィィ〜、ヒョォォ〜」と、トラツグミは、まるでだれかがないているようなさみしげな声をあげる。この鳴き声をきいて、昔の人は、妖怪をおもいえがいたのかもしれないね。

◀弓の弦をはじいてならす「鳴弦」で、鵺を追いはらうことができるといわれる。

ちょっとだけこわい話 源頼政の鵺退治

平安時代。京都の御所の空に、夜ごと暗雲がたちこめては、人の泣き声のような、不気味な音がなりひびいた。それが都の人びとをなやませたため、宮中の役人は、弓の名人の源頼政に退治を命じた。

夜、頼政がまちかまえていると、いつものように暗雲があらわれた。頼政がその雲をめがけて弓矢をはなつと、えたいのしれない怪物がおちてきた。猿の頭で手足が虎、体は狸で尾が蛇。この世のものとはおもえないすがたをしている。

頼政は、おどろきながらも勇敢にたたかい、みごと刀で切り殺した。その後、怪物の死体は、舟にのせて川にながしたという。

ぬらりひょん

【ぬらりひょん】

おもな出現場所
町
家

人間社会にとけこむ大胆不敵な親分!?

一見、おじいさんのようなすがたの妖怪。頭が大きくて、上等な着物をきている。

ぬらりひょんは、ふらりと町にあらわれ、かってに家の中にはいってくる。けれど、その場にいる人たちは、まるでそれがあたり前のようにおもえてしまうというからふしぎだ。それは、頭の大きさをのぞいて、ふつうの人とまったくおなじすがたをしているからかもしれないし、その場のふんいきにとけこむことができる能力をもっているからかもしれない。

その実態は、妖怪の親分ともいわれている。こっそりと人間を観察しながら悪事をたくらみ、うらで妖怪たちに命令して、人間をおそわせているのかもね。

ぬらりひょんのよもやま話

有名な妖怪なのに正体はナゾだらけ

江戸時代の画家、鳥山石燕は、和服をきた頭の大きな老人のすがたの妖怪をえがいている。

その絵には解説がなく、なにをする妖怪なのか、どんなところにあらわれるのかなど、まったくわからない。さらに、石燕はこの妖怪を「ぬうりひょん」と名づけているんだけれど、いつから「ぬらりひょん」とよばれるようになったのかも不明なんだって。

人の家にかってにあがりこむといわれたり、妖怪の親分とされたりしたのは、石燕の絵をもとに、のちの人たちが想像してつけくわえたものだともいうよ。

「滑瓢」という言葉がある

辞書をひくと、「滑瓢」という言葉がのっている。ぬらぬらとしていて、とらえどころがなく、しまりがないことをあらわす。今でいう「のらりくらり」とおなじ意味だ。

出会っているのに意識にのこらないといわれる、妖怪のぬらりひょんにぴったりの言葉だね。

おなじ名前の妖怪がいる

岡山県の海にあらわれる海坊主のような妖怪も、ぬらりひょんとよばれているそうだ。

このぬらりひょんは、海の上にうかぶ、人の頭くらいの大きさの玉。漁師がとろうとすると、ぬらりとすりぬけて海にしずみ、また、ひょんとうかんでくる。これを何度もくりかえして、人間をからかっているんだって。

◀貫禄のあるすがたと大胆な行動。妖怪たちの親分であっても、おかしな話ではない。

ちょっとだけこわい話
家にあがりこんでひとやすみ

ある金持ちの大きな屋敷での話。その日、屋敷では、だれもがいそがしくはたらいていたという。

正面の入り口から、ふらりとなにものかがはいってきた。すがたを見たものはいないが、「きっと、屋敷ではたらくものだろう」と、みんな気にもとめなかった。

座敷で、だれかが茶をすすっている。気づいた人は、「奥様がひと休みしているのか」とおもった。

屋敷の主人の部屋から、たばこをふかすにおいがしても「ご主人がおもどりかな」としかおもわなかった。

それらが、ぬらりひょんのしわざだとわかったのは、だいぶあとのことである。

塗壁

【ぬりかべ】

おもな出現場所
夜道
山道

こんなところに壁が？行く手をはばむ妖怪

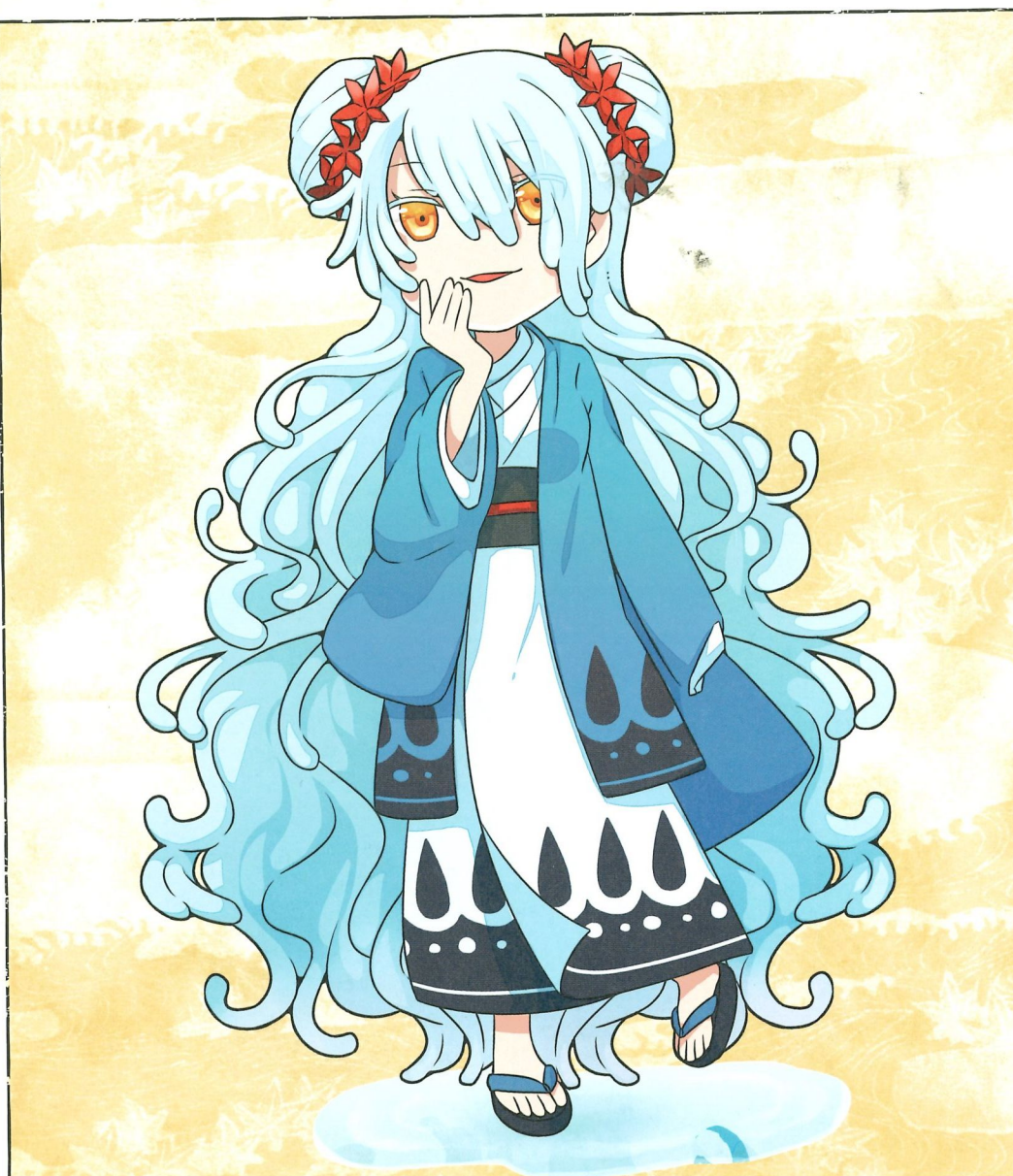
夜道をあるいていると、とつぜん目の前に、あるはずのない大きな壁がそびえたっていることがある。それは、壁のように平たく大きな体をもつ妖怪、塗壁がたちはだかっているのだ。

この妖怪に道をふさがれたら、たたいてこわそうとしても、おしてたおそうとしても、びくともしない。でも、木の枝などで下のほうをはらうと、ふ～っと消えてしまうらしい。

塗壁とおなじような、壁のすがたをした妖怪は、日本の各地にいる。長崎県の「塗坊」は、山道のきまった場所につきでるようにしてあらわれる。高知県の「野襖」は、四方をかこむようにしてたちふさがり、人を完全にとじこめてしまうんだって。

濡れ女子

【ぬれおなご】

おもな出現場所
海
沼

全身ずぶぬれでニヤリとわらう

長崎県や愛媛県などにつたわる妖怪。海や沼、雨の夜道などにあらわれる。

長い髪の毛も、着物も、なぜかびしょびしょにぬれている。それを見た人が、いったいどうしたのかと近づくと、ニヤリとわらうという。でも、その笑顔につられて、うっかりわらいかえしてはいけないぞ。一生、この濡れ女子につきまとわれてしまうことになるからね。

濡れ女子は、「笑い女子」ともよばれている。また、濡れ女子とにている妖怪で、「濡れ女」や「磯女」というものもいる。濡れ女は、顔が女性で体が蛇の妖怪。磯女は、絶世の美女なんだって。

ぬれそぼった美女がいたら、声をかけずにはいられない？

猫股

【ねこまた】

おもな出現場所
町
山

しっぽがふたつある大きな化け猫

しっぽがふたつある大きな猫の妖怪。猫股は「猫又」とも書き、古くから、日本の各地で目撃されているぞ。

鎌倉時代にあらわれた猫股は、毎晩、町にあらわれては数人の人間を喰らっていたという。そのことをしるした古い書物には、「目は猫のごとく、体は大きい犬のようだった」としるされている。

山の中にも、猫股があらわれたようだ。富山県にある「猫又山」や、福島県にある「猫魔ヶ岳」は、猫股がでたという伝説からその名がついたといわれているよ。

ほとんどの言いつたえでは、「飼い猫が年をとると、猫股になる」とされている。中には、人間のすがたに化けるものもいたらしいぞ。

ね ― ねこまた

猫股のよもやま話

『徒然草』にも猫股が登場

鎌倉時代の歌人、兼好法師がつづった『徒然草』では、猫股の話題が、こんなふうにしるされている。

ある人が「奥山に、猫股というものがいて、人を喰い殺しているらしい」とはなしていた。別の人は、「山ではなくて、このあたりでも、猫が化けて猫股になり、人をさらっていくらしい」といっている。

それをきいたお坊さんが、ある夜、道で猫股におそわれて大さわぎをした。けれど、それは猫股ではなくて、お坊さんの飼い犬だった。

飼い主がかえってきてよろこんだ犬がとびついただけだった、という話だよ。

年をとった飼い猫が猫股になる

昔の人は、「年をとった猫は猫股になるから、長い年月にわたって猫を飼うものではない」といっていたそうだ。ほかにも、「年をとった飼い猫は、家をでて山にはいり、猫股になる」ともいわれた。

今の人たちにとっては、大切にしている飼い猫が、猫股になっても生きていてくれるなら、むしろうれしいことなのかも？

「猫又山」の伝説

富山県にある「猫又山」には、こんな伝説がのこされている。

富士山にすんでいた猫股が、平安時代に源頼朝に追われてこの山にきた。猫股が次つぎと人間を喰らったため、山は「猫又山」とよばれ、おそれられた。

その後、大勢の人で追いたてたら、猫股はどこかににげてしまったんだって。

◀年老いた飼い猫が猫股になって、二本足でたったり、踊りをおどったりしたという。

ちょっとだけこわい話

武士の家にでたあやしい火の玉

昔、越後（今の新潟県）の武士の家で、毎晩、小さな火の玉がでるようになった。この火の玉は、家の中をふわふわとびまわって、人をおどろかしたり糸車をまわしたりと、いたずらをくりかえした。

ある夜、武士が庭にでると、植木の枝の上に、ふしぎな猫がいた。頭にてぬぐいをかぶり、尾と足でたちあがっている。

この猫が火の玉の原因とさっした主人は、弓矢で猫の急所を射ぬいた。枝からおちた猫は、はげしくのたうちまわったあと、息たえた。死体をたしかめると、体長は人間の大人ほどもあり、尾が二本ついていた。

ね ― ねこまた

猫娘

【ねこむすめ】

おもな出現場所
家
町

猫のような舌をもつかわいい少女の妖怪

見た目は、かわいいお嬢さん。けれど、人をなめるくせがあり、彼女になめられると、ざらりとした感触がある。それは、猫娘の舌が、猫とおなじようにざらざらとしているからだ。

猫娘は、「嘗女」という怪女とおなじものだともいわれている。嘗女は、徳島県のあるお金持ちの娘で、ざらざらとした舌をもち、男性をなめるのがすきだったんだって。

江戸の町に、まるで猫のようにねずみをとってたべる少女がいたという話もある。彼女は、はじめは家族や近所の人たちから気味悪がられていたけれど、あまりにねずみをとるのが上手なので、しだいに感謝されるようになったそうだよ。

野鎌

【のがま】

おもな出現場所
山

人に気づかれずに鎌で足を切る！

山で仕事をしたり、山をあるいていたりする人が、なにもないところで、すってんころり。けれど、はでにころんだわりに体のどこも痛くない。無事でよかったとおもって、ふと足を見ると、まるで鎌でスパッとやられたような、大きくてふかい切り傷が……。

これは、野鎌のしわざだ。野鎌は、人をころばせて足を切る妖怪なのだ。おもに高知県や徳島県の山あいにあらわれたらしいぞ。

昔、ある地域では、葬式で遺体をうめる穴をほる時に、鎌をつかったという。その鎌は「七日間、墓場においておく」というきまりがあった。きまりをやぶるとたたりがおこり、鎌が妖怪になって、人をおそったんだって。

のっぺら坊

【のっぺらぼう】

おもな出現場所
家
町

ゆで卵のようにつるんとした顔の妖怪

のっぺら坊は、うしろから見ると、ふつうの人とまったく見わけがつかない。でも、顔には、目、鼻、まゆげがないのだ。中には、口もないものがいて、まるで殻をとったゆで卵のようにつるんとしているんだって。

のっぺら坊の言いつたえは、日本各地にのこされている。おもに女性のすがたをしているようだけれど、男性や、子どものすがたをしたのっぺら坊もいるらしいぞ。

その正体は、狸や狐が化けたものともいわれている。これらの動物は、人をおどろかすことが大すきなんだ。のっぺら坊も、顔を見せて人をおどろかすだけの妖怪なので、おなじものだとかんがえられたようだよ。

のっぺら坊のよもやま話

日本各地でよび名はさまざま

のっぺら坊は、「ぬっぺら坊」や「ぬっぺらぼん」、「ずんべら坊」や「ずべら坊」ともよばれている。日本各地にあらわれたので、その地域によって、そのよび名もさまざまなんだ。

のっぺら坊の名前の由来は、「のっぺり」という言葉らしい。平たんで変化がない、という意味だよ。

のっぺら坊とにている妖怪

のっぺら坊とおなじく、目や鼻などがないつるんとした顔の妖怪に、「歯黒べったり」というものがいる。花嫁衣裳をきて、歯を黒くそめた女の妖怪だよ。

のっぺら坊と名前はにているけれど、すがたがまったくちがう「ぬっぺっぽう」という妖怪もいる。顔のようなでこぼこがついた大きな肉のかたまりから手足がはえていて、とてもくさいんだそうだ。また、歌をうたうことがあり、その歌をきいた人は、たちまち老人になってしまうんだって。

たくさんの物語にのっぺら坊が登場

のっぺら坊は、昔話や落語など、いろいろな物語に登場している。明治時代の作家、小泉八雲も「むじな」という作品で、のっぺら坊をえがいているよ。

どのお話でも、のっぺら坊は、人をおどろかす妖怪とされているようだ。

ちょっとだけこわい話

落語『のっぺら坊』

昔、江戸での話。夕ぐれ時に、人の少ない道を、ひとりの商人の男があるいていた。道ばたで若い女がしゃがみこんでないているので、男は心配して声をかけた。すると、ふりむいた女の顔には、目と鼻と口がついていなかった。女はのっぺら坊だったのだ。

男は、あわててにげだし、屋台の蕎麦屋にかけこんで、今見たのっぺら坊のことを店の主人にはなしてきかせた。すると、背をむけていた主人がふりかえり、「その女は、こんな顔ですかい」といった。その顔にも、目と鼻と口がついていなかった。なんと店の主人ものっぺら坊だったのだ。

男は半べそをかきながら家ににげかえり、そのままばったりと気絶した。

次の朝、男は女房におこされて目をさました。すべては夢だったのかと胸をなでおろし、女房に夢の話をした。すると、女房が「それは、こんな顔じゃあなかったかい」とつぶやいた。

なんと、女房も……。

の——のっぺらぼう

貘

【ばく】

おもな出現場所
家
夢の中

悪夢をたべてくれる ありがたい霊獣

動物園にいるバクではなく、中国から日本にわたってきた霊獣だ。そのすがたは、象の鼻、サイの目、牛のしっぽ、虎の足、熊の体をしているぞ。

貘は、人の夢をえさにしている。とくに悪夢が好物だというからありがたい。毎晩、悪夢にうなされるという人は、ふとんにはいる前に三回貘をよぶと、悪夢をたべてもらえるといわれている。また、悪夢で目ざめた時は、「さっきの夢をたべて」と貘におねがいすれば、すっきりとわすれることができるらしいよ。

七福神がのった宝船の絵の中に、貘がえがかれているものがある。一月二日の夜に、この絵をまくらの下にいれてねると、すばらしい初夢が見られるんだって。

歯黒べったり

【はぐろべったり】

おもな出現場所
家
神社

歯がまっ黒 目鼻がない花嫁の妖怪

「お歯黒べったり」ともよばれる、花嫁すがたの妖怪だ。顔には目と鼻がなくて口だけがあり、ニタリとわらうと、まっ黒にそめた歯をのぞかせるぞ。

お歯黒とは、鉄やお茶などからつくった液を歯にぬって、黒くそめること。今でこそすたれた習慣だけれど、歴史は古く、古墳時代（三世紀ごろ）からはじまったとする説がある。平安時代には貴族の間で流行し、江戸時代では、結婚をした女性のほとんどがお歯黒をしていたそうだ。

ある古い書物には、神社で、この妖怪がなきまねをして人をさそっていたとしるされている。そして、だれかに声をかけられると、ふりむいておどろかしていたそうだよ。

化け草履

【ばけぞうり】

おもな出現場所
玄関
物置

そまつにすると化ける履物の妖怪

「ものをそまつにすると、化けてでる」と、昔からよくいわれている。その化け物の中でも有名なのが、この化け草履だ。草履とは、藁などをあんでつくった履物で、今でいうビーチサンダルのような形をしているよ。

ある男が、はきつぶした草履を処分せずに物置の中になげやっていたところ、草履が化けてでるようになった、という昔話がある。履物など、毎日つかうものには魂がやどりやすく、そまつにあつかうと、妖怪に化けて仕返しされたり、たたりがあったりするんだ。

きみたちがはいている靴だって、例外じゃない。いつもお世話になっているのだから、感謝の心をわすれずに。

化け草履のよもやま話

さまざまにえがかれた化け草履のすがた

化け草履は、さまざまなすがたでえがかれている。手足をはやした一つ目の草履のすがたはよくあるが、室町時代には、頭がわらじで藁の甲冑を身にまとった武士のようなすがたでえがかれた。また、江戸時代には、町人の頭が草履や下駄になっているものもある。

もしも現代にあらわれるなら、手足と目玉をつけたスニーカーのすがたをしているのかもしれないね。

身のまわりの化けやすいもの

毎日のようにつかうもので、とくに、肌にふれたり身につけたりするものが化けやすいようだ。

草履や下駄やわらじのほかに、笠や蓑（昔の雨よけ）などの道具も化けたという。人形も化けやすいもののひとつで、中でも、古びた雛人形が化けたという言いつたえが多いようだ。

ほかにも、太鼓が化けた「化物太鼓」や、家そのものが化けた「化物屋敷」なんてのもいるぞ。

じつは陽気な妖怪!?

化け草履などの履物の化け物には、人をおそったり喰ったりといったおそろしい話がほとんどない。

下駄の化け物は、真夜中にあらわれて、「カラリン、コロリン、カンコロリン」と楽しげにうたい、そのまま消えてしまうという。ほかにも、履物の化け物が踊りをおどったという言いつたえもある。

もしかしたら、歌や踊りが大すきな、陽気な妖怪なのかもね。

◀昔は草履や下駄などが化けたが、今なら靴やブーツなどが化けるのかもしれない。

ちょっとだけこわい話

「鼻が痛い」とうったえる古下駄

昔、ある町で、夜中に「鼻が痛い」といいながらあるくものがいた。いったいだれの声かと、みんながふしぎにおもっていた。

若者たちがあつまって、声の主をあばくために、夜中にまちぶせをした。やがて、「鼻が痛い」という声が近づいてきたが、すがたはどこにもない。もしや化け物のしわざかとおそれをなしたが、肝のすわったひとりが、声のあとをつけていった。そして、声がやんだ草むらをかきわけると、そこには鼻緒がとれた古下駄があった。

古下駄を焼いてみたところ、声がしなくなったのだという。

ヒダル神

【ひだるがみ】

おもな出現場所　山　海

人にとりつき腹ペコにさせる妖怪

おもに西日本の山の中にあらわれる妖怪。この妖怪の名前は、「ひだるい」という言葉からきていて、意味は「ひもじい」とか「空腹である」。その名のとおり、この妖怪にとりつかれると、きゅうにおなかがすいてうごけなくなってしまい、最悪の場合は、飢えて死んでしまうのだ。

ヒダル神は、山道のきまった場所にあらわれる。地域によっては、海上や磯、火葬場などでもあらわれたようだ。

近年でも、登山者がヒダル神にとりつかれたらしいという報告がある。その時の状況から、二酸化炭素中毒や血糖値の低下などがうたがわれたけれど、あまりにとつぜんの空腹感は、妖怪のしわざとしか説明できなかったようだ。

ヒダル神のよもやま話

ヒダル神にとりつかれたら

ヒダル神にとりつかれた時は、どんな食べ物でもよいので、一口たべればたすかるらしい。空腹感をみたす行動をとることで、ヒダル神の注意をそらすことができるようだ。

また、もっている食べ物を藪の中になげこんでも効果があるとされる。なげた食べ物をヒダル神が追いかけていくため、空腹感がおさまるというわけだ。うまくいったら、そのすきににげてしまおう。

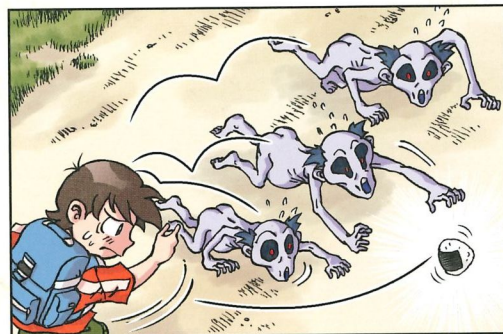
食べ物をもっていない時は、てのひらに漢字の「米」の字を書いて、ぺろりとなめてもいいそうだ。

いずれにしても、ヒダル神があらわれるといううわさがある山にはいったりする時は、すぐにとりだせるところに、食べ物を用意しておくべきだ。

ヒダル神のすがたと正体

名前に「神」とあるけれど、神様のたぐいではないという。山道で餓死したものの霊とされたり、餓鬼とされるのが一般的だ。そのすがたも、やせほそっているがおなかだけをふくらませた餓鬼のようにえがかれることが多い。

餓鬼とは、地獄におちた罪人の一種のこと。仏教の説話などでは、生前に強欲で嫉妬ぶかかった人は、あの世で餓鬼となって、飢えと渇きにくるしみつづけるのだとされている。

ヒダル神は、なにかのひょうしでこの世にあらわれてしまった、餓鬼なのかもしれない……。

◀食べ物をなげれば、とりついたヒダル神が体からはなれて、にげることができるという。

ちょっとだけこわい話

正しい知識ですくわれた命

ある男が山道をあるいている時、いきなりはげしい空腹感がおそってきて、ずしりと体が重くなり、くずれおちるようにその場にすわりこんだ。

男はすぐさま「これは、ヒダル神だ」とさっした。彼は、この山にヒダル神がでるといううわさをきいていて、さらにその対処法もしっていた。

男は、わずかにのこしていたにぎり飯をとりだし、小量をヒダル神にそなえ、のこりを自分でたべた。すると、体に元気がもどり、空腹感もなくなったという。

正しい知識をもっていたからこそ、命がすくわれたのである。

人魂 【ひとだま】

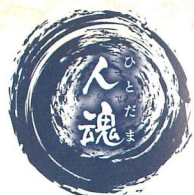
おもな出現場所
町
墓場

ゆらゆらとただよう魂のともしび

古今東西、人魂を見たという話は数しれない。青白い光が空中をただようというものや、黄色い火の玉が猛スピードでとんでいくというものなど、いくつかのタイプの人魂がいるようだ。どのタイプでも、空中にうかぶ発光体という点はおなじである。

人魂は、人が死ぬ瞬間に、魂が体からぬけだしたものだといわれている。ただし、すべての人の魂が死後に人魂となるわけではない。一説には、死ぬ時にとてもあいたい人がいると人魂になり、その人のもとにいくらしい。まれに、生きている人が意識をうしなった時にも人魂がとびだすことがあり、人魂が体にもどったら正気にかえった、という話もある。

人魂のよもやま話

人魂のすがた

人魂は、いろいろな目撃談や言いつたえがあるが、すがたについては共通点があるようだ。

まるい形で、しっぽのようなものがあり、全体的にはしゃもじやオタマジャクシのようなかっこうをしている。中には、目、耳、鼻、口があるものもいる。

色は、青白いもの、黄色いもの、かすかに赤いものなどがあり、どれもほのおのように見える。

地面からあまり高くない空中をただようが、意思があるかのようにとぶこともある。おもに夜にあらわれるが、昼にもでる。

古い書物には、地面におちた人魂のことがしるされている。その人魂は、光をうしない、あわのようにくずれ、変なにおいをはなっていたそうだ。

人魂の正体を科学的に解明？

人魂の正体を解明しようとする人もいた。

昔からよくかんがえられたのは、正体を「虫」とするもの。蚊や虻、コガネムシなどがあつまってとんでいると、人魂のように見えるという。

科学的な考察もされている。ある研究者は、死後、人の体から発生するリンという物質が発光したものだとかんがえた。別の研究者は、空気中の放電で発生したプラズマだと説明している。ほかにも、ガスをつかって人工的に人魂をつくりだした人もいる。

しかし、それぞれの説では解明できないことも多い。人魂の正体は、今でもナゾにみちているのだ。

◀人魂がなにでできていて、どうやって空をとんでいるのか、科学的に研究する人もいる。

ちょっとだけこわい話

人魂とにている「火」

日本全国にあらわれる人魂。そのよび名や言いつたえは、地域によってさまざまだ。

高知県などでは、人魂のことを「ケチ火」とよぶ。ケチ火の中には、人がねている時に魂が肉体からはなれて、あたりを散歩するというものもいるという。

「鬼火」とよばれるものは、空中にゆらめく青い火のことで、人や動物の怨念が、火となってあらわれたものだとされている。

「狐火」というのは、集団であらわれるナゾの火のこと。数百個もの火が行列をつくるようにしてあらわれ、正体をたしかめにいくと、まるで狐に化かされたように消えてしまうのだとか。

一つ目小僧

【ひとつめこぞう】

おもな出現場所：家、町

大きな目玉がひとつ 昔から有名な妖怪

顔のまん中に大きな目玉がある、坊主頭の子どもの妖怪。笠をかぶり、着物や袈裟をまとったすがたでえがかれることが多い。

一つ目小僧は、今でもとても有名な妖怪だね。それは、昔もおなじで、江戸時代のさまざまな書物に、一つ目小僧が登場しているよ。その多くが、「子どもかとおもって相手をしていたら、目がひとつしかないのでおどろいた」というもの。見た目はおそろしいけれど、じつは、たいした悪さはしない妖怪なんだ。

ふらりとあらわれて、勝手にお菓子をたべたり、部屋にあるものであそんだりするらしい。いかにも子どもらしくて、人間にきょうみしんしんな妖怪なのかもね。

一つ目小僧のよもやま話

人に見られると「だまっていよ」という

江戸時代、ある武家屋敷に、十歳くらいの子どものような一つ目小僧がたびたびあらわれたという。

この一つ目小僧は、ある時は、たんすにしまってあったお菓子をかってにとりだしてつまみぐいをし、また ある時は、部屋の掛け軸をくるくるとまいてあそんでいた。どちらも場合も、人に見つかると、「だまっていよ」といって、すがたを消したらしい。

でも、このことを人にはなしても、たたりなどはなかったみたい。「だまっていよ」といったのは、いたずらがばれて、はずかしかっただけなのかもね。

長い舌をもつ一つ目小僧もいる

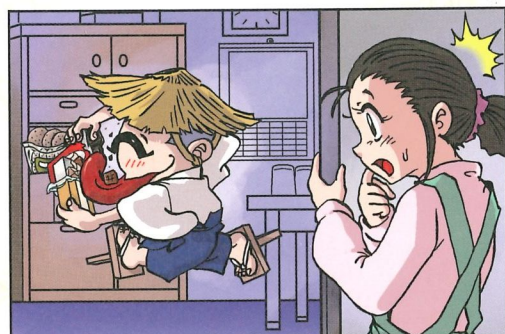
岡山県にでた一つ目小僧は、長い舌をもっていたという。

この一つ目小僧は、いつもおなじ坂道にあらわれて、夜にとおる人をペロリと一口なめるんだって。

そのことから、この坂は、「一口坂」とよばれるようになったとか。

えらいお坊さんの一つ目小僧？

京都にあらわれる一つ目小僧は、ふまじめであそびあるいてばかりいるお坊さんの前にあらわれるという。まるでおこっているかのように、もっている鉦をうちならすんだって。

これは、えらいお坊さんが一つ目小僧のすがたになって、若いお坊さんたちを見はっているのだとつたえられているよ。

◀家にあがって、お菓子をつまみぐいし、人に見られると「だまっていよ」というらしい。

ちょっとだけこわい話

「一目寺」の一つ目小僧

昔、ある侍が、「一目寺」という古寺をたずねた時のこと。

客間にあがると、数人の小坊主たちが、なにかをかぞえていた。小坊主たちの顔を見て、侍はふるえあがった。顔面には、大きな一つ目しかなかったからだ。

小坊主たちがかぞえているものに目をこらすと、それは人の首だった。彼らは、侍をちらりと見ると、「また首がひとつふえるぞ」といってわらいだした。

あわててにげだした侍が、のちに、地元の人からきいたところによると、そのお寺は「大魔所」といわれ、あの世とつながっている場所なのだという。

ヒョウスベ

【ひょうすべ】

おもな出現場所
山
川

不気味なわらい声
人を殺す妖怪

「ヒョウスヘ」「ヒョウスボ」ともよばれる妖怪。九州の一部では、河童のことをヒョウスベという。

山あいで、「ヒョウヒョウ」という不気味な音がきこえたら、それはヒョウスベのわらい声だ。この声につられて、こちらもうっかりわらうと、死んでしまうともいわれる。

ヒョウスベは、人形が化けたものという言いつたえがある。ある大工が、仕事の成功をねがって人形をつくり、それを川にながしたところ、人形がヒョウスベに化けて人をおそうようになったそうだ。

その地域では、川でおきる事故はヒョウスベのしわざだとされ、その難からのがれるために、大工の道具をつかって魔よけをするのだとか。

貧乏神

【びんぼうがみ】

おもな出現場所
家
店

すみつかれたら大変
みるみる貧乏になる

「窮鬼」ともいわれる神、または妖怪。ぼろ布のような着物をきた、やせぎすな男の老人のすがたでよくえがかれる。

貧乏神は、なんとなく気にいった家にふらりとあがりこみ、押入れの中にすみつくという。貧乏神にいすわられた家の人は大変だ。お金をおとし、給料はさがり、賭け事にまけて、借金を背おう。とにかく、お金にまつわるすべてのことが、悪いほうにかたむいてしまうのだ。

ただし、貧乏にはなるけれど、病気や事故など、命にかかわるほどの悪いことはおこらない。昔、江戸の武士が、「年中貧乏だが、悪いことがないのは貧乏神のおかげだ」といって貧乏神をまつったら、少し金運があがったそうだよ。

二口女

【ふたくちおんな】

おもな出現場所
家

頭のうしろに大きな口をもつ妖怪

頭のうしろにもうひとつの口をもつ、女性の妖怪。江戸時代の書物『絵本百物語』には、髪の毛を手のようにつかって、後頭部に食べ物をはこぶ女性の絵がかかれているよ。

二口女は、人が化けたものとも、山姥や蜘蛛が化けたものともいわれる。人が化けたという説には、こんな言いつたえがある。

子どもを飢え死にさせた女が、ある日、後頭部に傷をおったところ、その傷がぱっくりとひらいて口のようになった。ふしぎなことに、食べ物を傷口にいれると、いたみがひく。どんどん食べ物をいれていると、歯や舌がのびてきて、しまいにはその口が「あの子を殺したのはまちがいだった」とはなしだしたという。

経立

【ふったち】

おもな出現場所
山
里

長生きして化けた人間をうらむ動物たち

長生きした動物は、妖怪になってふしぎな力を身につけ、人間に悪さをするという。東北地方では、そのような妖怪を「経立」とよび、愛知県では「フッコ」とよんでいるよ。

経立にはいろいろな種類の動物がいて、能力もそれぞれことなるみたいだ。猿の経立は、鉄砲でうたれても死なず、人間の女性をさらっていくという。鶏の経立は、それまでさんざん卵をたべられた仕返しに、たたりで人間の子どもを殺すらしい。犬の経立は、巨大化して人間を喰い殺すんだって。

どうやら、人間にうらみをもつ動物が経立に化けて、仕返しをしているようだ。ペットでも野生でも、動物にはやさしくしないといけないね。

舟幽霊

【ふなゆうれい】

おもな出現場所：海　川

「ひしゃくをかせ〜」舟をしずめる亡霊

ある漁師が、夜の海に舟をだして魚をとっていた時、舟幽霊たちがのったたくさんの舟にかこまれたという。舟幽霊たちは、口ぐちに「ひしゃくをかせ〜」といっている。おびえた漁師が、いわれたとおりにひしゃくをわたしたところ、舟幽霊たちはそれをつかって海水を舟の中にどんどんとくみいれ、あっという間に舟を沈没させた……。

舟幽霊は、難破した舟にのっていた人が、死後、亡霊や妖怪となってあらわれたものだといわれている。彼らは、生きている人たちを水死させて、自分たちの仲間にしようとしているのだ。

舟幽霊は、おもにお盆にあらわれる。その時期に舟にのるなら、注意が必要だ。

舟幽霊のよもやま話

舟幽霊に出会う前に準備すべきもの

漁師たちは、舟幽霊があらわれた時のために、あるものを準備していたそうだ。それは、あらかじめ底に穴をあけておいたひしゃくだ。舟幽霊があらわれて、「ひしゃくをかせ〜」といってきたら、その穴あきひしゃくをわたせばいい。舟幽霊たちがせっせと海水をくんでも、ひしゃくの底からもれでてしまう。やがて、舟幽霊たちはあきらめて消えてしまうので、舟をしずめられずにすむんだって。

ほかにも、舟幽霊をしりぞける方法がある。「にぎり飯をなげる」、「餅を四十九個なげる」、「かまどの灰をまく」、「こわがらずに、舟幽霊をにらみつける」「とにかくたたかう」など。地域によって、撃退方法もさまざまだ。

いろいろなタイプの舟幽霊がいる

複数であらわれ、ひしゃくで水をくみいれてくる舟幽霊のほかにも、いろいろな舟幽霊の話が日本各地につたえられている。

「幽霊船」とよばれる舟幽霊は、舟そのもののすがたをしている。小舟や帆船や汽船など、時代ごとに形や大きさがかわるといわれ、いきなり体あたりをしかけてきて、舟をしずめようとするらしい。

いつの間にかこちらの舟にあがっているという舟幽霊もいる。中には、首だけのものもいて、ヘラヘラとわらったり、きさくに声をかけてきたりして、自分たちの仲間にとりこもうとするんだって。

▲生首のすがたの舟幽霊は、舟のへりにのって、わらったり話をしたりするという。

ちょっとだけこわい話

舟幽霊をおこらせるな

昔、ある漁師が夜の海に舟をだした。沖につくと、あたりが霧につつまれ、なまぬるい風がふいてきた。

数艘の舟がやってくる。目をこらして見ると、それらの舟には舟幽霊がのっていた。舟幽霊たちは漁師の舟をとりかこみ、「ひしゃくをくれ〜」と口ぐちにいった。漁師が「ひしゃくなどない」とこたえると、舟幽霊が消え、霧もはれた。

漁師は、港にもどろうと、いそいで舟をすすめた。すると、とつぜんなにかにぶつかって舟がこわれ、漁師は海になげだされた。

舟幽霊は、ひしゃくをもらえなかったことにおこり、大きな岩場を漁師から見えないようにしていたのだ。

ふ ― ふなゆうれい

古杣

【ふるそま】

おもな出現場所　山

きこりのまねをして音をだす妖怪

山の木を切るきこりたちは、いろいろな音をだす。おので「カーン、カーン」と木をたたき、木をたおす時には「いくぞー」と仲間に声をかけ、たおした木は「ズイコ、ズイコ」と、のこぎりをひく。そんなきこりがだす音のまねをする妖怪が、古杣だ。

だれもいないはずの山の中で、木を切る音や、木がたおれる音、のこぎりをひく音がきこえる。でも、そこにいってもだれもいないし、木もたおれていない。それらはすべて、古杣のしわざなのだ。

古杣は、仕事中に死んだきこりが化けたものだという。きこりたちの声にまざって、「いくぞー」と声をあげることもあるとか。いっしょに仕事をしているつもりかもね。

べとべとさん

【べとべとさん】

おもな出現場所　夜道

背後にせまる「べとべと」という足音

足音だけの妖怪で、名前もその足音からついたとされている。すがたは、よくわかっていないようだ。

夜道をあるいていると、背後から「べと、べと」というしめりけのある足音がきこえてくる。ふりかえってもだれもいない。ふたたびあるきだすと、また「べと、べと」とついてくる。

悪さをされるわけではないけれど、こんな足音でついてこられたら、うす気味悪い。そんな時は、道のはしによって、「べとべとさん、お先へどうぞ」といってみよう。足音が、自分を追いぬいて、先にいってしまうんだって。

べとべとさんとおなじ足音だけの妖怪で、「ひたひたさん」というのもいるよ。

枕返し

【まくらがえし】

おもな出現場所
家

夜中にこっそりと まくらをうごかす妖怪

きみたちも体験したことがあるんじゃないかな？　朝、目がさめたら、まくらが頭の下にはなく、足のほうやへんなところに移動していたなんてこと——。

枕返しは、ねている人のまくらを、そっとうごかす妖怪だ。なぜそんなことをするのか？　単なるいたずらとかんがえられることが多いけれど、こんなおそろしい説もある。

ねている時、人の魂は、肉体をぬけでて夢の世界へいくという。まくらは夢の世界に移動するための道具であり、まくらをうごかしてしまうと、魂が肉体にもどれなくなるらしいんだ。

つまり、枕返しは、まくらをうごかして、人を殺そうとしているんだって……。

枕返しのよもやま話

枕返しのすがたとその正体は？

江戸時代の画家、鳥山石燕は、枕返しを小さな仁王像のようなすがたにえがいている。

静岡県には「枕小僧」という子どものすがたをした妖怪がいて、枕返しとおなじように、ねている人のまくらをうごかすのだとか。

東北地方では、「座敷わらし」のしわざとされ、まくらが移動する時は、福をよぶ座敷わらしが家にすんでいる証拠だといって、よろこばれたんだって。

いずれの説にも共通するのは、枕返しが子どものような小さな体をしているということだ。

枕返しの正体は、その部屋で死んだものの霊とされたり、狸や猿や猫などの動物のしわざとされたりする。有名な妖怪だけど、じつは、不明な点が多いんだ。

平安時代の人も「まくら」を重要視？

平安時代の書物『大鏡』に、まくらにまつわる記述がある。

藤原義孝というえらい人が、「死後、わたしは生きかえる。そのために、わたしの葬儀では、まくらの位置をかえてはいけない」と遺言をした。

義孝が亡くなって葬儀がとりおこなわれた時、遺言のことをうっかりわすれて、通常の葬儀にしたがい、まくらを北むきにおきなおしてしまった。そのせいで、義孝は生きかえることができなかったという。

まくらは、生と死の世界をつなぐ、大事なアイテムだったんだね。

◀いたずらずきな狸などの動物が夜中にまくらを移動させているという説もある。

ちょっとだけこわい話

枕返しがあらわれる宿

昔、ある旅館の主人が、目の不自由な客をとめた。部屋にはいった客は、そばにひかえていた主人が見えず、だれもいないとおもいこんで、ふところから大金をとりだして、かぞえはじめた。主人は、あまりの大金に目がくらみ、客を殺して金をうばった。

それからというもの、この宿では、霊が夜な夜なあらわれるようになった。この霊は、宿にとまった客のまくらを次つぎとかえしてまわった。

枕返しがでるとうわさがたった宿は、原因不明の災難もたびたびおこって客足が遠のき、やがて、すたれてしまったという。

ミカリ婆

【みかりばばあ】

おもな出現場所
町

家をたずねあるく一つ目の老女

関東地方にあらわれる、一つ目の老女の妖怪。夜の町をうろつき、鍵がかかっていない家の中にあがりこんで、おそろしい悪事をはたらくぞ。

「みかり」という言葉は、不吉なものから身をかくすという意味。ミカリ婆がやってくる夜は、どの家も、玄関の前に魔よけとしてかごやざるなどをだし、戸をかたくとざしたというよ。

ミカリ婆は、「目借り婆」ともいう。いきなり家にあがりこんできて住人をさがしまわり、人を見つけると、その目玉をうばいとってしまうんだって。

一つ目というすがたは「一つ目小僧」とおなじだけれど、ミカリ婆は、人をおどろかすだけではない、こわい妖怪だ。

ミカリ婆のよもやま話

ミカリ婆が大きらいなもの

一つ目のミカリ婆は、たくさんの目があるものをこわがるという。

玄関先にかごやざるなどをだして、ミカリ婆を追いはらうというのも、その弱点をついたもの。ざるやかごには、たくさんの編み目があるから、ミカリ婆はその「目」をこわがり、近よらなくなるんだって。

きまった日に出現

ミカリ婆があらわれるのは、十二月八日と、二月八日だといわれている。

これらの日は、おもに東日本で、「事八日」とよばれている。十二月八日は一年の行事のおわりの日、二月八日は次の一年の行事のはじまりの日とされるよ。

昔、事八日は、物忌をする日だったという。物忌とは、祭りのため、またはわざわいからまぬかれるために、行動をつつしみ、けがれたことをせずに家にこもることで、縁起かつぎのようなものでもある。

事八日に家にこもるという風習が、いつしか意味がかわり、おそろしいものから身をまもるためとされるようになった。それが妖怪のミカリ婆とかさなって、「ミカリ婆がくるから外にでてはいけない」という意味になったようだよ。

一つ目小僧とともに

ミカリ婆は、一つ目小僧とともにやってくるという言いつたえもある。ミカリ婆によりそうようにして、いっしょに民家をたずねあるくのだとか。

おなじ一つ目どうしで、なかよしの妖怪なのかもしれないね。

▲一つ目小僧は、ミカリ婆についてくるだけで、これといった悪さはしないようだ。

ちょっとだけこわい話

迷信とわらった男

年の瀬近い夜。村では、どの家も戸をかたくとざし、戸口には魔よけのかごやざるがだされていた。

「トントン、トントン」

どこかの家で、戸をたたく音がした。今年も、ミカリ婆がやってきてしまったのだ。

村には最近、よその土地からこしてきた男がいた。男は、村の人たちがミカリ婆の話をきかせても、ただの迷信だといって、わらいとばすだけだった。

「トントン、ガラリ」

男の家の戸がひらく音がした。次の瞬間、男の悲鳴が村中にひびきわたった。

次の日、男は家の中で、片方の目をうしなって、気絶していたという。

見越し入道

【みこしにゅうどう】

おもな出現場所：里、山

見た人の命をうばう巨大化する坊主

見越し入道は、お坊さんのすがたであらわれ、どんどん大きくなる妖怪だ。地域によっては、「見越し」や「お見越し」ともよばれる。また、「加牟波理入道」とおなじ妖怪とされることもあるよ。

見越し入道は、坂道をあがっている時、その前方に出現することが多いという。「大きなお坊さんがいるな」と、のんきに見あげていると、とてもキケンだ。見あげれば見あげるほど、見越し入道の体が大きくなっていくのだ。見あげすぎてうしろにたおれてしまうと、見越し入道におおいかぶさられ、首を切られてしまうぞ。また、巨大な見越し入道に、頭の上をひとまたぎされると、死んでしまうという話もある。

見越し入道のよもやま話

見越し入道に出会ってしまったら

見越し入道に出会ってしまった時に、命をうばわれないための対処法がいくつかある。

見あげると大きくなるので、ぎゃくに、見越し入道の頭から足のほうに見おろせばいい。これで、見越し入道の巨大化をふせげるというぞ。

ものさしなど、長さをはかるものをもっていたら、見越し入道の背の高さをはかってしまおう。はかろうとしたその瞬間に、すがたを消してしまうそうだ。

見越し入道をしりぞけることができる、呪文のようなものもある。「見越し入道、見越した」や「見越し入道、見ぬいた」ととなえると、ふっと消えてしまうんだって。

ぎゃくに、見越し入道をよびつける、キケンな呪文もある。大みそかの夜に、トイレで「見越し入道ホトトギス」と三回となえると、かならず見越し入道があらわれてしまうというのだ。

見越し入道の意外な弱点

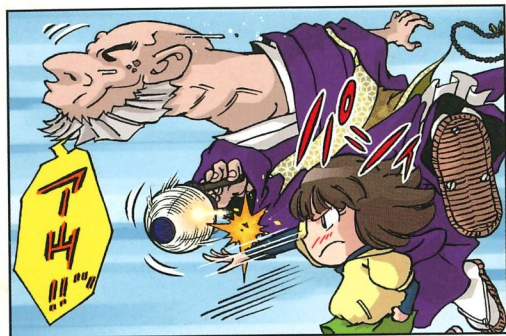
どこまでも巨大化する見越し入道には、弱点などなさそうだ。

でも、すがたをよく見てみると、かならずその手に、おけやなた、ちょうちんなどを持っている。

じつは、この持ち物が見越し入道の本体で、大きな体は見せかけのものなんだ。

つまり、見越し入道の持ち物を攻撃すれば、あっさりと退治できるってわけ。

腕に自身のある人は、たたかいをいどんでもいいかもね。

◀見越し入道が手にしているちょうちんなどの道具を攻撃すれば、退治できるという。

ちょっとだけこわい話

見越し入道の巨体が夜空をおおう

昔、ある侍が、山で狩りをしていた時のこと。ちっとも獲物がとれず、ついには夜になってしまい、侍はその場でひと休みすることにした。ふと谷のほうを見ると、なにやら大きなものが、むくりとおきあがったような気がした。目をこらして見あげると、それが見越し入道だと気がついた。

その時点で、見越し入道の体は、まわりの山よりも大きく、夜空までおおいかくすほどになっていた。

侍は、無我夢中で弓をひいた。すると、見越し入道がたおれてきて、侍におおいかぶさったかとおもうと、ふっと、あとかたもなく消えてしまったという。

蛟

【みづち】

おもな出現場所
川
山

蛇の体に四本足
川辺にあらわれる妖怪

蛇のようなすがたをした妖怪。蛇の神や、竜の一種ともいわれる。

蛟は、蛇の体に四本の足をもち、頭に角をはやしていて、体長は約三メートルほどあるという。口からは、人の命をうばう猛烈な毒気をはなつ。また、天候をあやつることができて、局地的に雷をおとしたり、暴風雨をまきおこしたりする。すみかは川の中や、山中の土の下などとつたえられる。

日本や中国の古い書物に、蛟のことがたびたびしるされている。その中で、「鹿に化ける」「空中をとぶ」「竜になって海にもぐる」「川を氾濫させる」など、蛟のさまざまな力について書かれているが、その正体はナゾが多いんだ。

蛟のよもやま話

『日本書紀』での蛟

奈良時代にしるされた日本の歴史書『日本書紀』に、蛟があらわれたと書かれているよ。

仁徳天皇の時代、岡山県の川に蛟がすみついていた。その川の近くをとおる人が、蛟の毒にやられてたびたび命をおとすので、県守という人が退治することになったという。

県守は、川に三つのひょうたんをなげこみ、蛟にむかって「おまえがこの三つのひょうたんをすべて川の中にしずめることができたら、退治しないでやろう。できなければ成敗する」といった。すると、蛟は鹿に化けて川にはいり、足でふみつけて、ひょうたんをしずめようとした。

ところが、三つのひょうたんを同時にしずめるのは、なかなかむずかしい。県守は、鹿のすがたの蛟がひょうたんをしずめるのに夢中になっている間、川にはいって刀で切り、みごと退治したんだって。なんだかふしぎな話だね。

『山海経』での蛟

中国の古い書物の『山海経』には、蛟についてこんなふうにしるされているよ。

ある一定の場所に、魚が二千六百匹あつまると、そこに蛟がやってきて、魚たちの長になるという。

また、ひどい雨がふり、山の水があふれ、多くの家がながされた時、地元の人たちは口ぐちに「蛟がでた」というそうだ。

それから、山あいにあらわれて雨や風をよぶ蛟は、その後、竜になったり、海にうつりすんだりするというんだって。

こちらも、ふしぎな話ばかりだ。

◀鹿に化けた蛟が川にうかべた三つのひょうたんをしずめようとしたが、苦戦したという。

ちょっとだけこわい話
ひょうたんと川の神

昔、雨のたびに氾濫する川があった。そのつど川岸の補強工事がおこなわれたが、それでも川はあふれかえった。人びとはこれを「川の神がおこっているのだ」とかんがえ、生け贄をささげることにきめた。

生け贄にえらばれた人は、命をおとすことをよしとせず、知恵をはたらかせた。川にひょうたんをなげいれて、こうさけんだのだ。

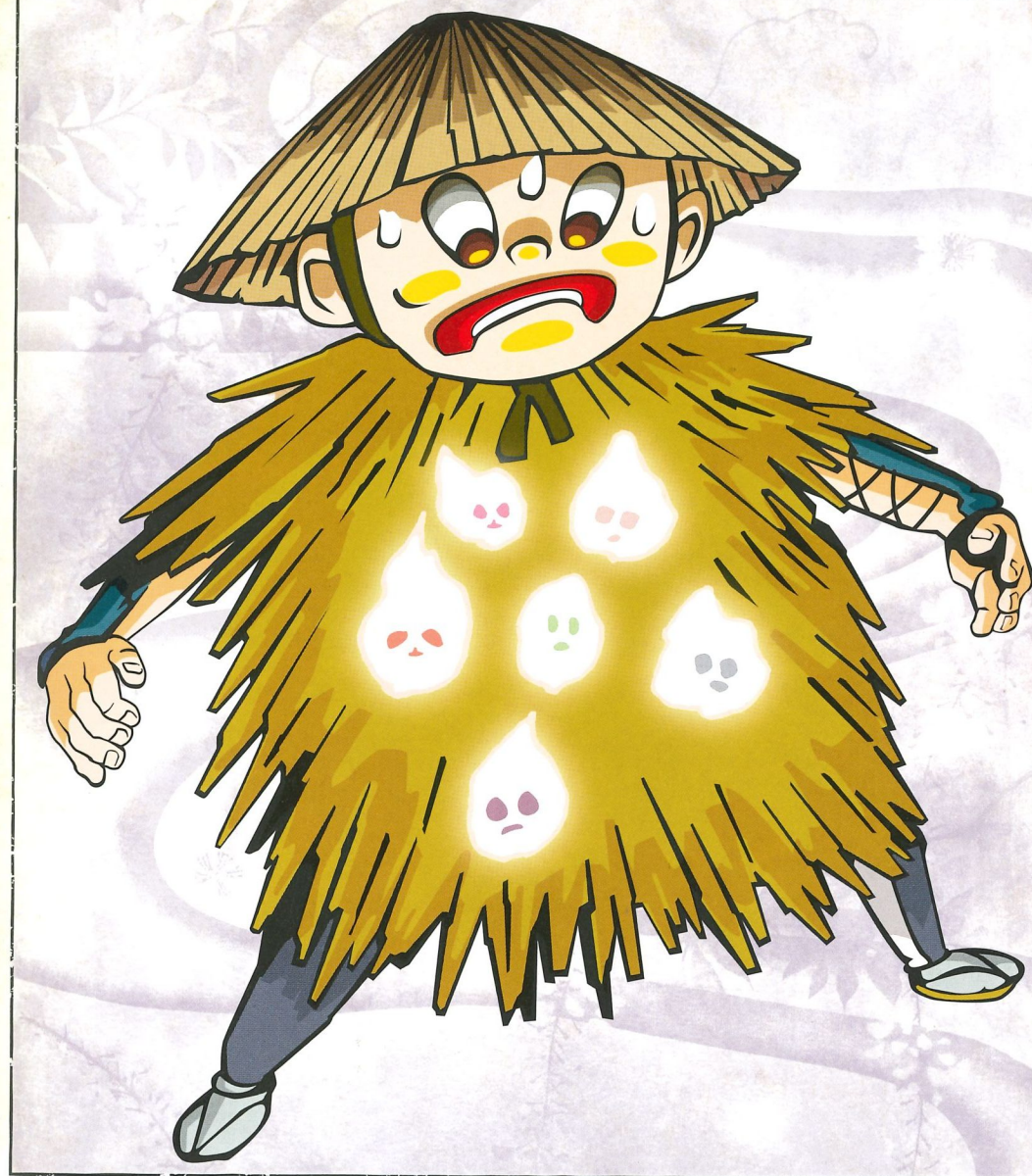
「神よ、あなたが本当に生け贄をのぞむなら、そのひょうたんをしずめたままにしてみせよ」

はたして、ひょうたんはしずむことなく、ういたまながれていった。

この川の神の正体は、蛟だともいわれている。

蓑虫

【みのむし】

おもな出現場所
蓑
傘

蓑にまとわりつく多数の火

蓑というものをしっているかな？　わらでつくられた雨具の一種で、今のレインコートみたいなものだ。この蓑に、虫のようにとりつく妖怪が、蓑虫だ。蛾の幼虫のミノムシとはちがうものだよ。

雨がふる夜に蓑をきて、道をあるいたり、舟をこいだりしていると、蛍のようなあわい光が蓑にくっつくことがあるという。これが蓑虫で、だんだんと数をふやし、火のようにもえだして、しまいには体中をつつみこむのだ。本当の火だったら大変だけれど、蓑虫の火は熱くなくて、やけどもしない。あわてずにじっとしていると、自然に消えてしまうんだって。

現代では、傘や服にも、蓑虫がとりつくというよ。

魍魎

【もうりょう】

おもな出現場所
墓場
里

墓場にあらわれ死体をたべる妖怪

死者の体をたべる妖怪。とくに肝の部分が好物なのだとか。人間の子どもくらいの大きさだけれど、肌の色は赤黒く、赤い目と長い耳をもち、ふさふさとした髪をはやしているぞ。

江戸時代の書物の『耳袋』に、魍魎のふしぎな話がしるされている。

柴田という役人のもとに、はたらきものの家来がいた。ある日、家来は柴田のところへやってきて、「じつは、わたしは魍魎です。ある村で死人がでたようで、それをたべる役目がまわってきたため、仕事をやめさせていただきます」といい、すがたを消した。

柴田がその村をたずねると、最近、葬儀中に死体がなくなる事件があったという。

夜行さん

【やぎょうさん】

おもな出現場所
里
夜道

首なしの馬にのる一つ目の鬼

夜行さんがどんなすがたをしているか、さまざまな説があるが、首のない馬にまたがった一つ目の鬼というのが有名だ。

この妖怪は、夜にあらわれて、人里近くをさまようのだという。道で出会った人は、首なしの馬に蹴り殺されてしまい、家の中をのぞきこんだ夜行さんと目があうと、不幸になってしまうんだって。

夜行さんの名前は、「百鬼夜行」に由来するとかんがえられている。百鬼夜行とは、鬼や妖怪が夜中に集団で道をねりあるくことだ。

夜行さんも百鬼夜行も、まったくおなじ日にあらわれるとされている。その日の夜は、外出をさけたほうが身のためだ。

夜行さんのよもやま話

さまざまにつたわる夜行さんのすがた

夜行さんのすがたは、首のない馬にまたがる一つ目の鬼というもの以外にも、いろいろな言いつたえがあるぞ。

徳島県や香川県では、首のない馬の妖怪そのものを夜行さんとよぶ。首なしの馬の上には、だれものっていないそうだ。

高知県にあらわれるヤギョーは、音だけの妖怪。お坊さんがもっている錫杖という杖を、「ジャンゴジャンゴ」と地面につく音がきこえ、どんなすがたなのかは不明なんだって。

夜行さんとにているものでは、福井県のある城あとに、首なしの馬にのった、首なしの武士があらわれるとか。しかも、たくさん出現し、騎馬隊を組んでいるらしいぞ。

夜行さんに殺されないために

夜行さんは、正月、節分、大みそか、夜行日（月に一度くらいの割合でおとずれる、妖怪がでるとされる日）などにあらわれるという。

夜行さんがでるといわれている日は、はやめに家にかえって、夜は部屋でじっとしていたほうがいい。夜行さんがのぞきこんでくるので、まどの外も見ないようにしよう。

もしも夜道で夜行さんに出会ってしまったら、すぐにうしろむきになって、なにかを頭の上からかぶること。かぶるのは、ハンカチでも、服でも、はいている靴でもいい。そして、目をしっかりつむって、見ていないということをアピールすれば、殺されずにすむそうだ。

◀履物を頭の上にのせるなどして道ばたにうずくまれば、夜行さんに殺されないという。

ちょっとだけこわい話

ある女の不幸

昔、ある女が、大みそかの夜にふらりと外にでた。しばらくあるくと、馬の足音が背後からせまっていることに気がついた。

（夜行さんがでた……！）

そうおもった女は、すぐ道ばたにしゃがみこんで、上着を頭からかぶり、かたく目をとざした。

足音は、女のすぐ近くまでせまったあと、だんだんと遠ざかっていく。

（ああ、よかった）

安心した女は、上着を頭からはずし、つい足音がさった方向に目をむけた。その時、夜行さんのうしろすがたを見てしまったのだ。

それから三日間、女は病気でくるしみ、ついに亡くなったという。

山姥

【やまうば】

おもな出現場所
山

こわい？　やさしい？　山にすむ老婆の妖怪

日本各地に言いつたえがある、老婆の妖怪。「やまんば」ともよばれる。

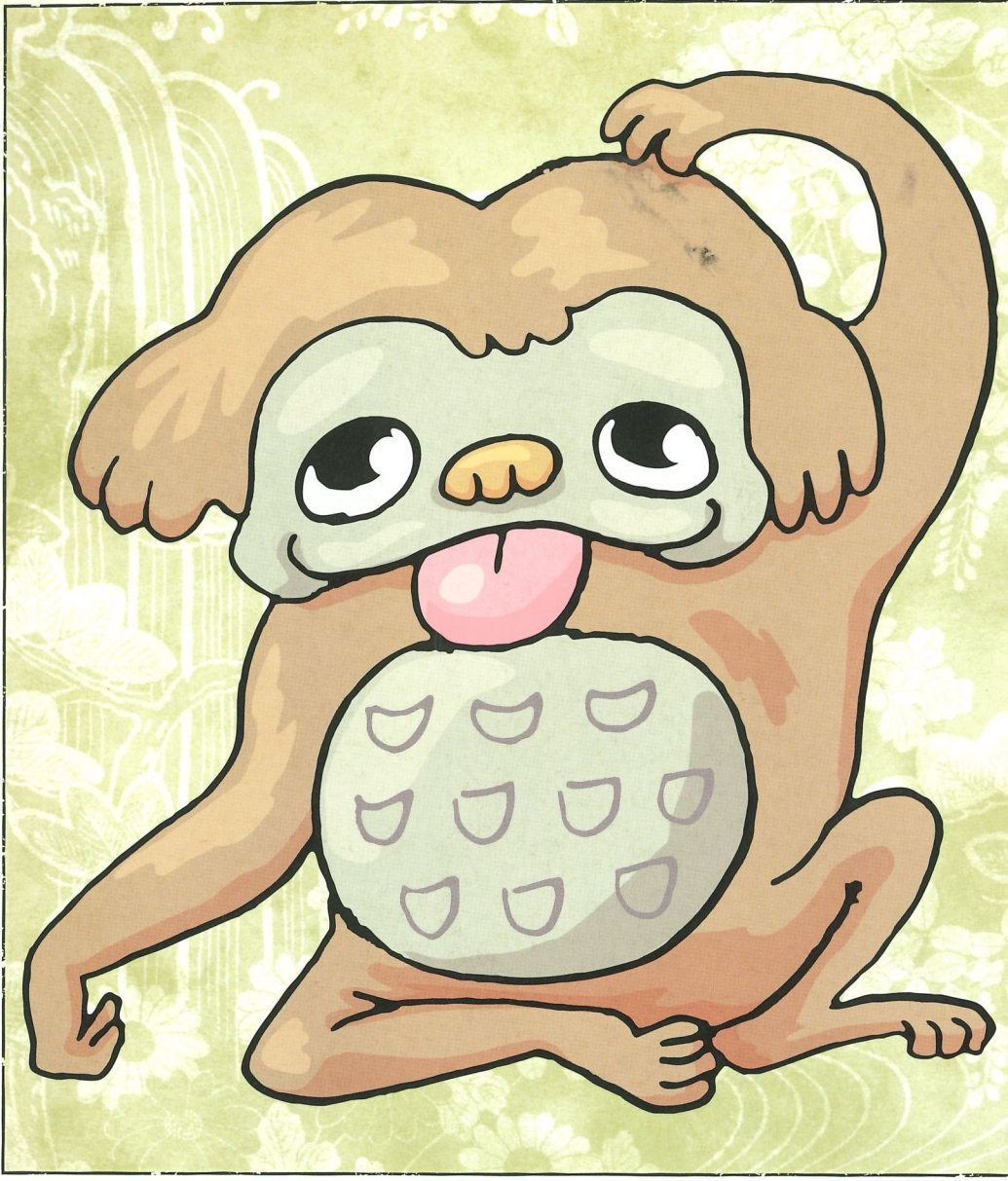
山姥は、山奥の古小屋やほら穴にすみ、まよいこんできた人をまねきいれ、ねむったところを包丁でさし殺して、肉を喰らうという。子どもをさらって喰うこともあり、「三枚のお札」というお話では、寺の小僧をおそっている。

おそろしい伝説ばかりが有名な山姥だけれど、地域によっては、とてもやさしい妖怪ともいわれているよ。

山にまよいこんできた人に食べ物や富をさずけたり、農民に豊作をもたらしたり。えんむすびの世話をしてくれることもある。そういう地域では、山姥は山の神の使者だとかんがえられているんだ。

山彦

【やまびこ】

おもな出現場所
山
崖

人の声をそっくりにまねしてかえす妖怪

山の中で、大きな声で「おーい」といえば、「おーい」と声がかえってくる。「ヤッホー」といえば、「ヤッホー」とかえってくる。きみたちも、一度はそんなあそびをしたことがあるんじゃないかな？

山などの斜面に音が反響するというこの現象は、「やまびこ」や「こだま」とよばれているね。でも、この声の中には、妖怪の山彦がかえしたものがまざっているかもしれないぞ。

山彦は、人の声をまねすることが得意な妖怪で、あちこちの山にひそんでいるという。

山彦がかえしてきた声にこたえて、会話がなりたってしまうとキケンだ。山彦の術にはまって、まいごになってしまうんだって。

雪女

【ゆきおんな】

おもな出現場所
雪山
里

雪山にあらわれるうつくしい女妖怪

すきとおるような白い肌で、真っ白い着物をきている、若くてうつくしい女性の妖怪。雪のふる日の、山や里にあらわれるという。

雪女は、明治時代の作家、小泉八雲が書いた物語が有名だ。そこには、人の命をうばうおそろしさと、子どもをおもいやるやさしさをあわせもつ、ふしぎな雪女がえがかれているよ。

地域によって、「雪女子」「雪女郎」「雪姉サ」などとよばれ、人を凍死させたり、子どもをさらって喰ったりする伝承もあれば、親切にすると福をもたらしてくれるという伝承もある。雪女の正体についても、吹雪の中で死んだ女の霊や、雪の精とされるなど、いろいろな説があるようだ。

雪女のよもやま話

出会った人の命をうばう

雪女は、おもに東北や北陸などにあらわれるが、四国や九州でも目撃情報がある。雪がふりつもる地域ならば、どこでも出現するようだ。そして、多くの地域で、出会った人を殺すおそろしい妖怪とされているぞ。

「つめたい息をふきかけて人を凍死させる」「雪女と言葉をかわすと、近いうちに死ぬ」「雪女に声をかけられて無視すると、谷底につきおとされる」などなど。中には、「雪女に出会ったとたんに死ぬ」なんて言いつたえもあるんだ。

雪女らしき女性と出会ったら、とにかくにげたほうがよさそうだよ。

赤ん坊をだいた雪女のねがい

青森県にでる雪女は、赤ん坊をだいているという。出会った人に、赤ん坊をだいてほしいとたのんでくるんだって。

雪女のねがいをことわっても死んでしまうらしいし、いわれたとおりに赤ん坊をだいても、赤ん坊が巨大化して、その重みで雪にうまって死ぬそうだよ。

死なないためには、赤ん坊の巨大化をふせげばいいんだけれど、赤ん坊の頭の上すれすれに刃物をかざすと、赤ん坊はそれ以上大きくなれないそうだ。巨大化がとまった赤ん坊を雪女にかえすと、雪女が感謝して、宝物をくれるんだって。

ちょっとだけこわい話

小泉八雲の『雪女』

明治時代の作家、小泉八雲が雪女の短編を書いている。それはこんな話だ。

巳之吉という若者が、茂作という老人とともに、冬山にのぼって仕事をしている時、吹雪にあった。近くの小屋で夜をあかすことにしたが、夜中、巳之吉が目をさますと、小屋の中に雪女がいた。雪女は、ねている茂作に白い息をふきかけて殺した。巳之吉には「このことをだれかにはなしたら殺す」といいのこし、吹雪の中へさっていった。

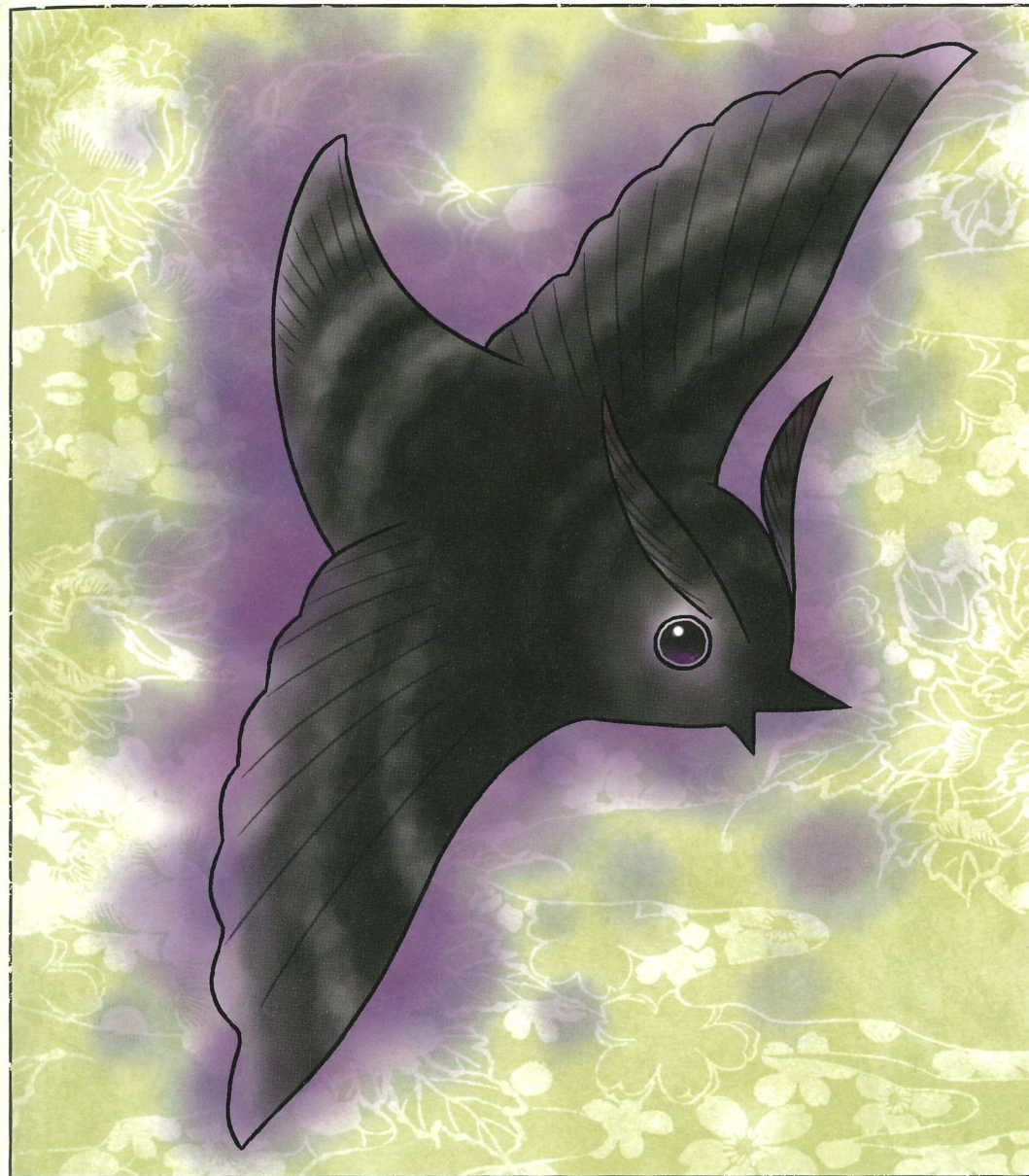
その後、巳之吉はお雪という女と結婚し、十人の子をもうけた。ある夜、子どもたちがねたあと、巳之吉はお雪にむかって、「おまえを見ていると、雪女のことをおもいだす」といった。

すると、お雪が声をあげた。「その雪女は、わたしです。だれにもはなすなという約束をやぶったからには、あなたを殺すしかありません。でも、子どもたちをおもうと、それはできない。どうか、この子たちのことを大事にしてください」

そういうと、お雪の体は白い霧となって、どこかへ消えてしまった。

夜雀

【よすずめ】

おもな出現場所
山道

夜の山道できこえる雀の鳴き声

雀は、昼間はにぎやかになくけれど、夜はまったくなかない。もし、夜の山道をあるいている時、「チ、チ、チ」という雀の鳴き声がきこえたら、それは妖怪の夜雀だ。雀のようなすがたといわれるが、蛾や蝶とにているともされる。

夜雀は、夜の山道をあるく人についていくという。中には、いきなり服の中にとびこんできて、バサバサとあばれるのもいるとか。

追いはらいたければ、こんな呪文がある。「チッチチッチとなく鳥は、シチギの棒が恋しいか、恋しくばパンと一撃ち」ととなえると、夜雀はにげてしまうんだって。

でも、夜雀といっしょにいれば、山の魔物におそわれないという言いつたえもあるよ。

雷獣

【らいじゅう】

おもな出現場所
山
町

雷とともにおちてくる爪のするどい妖怪

雷がおちる時、天からいっしょにおちてくる妖怪。すがたはけもののようで、大きさは子犬くらい。全身に灰色か茶色の毛をはやし、長いしっぽをこすりあわせて雷をおこす。四本の足、または六本の足をもつという。

雷獣の爪は、とてもするどい。雷が落下した木がずたずたにひきさかれるのは、雷獣が爪でひっかいたためだとか。また、雷獣をとらえようとすると、爪でひきさかれて殺されてしまうんだって。

江戸時代には雷獣をペットにした人もいたようで、好物はトウモロコシだったらしい。

地上におちた雷獣は、山の中で雷雲をまつ。雷雲があらわれると、ひょいととびのって、天にかえっていくんだ。

轆轤首

【ろくろくび】

おもな出現場所：家　町

首がのびる、顔がとぶ 人をおどろかす妖怪

轆轤首といえば、ニョキニョキと首を長くのばす女の妖怪として有名だが、顔が体からはなれて空中をとぶものもいる。昔は、むしろ顔をとばす轆轤首のほうがよくしられていたようで、「抜け首」や「飛頭蛮」ともよばれていた。

轆轤首は、人をおどろかすことはあるものの、おそったりのろったりといった悪さはしないようだ。

轆轤首自身も、自分が妖怪だということに気がついていない場合もある。ふつうにくらしている人が、夜ねている時、しらずしらずのうちに首をのばしたり、顔をとばしたりしたんだって。

もしかしたら、きみたちのまわりにも、轆轤首がいるかもしれないよ。

轆轤首のよもやま話

男の轆轤首もいる

昔の書物に、男の轆轤首がいたとしるされている。

あるお寺で、夜中、和尚さんにむかって男の顔がとんできた。和尚さんがその顔をつかまえてなげつけると、どこかににげていった。

次の日、寺ではたらいていた男が和尚さんのもとにやってきて、こうはなした。

「きのう、わたしの顔がきませんでしたか？ じつは、わたしは抜け首の病気にかかっていて、夜中に首がぬけてしまうのです」

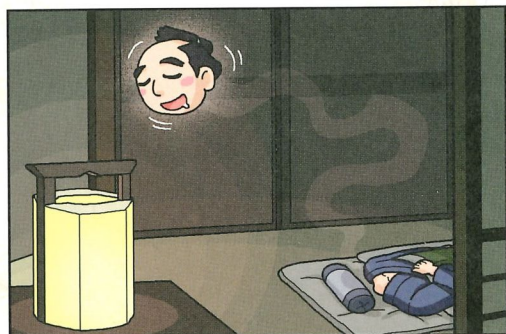
首がぬけるのは、病気の症状だというのだ。ほかにも、この現象は、ねている時に体から抜け出した魂が、顔の形になって空中をさまようともかんがえられ、「離魂病」ともいわれたみたいだよ。

東南アジアにも轆轤首が出現？

轆轤首は、インドネシアやベトナムなど、東南アジアにもあらわれたようだ。昼間はふつうの人とかわりなく生活しているというのは、日本の轆轤首とおなじ。ところが、夜になると体から顔がはなれて、耳をつばさにしてとびまわり、虫などをたべるんだって。

轆轤首は油がすき？

江戸時代の絵や本には、長く首をのばした轆轤首が、あんどん（火をともした室内用のあかり）の油をペロペロとなめるすがたがかかれているものもある。

落語にも「ろくろ首」という演目がある。ある男が、夜中に首をのばして油をなめる娘だとしりながら、結婚するという話だよ。

▲ねている間に体から顔がぬけて空中をさまよう轆轤首は、病気の症状ともされた。

ちょっとだけこわい話

旅人が追いかけた首の持ち主

昔、ある男が旅をしていると、道中で空とぶ首とはちあわせた。男は、刀をぬいて切りすてようとしたが、首はひらりひらりと刀をかわし、やがて民家の中へにげこんでしまった。

男は、首を退治しようと、民家にはいっていった。すると、部屋の中から、女の声がきこえた。

「ああ、おそろしい夢を見た。刀を抜いた男が、わたしを切りつけようと、しつこく追いかけてくる。なんとか家の中ににげこんだところで、目がさめた」

男は、部屋の中にはいり、女に真実をはなした。女は恥じて、世間から身をかくしたという。

わいら

【わいら】

おもな出現場所
山

山にあらわれる一本爪のナゾの妖怪

江戸時代の画家、鳥山石燕がえがいた妖怪のわいらは、次のような特徴をもっている。前足にするどい一本爪をもち、巨大な牛のような体つきで、全身が太い毛でおおわれ、首は地面にたらしている。

作者不明の『化物づくし』という古い書物にも、「はいら」という名で、おなじような妖怪がえがかれている。石燕も『化物づくし』も、上半身だけのすがたしかかかれていないので、下半身の様子はわからない。それらの絵には解説文もないので、どんな妖怪なのか、ナゾだらけだ。

ある説では、この爪をつかって山はだに穴をほり、モグラなどをとってたべるとされている。外見はこわいけれど、おだやかな妖怪なのかも？

輪入道

【わにゅうどう】

おもな出現場所
道
町

顔面がついた車輪見た人の命をうばう

輪入道は、ほのおでつつまれた車輪の中心にお坊さんのような顔がはりついた妖怪だ。日ぐれのころにあらわれて、ものすごいいきおいでころがりながら、町から山のほうへかけあがっていくという。

輪入道があらわれても、けっして見てはいけない。輪入道は、見た人の命をうばったり、その家族を殺したりするのだ。でも、「此所勝母の里」と書いたお札を玄関にはっておけば、難をのがれられるというよ。

昔、ある女がこわいもの見たさで、家の中から輪入道をこっそりうかがった。すると、輪入道がたくさんの人間の足をひきずっているのが見えた。女が部屋にもどると、彼女の子どもは、足をひきぎられて死んでいたという。

動物の妖怪

最後に、動物そのもののすがたをした妖怪たちを紹介しよう。ペットから野生まで、きみたちがよくしっている動物の中には、ひっそりと妖怪がまぎれこんでいるかもしれないんだよ。

狐

人に悪さをする、いたずらずきな妖怪。人のすがたに化けることを得意とし、美女に化けることが多い。狐の名のつく妖怪もたくさんいて、人の体にのりうつる「狐憑き」や、火のようなあやしい光をともす「狐火」、無数の火が行列をつくる「狐の嫁入り」など、日本各地に言いつたえがのこされている。狐に化かされないためのまじないに、「眉につばをぬる」というものがある。

狸

人やものなどに化けることが得意で、昔話にもよく登場する。ある時は老婆に化け、またある時は茶の湯をわかす釜に化けた。狸の名のつく妖怪は、いたずらずきな「豆狸」や、殿中という袖なしの羽織をきた「赤殿中」、狸がともすあやしい火の「狸火」などがいる。腹をたたいて太鼓のような音をならすことでも有名で、童謡では、月夜に寺にあつまり、みんなで腹をたたく陽気な狸がうたわれている。

猫

しっぽがふたつある「猫股」や、死体をうばう「火車」など、猫のようなすがたをした妖怪は数多くいるが、「化猫」は、年老いた猫が、そのすがたのまま妖怪になったものだという。日本では古来から猫を飼う習慣があり、農家ではネズミをとる益獣として、高貴な家では愛玩動物として、かわいがられてきた。人と生活をともにしてきた猫は、身近なペットであるとともに、人間のよい面も悪い面もしりつくしている動物だともいえる。

犬

犬は、猟犬や番犬など、人間にとって役にたつ動物として、古来からしたしまれてきた。その一方で、野犬が多かった昔は、人をおそうキケンなけものだった。年老いて妖怪になった犬は、とくに悪さをしないものと、おそろしいものの両極端にわかれるようだ。「脛こすり」という妖怪は、人の足もとにまとわりつくだけ。「送り犬」は、夜道をあるく人を不気味につけまわす。「犬神」は、人の体にとりつき、病気にしたり殺したりするという。

蛇

蛇は、脱皮をくりかえして成長していくことから、生命や再生の象徴として古くから尊い動物とされてきた。蛇にまつわる言いつたえもいろいろあり、「殺したり、死体やぬけがらをそまつにしたりすると、たたりがある」「ぬけがらを財布にいれておくと金がたまる」「白い蛇の夢を見ると縁起がいい」など、ふしぎな能力をうかがわせるものが多い。蛇のすがたをした妖怪には、人の体にのりうつる「蛇憑き」や、口から火をふく「大蛇」などがいる。

川獺

イタチ科の哺乳類、川獺。古い書物には、狐や狸とおなじように、川獺にまつわる怪異がしるされている。その多くは、うつくしい女や男に化けて、人の言葉をはなすというもの。大きな坊主に化けることもあり、「見越し入道」は川獺が化けた妖怪ともいわれる。また、「河童」に近い妖怪だとする言いつたえもあり、川獺と河童が相撲をとったという話ものこされている。残酷な面もあり、人を殺したり、人にとりついて精魂をすいつくしたりするという。

貂

貂は、川獺とおなじく、イタチ科の哺乳類である。三重県の伝承に「狐七化け、狸は八化け、貂九化け」というものがあり、狐や狸よりも化けるのがうまいといわれている。江戸時代の画家、鳥山石燕は、火柱をあげる数匹の貂をえがいている。貂は火事をよぶ妖怪ともされていて、貂が火柱をあげながらたおれると、その方角に火事がおきたり、貂を殺すと火事になったりするという。また、目の前を貂が横ぎると、不幸になるともいわれている。

蛙

妖怪になるのは身近な動物が多いようで、蛙もそのひとつだ。田畑や川辺にすむ蛙は、昔は今よりもずっと数が多く、とても身近な動物だった。妖怪になるのは、蛙の中でも、おもにガマガエルだったようで、昔の書物に「大蝦蟇」という妖怪がでたと、たびたびしるされている。山奥や渓流にすみ、二〜三メートルの巨体をもっていて、まるで大きな岩のようなすがたをしているという。大きな口で、虫や鳥や蛇をすいこんでたべるのだそうだ。

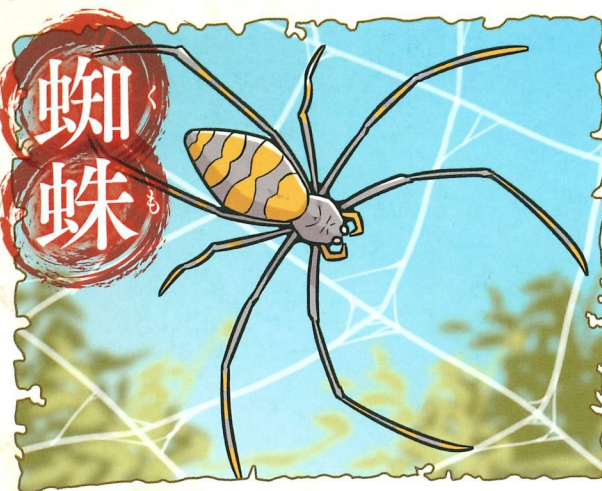
蜘蛛

古い書物には、さまざまな蜘蛛の妖怪が登場する。人間の女性と蜘蛛のすがたをあわせもつ「女郎蜘蛛」や、あやしい術をつかって人を病気にする「土蜘蛛」、人を喰ったり生気をすいとったりする「大蜘蛛」など、おそろしいものが多い。実際に、「ジョロウグモ」という名前のクモがいる。牝のジョロウグモは、体や足に黄色と黒のあざやかな縞模様があり、腹の色は真っ赤である。家の軒下や木の枝などに大きな巣をはり、かかった虫をとらえてたべる。

百足

むしのムカデは、毒をもった大きなアゴで、昆虫や小動物などにかみついてたべる。人間にもかみつくため、害虫ともされる。体長は大小さまざまで、大きなものでは二十センチメートルほどにもなるという。妖怪の百足は、それよりもさらに巨大化したものが多く、「大百足」とよばれる。昔の書物に、蛇の妖怪と敵対していた大百足のことがしるされている。大百足のほうが優勢だったようで、人間が蛇にたのまれて、大百足を退治するという物語もある。

狢

昔の書物や言いつたえには、「狢」という動物の妖怪がよく登場する。地域によって、「狢」はさまざまな動物のことを意味していて、おもに穴熊、狸などだった。悪さをはたらく動物としても有名で、ことわざに「おなじ穴の狢」というものがある。これは、「悪さをする狢がすんでいる穴に、いっしょにいる狢は、おなじように悪さをする」ということから、「悪者と無関係のように見えても、じつは同類である」という意味でつかわれる。

※本書に掲載している妖怪のイラストは、資料等を基にして、
アレンジをくわえたものです。学術的な再現を図ったものではありません。

イラスト

あさだみほ 〈小豆洗い、天邪鬼、一本だたら、火車、シイ、袖引き小僧、鉄鼠、化け草履、ヒョウスベ、べとべとさん、山姥〉

桂イチホ 〈煙々羅、鎌鼬、川姫、砂かけ婆、提灯小僧、氷柱女房、共潜き、人魚、濡れ女子、歯黒べったり、二口女、動物の妖怪（狐、狸、猫、犬、蛇、川獺、貂、蛙、蜘蛛、百足、穴熊）〉

川石テツヤ 〈油ずまし、おとろし、鬼、がしゃどくろ、傘お化け、九千坊、ダイダラボッチ、百々目鬼、鵺、ヒダル神、一つ目小僧、見越し入道、雷獣、輪入道〉

河本けもん 〈垢嘗め、一反木綿、オッケルイペ、カイナデ、河童、加牟波理入道、酒呑童子、人面瘡、槌の子、テンコロ転ばし、塗壁、貧乏神、古杣、魍魎〉

さがわゆめこ 〈牛鬼、長壁、陰摩羅鬼、九尾の狐、件、座敷わらし、硯の魂、手長足長、ぬらりひょん、獏、舟幽霊、ミカリ婆、虬、夜行さん〉

畠瀬廉 〈青坊主、後追い小僧、網剪、海坊主、カシャンボ、髪切り、狂骨、毛羽毛現、子泣き爺、覚、静か餅、ジャンジャン火、不知火、土蜘蛛、釣瓶下ろし、天狗、泥田坊、野鎌、人魂、経立、蓑虫、山彦、わいら〉

よしのえみこ 〈おさん狐、キジムナー、コロポックル、猫娘、枕返し、夜雀、轆轤首〉

米山ともこ 〈産女、木霊、女郎蜘蛛、猫股、のっぺら坊、雪女〉

編集・デザイン・DTP／グラフィオ

執筆／笠原宙（グラフィオ）、川島潤二・木原大輔・上水博貴（キャラテックス）

アートディレクション／弓場 真（グラフィオ）

監修・編集協力／岡崎信治郎（K&S）

参考文献

『江戸怪談集 上・中・下』『耳嚢 上・中・下』（岩波書店）、『日本妖怪大事典』（角川書店）、『鳥山石燕 画図百鬼夜行全画集』『桃山人夜話 ～絵本百物語～』『新訂 妖怪談義』（角川学芸出版）、『小泉八雲名作選集 怪談・奇談』『決定版 日本妖怪大全 妖怪・あの世・神様』『妖怪お化け雑学事典』『DISCOVER妖怪 日本妖怪大百科』（講談社）、『にっぽん妖怪大図鑑』（ポプラ社）、『奇談異聞辞典』（筑摩書房）、『大迫力！ 日本の妖怪大百科』（西東社）、『怪しくゆかいな妖怪穴』『妖怪百貨店 別館 怪しくゆかいな妖怪穴2』（毎日新聞社）、『妖怪の本 異界の闇に蠢く百鬼夜行の伝説』（学研パブリッシング）、『綜合日本民俗語彙』（平凡社）、『別冊宝島 日本の妖怪 妖怪でひもとく日本の歴史と文化』（宝島社）、『日本怪談集 妖怪篇』（社会思想社）、『地獄と極楽がわかる本』（双葉社）、『絵本 地獄』（風濤社）、『民俗学辞典』（東京堂出版）、『日本昔話事典』（弘文堂）

妖怪大図鑑

2015年2月　初版発行

編／グラフィオ

発行所／株式会社 金の星社
〒111-0056 東京都台東区小島1-4-3
電話／03-3861-1861(代表)
FAX／03-3861-1507
振替／00100-0-64678
ホームページ／http://www.kinnohoshi.co.jp

印刷／株式会社 廣済堂
製本／東京美術紙工

NDC388 144P. 25cm ISBN978-4-323-07311-8

Published by KIN-NO HOSHI SYA,Tokyo,Japan
乱丁落丁本は、ご面倒ですが、小社販売部宛にご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。